

---

# 血約騎士は涙のかわりに血を流す

雛月詩音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

血約騎士は涙のかわりに血を流す

### 【Nコード】

N6094F

### 【作者名】

雛月詩音

### 【あらすじ】

血約騎士は血約者の血を使って魔法の力を発現させる。主人公ユラノは血約騎士プリスの下、街に襲いくる吸血鬼たちと戦っている。かつてない規模の襲撃があった日、ユラノは「血の恋人」の少女アカリと出会う。周囲に拒絶され、また自身も周囲を拒絶するアカリをユラノは放っておけなかった。血塗れの中で二人が繋がるダークファンタジー。

## 第一話（前書き）

流血表現多めとなっております。苦手な方はご注意ください。

## 第一話

『——愛が二人を、別つまで』

血約の儀式が終わると、プリスはそつとミオを抱きしめた。

「ごめんね、ミオ」

細くて温かいミオの体を感じながら、そう囁く。

「本当はもっとちゃんとした場所で、血約式、するはずだったのに」  
「うっん」

ミオは首を振る。すこし蒼くなつた顔に、小さく微笑みを浮かべながら。

「いいんですよ、プリス。こうなってしまったからには……仕方ないです」

「……うん」

プリスはミオを抱いたまま、ミオの腕を取る。たつた今プリスが自ら傷つけた、大切な血約者<sup>フリーデ</sup>のからだ。きれいな白い肌にひとすじの傷が刻まれていて、そこから赤い血が流れ出している。ミオだけではない。プリス自身の腕にも同じ傷があり、同じように、血を流している。

それは二つでひとつの誓いの証。騎士と血約者を繋ぐ、絆のかたち。

「わたしたちは、騎士と、フリーデになった」

「はい」

「だから、きつと助けられる。……そうだね」

「そうでなければ……うそです」

プリスはかすかに頷き、ミオから少しだけ体を離した。

「行こう」

壊れた街の中を、二人手を取り合つて走り出す。崩れた建物、瓦礫の山、燃え盛る炎、たなびく黒煙——そして、傷を負つてうずくまる人たち。彼らの呻きが耳に入る。炎が爆ぜる音や、狂ったよう

に打ち鳴らされる警鐘——それらを圧倒して届く、苦悶の声。

異臭が鼻をつく。嗅ぎなれない嫌な匂い。炎の中から風に吹かれて漂い出す、死の匂い。

すべては、吸血鬼の王が引き起した災禍。  
ヴァンパイア・ロード

ミオの言う通り、早く行かなければならない。吸血鬼の手から大切な人を取り戻すために。

不安と焦燥。繋いだミオの手だけが、唯一プリスに安らぎを与えてくれた。

二人は街外れの教会に辿り着く。いくつも並ぶ長椅子の向こう、ステンドグラスから射す壮麗な光の中に、一人の男が膝についている。彼は女性を胸にかき抱き、首筋に顔を寄せていた。

その女性が誰であるのか気付いたプリスは悲痛な叫び声をあげる。

「おかあさん……！」

男が、顔を上げた。

瞳に灯る血のように赤い光——異様で禍々しい吸血鬼の証が、プリスたちを射る。男の肌は死人よりも白く、面貌は絶望的なまでに整っていて、そこには何の表情も浮かんでいない。

「……騎士か」

吸血鬼の王は悪夢のような声で静かに呟き、立ち上がった。抱えられていた女性——プリスの母は、ごとりと重い音を立てて床に落ちる。

「……あ……」

動かない。何が起きたかは——明らかだ。

手遅れだった。おかあさんは、もう……。

「吸血鬼め……」

激情がプリスを衝く。震える手で、手にした儀式短剣を持ち上げる。母は助けられなかった。ならばせめて、一矢報いなければ。力はこの手にある。敵わないかもしれない。それでも。

誰かが、プリスの腕をそっと掴んだ。振り向く。

ミオだ。悲痛な表情で首を横に振っていた。

その仕草でプリスは冷静さを取り戻す。——騎士は一人ではない。  
常に血約者<sup>フリーデ</sup>と共にある。

「ごめん、ミオ……。大丈夫だから」

「……うん」

プリスは再び儀式短剣を構える。今度は激情からではない、明確な意志の下に。

王の周りには、母の他に何人もの女性が倒れていた。みな一様に動かない。おそらくは母と同じように、血を奪われて殺された人たち。

王はその中の一人、小さな少女の腕を取って無造作に持ち上げた。少女は小さく声をあげ——どうやら気絶してただけだったようだ——自分の腕を掴み上げる者を見上げると、少しの後に細い声で泣き出した。

……あの子はまだ、生きている。だったらせめて、あの子だけでも。

「いくぞ。ミオ」

「はい、プリス」

短い確認の後、プリスは呟く。

「——<sup>リンケージ</sup>繋血——」

血約者たるミオの血を介し、二人の魔力が繋がる。プリスの意識の底から魔法の力を解き放つための呪文が浮かび上がってくる。あとはそれを唱えさえすれば、魔法はこの世に顕れる。

詠唱を開始しようとした、そのとき——プリスの真横を赤い風が吹き抜けた。烈風。それは立ち並ぶ長椅子を破壊しながら激烈な速度で王に迫り、肩を射抜いた。

それは赤血色の細長い矢だ。

王はわずかによるめき、掴んでいた少女の腕を離した。少女は床に落ちて小さく声を上げる。彼女を拾い上げようとする王の動きは、新たに殺到する矢に阻まれた。

あの赤黒い矢は、普通のものではない——プリスは予感のもとに振り向く。

赤い光の糸が目に入る。煌く光の粉を散らして空間を巡るそれは、二人の人間を繋ぐ魔力の路——繫血の証だ。すなわち、彼らは。

「教会の騎士……、王を、狩りに来たのか」

三人の騎士が、プリスたちを押し退け教会内に進入する。彼らの持つ短剣から後方へと、一本ずつ赤い光の糸が伸びている。その先に、さらに何人かの気配。おそらくは彼らの血約者<sup>ブリーデ</sup>。

騎士たちは無言で短剣を構える。

プリスはぞつとした。彼らの目的はただ一つ。王の破滅、それのみだ。そのために彼らは手段を選ばない——いま王のすぐそばには、少女がいる。まだ無事な少女が。

「やめ——、」

制止は届かない。騎士の魔法が発動し、それを嚆矢として王と騎士たちの戦いが始まった。王と騎士の魔力がぶつかり、弾ける。閃光と轟音、それらを裂いて響く高らかな呪文詠唱。巻き込まれた教会の壁が、ステンドグラスが砕け、破片がばらばらと降り注ぐ。

激戦の中、しかし王は執拗に少女へと手を伸ばし続けた。プリスはその様子にかすかな違和感を覚える。それほどまでに、今の王は弱っているのだろうか——

「あの子を助けましょう！」

ミオの声で我に返る。プリスは無言で頷くと駆け出した。騎士たちの攻撃は続いている。その射線上に入らないよう、可能な限り速く少女に近付く。

「こっちに！」

プリスに気付いた少女が王から離れようと動き始める。しかしその動きはとても鈍い。王は逃げる少女を捕えようと手を伸ばす。

プリスは今度こそ、意識の底から浮かび上がる魔法を解き放つ。

『刹那の氷花、仇を貫き咲き誇れ——、氷穿花——！』

王と少女の間を氷の柱が穿つ。床から生え出したそれは伸びるに

従い枝分かれし、広がってゆく——まるで花開くように。

プリスは少女に向けて、力の限りに叫びながら手を伸ばす。

「手を！」

氷の花に王が触れる——どろりとした赤光が漏れると、煌く魔力の残滓を残してそれは消えた。王の魔力——物体も魔法も、そして人の身さえも灰燼に帰す 塵化 の魔法。

できた隙はほんの一瞬、しかしそれで十分だった。プリスと少女の手が繋がる。全力でその手を引いた。少女は痛みに顔をしかめながらプリスの胸に飛び込んでくる。相手のほうが身体が大きかったから、受け止め切れずに一緒になってよろめいた。

「大丈夫？ 名前は？」

「……アカリ」

乱暴に切られた真つ赤な髪を揺らして、少女は不安そうに、それでもしつかり呟いた。

急に寒気を感じた。プリスの前方。王が——こちらを見ている。執念。欲望。無表情の底から滲み出した、吸血鬼の本質のような……どす黒い感情に燃える双眸がプリスを、いや、プリスの胸の中の赤い少女……アカリを見すえている。

騎士の放った一際巨大な魔法の矢が、横ざまに王を貫いた。それはすぐに塵に帰され、大穴の開いた体だけが残る。普通の人間ならば明らかに致命傷だが、吸血鬼の王にとっては軽傷程度のものなのか、それはすぐに塞がった。初めから穴など無かったかのように。

ふいに王は飛んだ。屋根を分解し、開いた穴から上の階へ。騎士たちもそれを追って階上へと消える。

「プリス！」

ミオが駆け寄ってくる。心配そうな表情。

「大丈夫、わたしも、この子も怪我してない」言ってから不安になる。「……よね？」

「……大丈夫」

アカリは、腕をさするように抱きかかえながら、自力で立ち上が

った。

「ここはもう危険です……彼らの戦闘に巻き込まれる前に、逃げたほうがいい」

「……いや、まだだよ」

教会の中は、あのわずかな戦闘のうちに変わり果ててしまった。

壁は割れ、長椅子は木片の山と化した。美しかったステンドグラスも、あらかた無残に砕けてしまっている。倒れていた人々はそれらの破片の中に埋もれてしまっていた。

「まだ、生きてる人がいるかもしれない」

プリスの言葉にアカリが顔を上げた。そして辺りを見回し、つぶやく。

「……おかあさん」

この子も母親を攫われたのだろうか、とプリスは思った。わたしと同じように。

「探そう」

「……うん」

プリスはミオと手分けして、瓦礫に埋もれた生き残りがいないか探し始めた。

天井に空いた大穴からは、王と騎士たちが争う音が聞こえてくる。破碎——詠唱——絶叫——苦鳴。ぱらぱらと降る建物の欠片。やがて——

階上から強烈な赤光が射し込んで来た。見上げるプリスの目に、おそるべきものが映る。

直径五メルは超えようかという、巨大な、しかも多重に展開された、魔法陣。

（大魔法の展開式……！）

騎士たちは王を挟んでプリスたちの向こう側にいる。もし今、魔法が完成すれば……

「ミオっ！ アカリっ！ いますぐ——！」

騎士の詠唱は破滅への秒読み。それが唐突に、途切れた。プリス

は頭上を振り仰いで叫ぶ。

「やめろ——っ!!」

それは届かない。

天井が裂けた。視界の上から下へ、奇妙にゆっくりと裂け目が入っていく。そこから漏れ出る赤血色の、どこか不吉な光。続いて姿を現したのは巨大な刃。魔法で産み出された殺傷力そのものの、王を破滅させるため、ただそのために紡がれた魔力の神髄——。

巨大な刃はプリスの真横を通過した。

轟音。教会全体が真つ二つに割れた。そして、そのまま、滑落する。刃を挟んだ向こう側が下へとずれて落ちていく。壁が。散らばった瓦礫が。視界にあるもの何もかもが、冗談のように下方へとずり落ちる。まるでプリスだけが動いている世界から取り残されてしまったような錯覚。

滑落する視界はしかし、唐突に消し飛んだ。

青空が目に入る。向こう岸に、街並みが見える。

プリスと向こう岸の間には、何も無かった。

この街に「岸」などというものはなかった。たった今、騎士の魔法によって、創られたのだ。

プリスは呆然と生まれたばかりの奈落を覗き込んだ。ありえない程の破壊の力。騎士の振るう魔法の極み。

これが、血に宿る魔力。

大きな震動。こちら側まで崩落が及び始めたと知り、プリスは慌てて奈落の縁から離れた。

「プリス……!!」

ミオが必死の形相でプリスのことを呼んでいた。アカリも一緒だった。三人ともが無事であった幸運に、プリスはほっとする。

彼女たちのもとへ辿りついたのと殆ど同時に、本格的な崩落が始まった。崩れかけた柱に必死にすがりついて、ミオの名を呼んで、皆が助かるようにと必死で祈った。

地面と建物が擦れる轟音。不規則に体を打ち据える激震。悪夢の

ような滑落。

耐え切れなくなつて、プリスは声の限りに叫んだ――。

崩落が止まった後で、改めてプリスとアカリは自分たちの母を探した。

しかし結局、二人とも見つけることができなかった。

プリスの母も、アカリの母も、騎士が創りだした奈落に飲まれて消えてしまったのだ。

――三年経った、現在。

プリスたちが遭ったこの災禍は、中心となつた吸血鬼の王の名から取つて、ロード・レーヴァの禍と呼ばれるようになった。

それは人にも、物にも、そして大地にさえも消えない傷痕を残した大災禍として、恐怖と共に人々の記憶に刻まれている。

## 第二話

### 一章

「隷属吸血鬼！ いっぱいいる……！」

悲鳴に近いリンヤの声を背後に聞きつつ、ユラノは駆ける。前方、四層区に密集する廃屋の間隙ではすでに吸血鬼どもと街の住人たちの交戦が始まっている。リンヤの言う通り、いつもよりずっと数が多い。ユラノは襲いくる緊張を振り払うように声をあげる。

「リンヤ、いつも通り！」

「うん！ ユラノ、気をつけて……！」

そう言うと、リンヤは街中に縦横に張り巡らされた高架へと上る。細身の体に白く透けるような肌、そしてそれ以上に白い髪——そんな儚げな外見には似合わない俊敏な動作。彼女はあつという間に上り切ると、先行するユラノについて駆けてゆく。遅れは、ごく僅かだ。

ユラノは走りながら腰に下げた鞘から剣を抜き出した。そして最も近くにいたスレイヴに迫る。敵はユラノに気付き、緩慢な動作で振り向いた。

暗く赤い光、どろりとした、濁った目がユラノを見る。爪を振り上げユラノを引き裂こうとしたその動きが、しかし——急に止まる。スレイヴの脚を、一本の矢が貫いていた。リンヤの射撃だ。ユラノはその隙を逃さない。

「——やあッ！」

気合一閃、上段からの一撃がスレイヴの軀を両断した。柔らかくも硬くもない、中途半端で嫌な手応え。何度体験しても慣れることができない。

「まずは一匹……！」

スレイヴの骸から溢れ出す腐臭に顔をしかめながら、ユラノは鋭

く叫んだ。

まだ数え切れないほどの吸血鬼が、街の中を徘徊している。

四層区東門を破って、壁の中に隷属吸血鬼の大群が侵入——。ユラノたちが所属するフリジア警備隊のもとにその報せが届いたとき、折悪しく主戦力である隊長たちは不在。ユラノとリンヤは、二人でこれに対応することになった。

不幸中の幸いだったのは、現場が四層区——すでに放棄された、誰も住んでいない区画だったこと。しかし吸血鬼の数は多く、すでに四層区の半ばにまで侵入している。もしも三層区への門が破られるようなことになれば、一般住民に被害が出ることは避けられない。何としても、吸血鬼どもを四層区で押し止める必要があった。

渦巻く怒号と呻き声。吸血鬼の爪と武器がぶつかる金属音。至るところで住人たちと吸血鬼が熾烈な争いを繰り広げている。

通りには、一見して数え切れない程の吸血鬼の骸。幸いにしてその中に倒れた住人の姿は見られない。

また一体、ユラノに向かってスレイヴがやって来る。

人のようでありながら決定的に歪んだ姿。王<sup>ロード</sup>たちの下僕、腐肉から成る生ける屍——隷属吸血鬼。それは得体の知れない呻きを垂れ流しながら、壊れた操り人形のような動きで迫り来る。動きは緩慢、しかしその腕にある爪、頭部の牙には、人をたやすく殺めるだけの力が備わっている。

爪牙に注意しながら、ユラノはスレイヴに切りかかる。動きはそれほど素早くないため、油断さえしなければ一対一でも何とか退けることができる。

一対一ならば——

「ユラノ後ろっ！」

リンヤの声。反射的に振り返ろうとしたユラノの体が、跳ね飛んだ。家屋の壁に激しく叩きつけられて息が詰まる。視界の端に、一

体の、スレイヴ。腕を振り上げている。爪、何かよく分からないもので穢れた爪が振り下ろされる――

ユラノは思い切り身をひねった。頬を浅く抉り、爪は背後、木製の壁を破壊する。反撃しようとしたところに敵は体ごとぶつかってきた。視界いっぱい腐った軀、背中が強烈に圧迫され、壁が拉げられる。一緒になって倒れ込んだ。

「うあああッ！」

叫びながら無理矢理、剣を敵の腹に突き刺す。刃は容易く肉を穿つ、が、敵は止まらない。スレイヴは腕を振り上げ叩き付ける。爪がユラノの腕を裂く。血があつという間に衣服を赤く染める。痛みと切られたという精神的な衝撃が視界が霞ませる。言葉にならない叫びを上げ、ユラノは敵の腹に刺した剣を全力で引く。刃が抜ける――スレイヴは腹部を割られて支えを失う。体をひねり、何とか不利な体勢から抜け出した。

背中を割られたスレイヴはうまく平衡を取れないでいる。ユラノは立ち上がると、剣を振り下ろして頭部を破壊した。ようやくスレイヴは動かなくなる。しかし。

壁に開いた穴の向こうに、新たなスレイヴが姿を現す。

「くっ……」

ユラノは後ずさった。傷つけられた左腕がずきずき痛む。踏みしめられた床がぎしぎし軋む。

スレイヴが、来る。そのとき背後から、声が聞こえた。

「ひっ――」

少女のような高い声。ユラノは反射的に振り返り、そして、驚きに目を瞠った。

（……どうしてっ、こんなところに）

建物の奥。元は食卓だったと思しきテーブルの陰に隠れるように、二人の少女がいた。一人は五歳くらいだろうか、まだ幼い少女。もう一人は、ユラノと同じ年頃――十四、五歳と見える少女。年長の少女は、ちいさな少女をかばうように抱き締めている。

木が踏み碎かれる音。スレイヴはゆっくりと家屋の中に侵入してくる。そして――

少女らを、見た。

「ひいっ」幼い女の子が悲鳴を上げる。スレイヴはユラノを無視して彼女らのほうへ歩き出す。背中がから空きだった。ユラノは剣を叩き付ける。断たれて転がるスレイヴの軀。

「う、うえええええ」

広がる腐臭とスレイヴの死骸で限界を超えたのか、ついに若い少女が泣き出した。

「早く逃げないと!」

ユラノは切羽詰った声で言う。

「分かってる」

女の子をかばっていた年長の少女が答えた。緊張のせいか、とても硬い声。ユラノを、まるで睨みつけるような鋭い眼差しで見ている。深い赤色の瞳だった。髪も同様に赤い。対して顔色はやや優れず、赤と白の対比が鮮烈に映った。顔色が悪いのは、状況のせいだろうか。

赤い少女は泣いている女の子に視線を合わせて、ゆっくりと言った。

「ほら、逃げるぞ。大丈夫か?」

すこしだけ柔らかく、陰の取れた声だった。女の子は声に出しては返事しなかったが、こくりとわずかに頷いた。

「僕が護衛する。えっと……」

「アカリ」早口で言う。「こっちは子は知らない」

小さな少女は怯え切った様子だ。名前を聞くことはできそうにない。

「……行こう」

ユラノは手を差し出した。アカリはそれを一瞥、冷たく告げる。

「あたしらと手繋いでたら、戦えないだろ」

「そ、そうだね」

もつともな話。ユラノは慌てて手を引いた。

出入口から周囲を伺い、スレイヴの姿が見えないことを確認。三人は通りに出た。

薄暗い路地。少ないスペースに沢山の家屋を詰め込むように建てたため、街の路地はどこも狭い。隠れて進むには適しているとも思えるが、反面、どこからスレイヴが現れるか分からない恐怖もある。強く叩き付けられた背中と、爪を受けた左腕が今更のように痛みを訴える。

曲がり角まで歩いて行き、そつと路地の様子を伺う……スレイヴは、いない。

「大丈夫、こっちに来て」

手招きしてアカリたちを呼び、次の路地に向かう。

と、前方の曲がり角の向こうから、ざり……ざり……と、土を踏みしめるような音がする。

歩むような——重たい、音。

「ここに居て」

声を潜めて言う。アカリは神妙に頷く。剣を構えつつ、ユラノは慎重に角から顔を出す。

スレイヴと目が合った。

「——！」

飛び退く。涎ともつかぬ怪しい汁を口からこぼしながら、スレイヴは奇怪な動きで頭部を揺らした。獲物を探るような動き。

それは、アカリたちに視線を合わせる。ひつ、と、小さな少女が、恐怖に慄いた。

「あつ、こら——」

慌てた声。振り返ると、少女がアカリの手を離れ、泣きながら走り去っていくのが見えた。

「そっちは！」

門同士を結ぶ大通りのほう——スレイヴが、最も多い場所だ。目を離れた隙に目の前のスレイヴが襲いかかってくる。何とか身

を躲し、距離を取った。少女を追うか、目の前の敵を斃しておくべきか、すこしだけ迷って——ユラノは前者を選んだ。踵を返して二人を追う。

前方、路地と大通りが交差する辺りでアカリは少女に追いついていた。今度は放さないようにぎゅっと手を繋いでいる。

ユラノは安堵する。が、それも一瞬のこと。彼女たちのすぐそばに一体のスレイヴが現れる。

「あぶな——」

絶大な戦慄が叫びを途切れさせる。

ユラノの見ている前で、スレイヴの軀が、開いた。胴体前面、胸から下腹部に至るまで縦一直線の裂け目が入り、扉が開くように左右に割れた。スレイヴの中身、大小無数の牙が乱雑に生え、異様な粘液が糸を引く、不気味に蠢く赤黒い臓。

それは人から血を奪うための姿、吸血鬼の真髄——吸血態。

もはや人の形すら止めなくなったスレイヴから、しかし、アカリは逃げなかった。覆いかぶさるようにして少女をかばったのだ。

やけに、ゆっくりと——軀を開いたスレイヴが、アカリにのしかかる過程が見えた。

「うつ、ぐ……」

アカリの苦悶が、はっきりと耳を打つ。赤。背中に食い込む無数の牙。滲み、溢れ、流れる血。少女の泣き叫ぶ声が、どこか遠い。

「——こ、のっ……！」

ようやく追いついたユラノは、一撃の下にスレイヴを切り伏せる。動かなくなった骸をアカリから引き剥がし、彼女の状態を確かめる。アカリは——動かない。服はぼろぼろに破れ、酷い傷が覗いている。血に塗れた背中はどこからどこまでが傷口なのかよくわからないほどだ。

「っ……」

小さく呻く。まだ息はある、が——早急に手当てしなければ、このままでは——。

「あ、ああっ」

少女の体の下、女の子が悲鳴をあげる。ユラノは振り向く。スレイヴが来ている。手前に二匹、少し向こうにもう一匹。更に先ほど路地で遭遇した一匹も迫りつつある。

（このままじゃ）

アカリが一緒では逃げられない。戦うしかない。

だが、できるのか。四体。二体でも厳しいというのに、四体。しかも傷付き倒れたアカリと、無力な少女を守りながら戦わなければならない。リンヤや他の人の援護もない。

……駄目かもしれない。

体の中身がひっくり返りそうな気持ちの悪い感覚、絶望感。スレイヴが爪を振り上げながらゆっくりとしかし確実に迫ってくる。そして——冷気が、頬を撫ぜた。

『—— 氷穿花 ！』

ユラノの目の前のスレイヴが、地から伸び上がった氷の柱に貫かれ、宙吊りになった。さらに氷柱から枝分かれした細かな氷の尖端が、スレイヴを内側から破壊する。

花開くような、氷の蹂躪。

一瞬のうちに四つの氷花が咲き、その場のすべてのスレイヴは破壊された。ユラノは大きな安堵とともに振り返る。

三層区へ向かう道の先から、凜とした冷風が吹き付けてくる。いつのまにか道は霧に覆われていた——それを裂くように、二人の人影が現れる。

一人は右手に短剣を握った少女だった。まだ幼く、年は十歳程。しかし彼女の淡青色の瞳には年齢相応のあどけなさは感じられない。きつと前を見据える眼差しには、知性と勇敢さが同居している。

もう一人は、やや柔らかな印象を持つ少女。隣の少女に比べると頭ひとつ分ほど背が高い。彼女は左腕だけ袖の無い服を着ていた。

隣の少女に寄り添う彼女の左腕には、鮮烈な赤色——血の跡があった。

「隊長！」

「わたしたちが来たからには、もう大丈夫」

短剣の少女はユラノを見て微笑んだ。そうすると年齢に沿った、可愛らしい表情になる。

だが、笑顔はすぐに消える。道の先から新たなスレイヴどもが現れたのだ。数は五。

二人の少女は鋭く、言葉を交わす。

「いくぞ。ミオ」

「はい、プリス」

片袖の少女、ミオは晒した左腕を持ち上げる。まるで捧げるような所作。

短剣の少女、プリスはミオの腕を取ると、短剣を静かに当てがつた。

そして、そっと——しかし素早く。短剣を使って、プリスはミオの腕を切る。

血が流れる。ミオはその様子をじっと見つめている。眉ひとつ動かさない。

プリスの持つ短剣が、ミオの血で赤く染まる。血が短剣の腹に刻まれた溝を満たし、複雑な紋様を浮かび上がらせる。——儀式短剣に、血が通う。

プリスは短剣を持ち上げ、スレイヴどもを狙うように切っ先を突きつける。

そして小さく、はつきりと呟いた。

「繫血」

短剣が赤く輝く。その光はミオの指、嵌められた指輪に伸び——繋がった。プリスの短剣とミオの指輪、二人を結ぶ、赤い糸。

『貫け氷花。刹那の墓標となれ——』

プリスとミオ、二人の口から魔法の呪文が紡がれる。詠唱に呼応

して周囲の気温が急激に下がり、霧に煙る。その中に浮かぶのは五本の氷の槍。

『―― 烈氷槍 ！』

槍が射出される。猛烈な速度で飛び、スレイヴどもを次々貫く。瞬きほどの間に五つの凍えた肉の塊が出来上がっていた。

プリスはほつと息をつき、短剣を下ろした。二人を繋いでいた赤い糸が光の粉を散らして消滅する。そしてユラノたちのところまでやって来た。

「…… 酷い怪我」

アカリの傷を見たミオが痛ましそうに顔を歪めた。プリスも怒りをこらえるように眉根を寄せる。その顔を見たユラノは、まるで自分が責められているような気になった。

「ユラノ。きみは大丈夫？」

「うん……ごめん、隊長。僕がもつとしっかりしていれば」

「いや、仕方ないよ。それを言うなら、わたしたちがもつと早く来てればね……」

そう言つて、自分の短剣を見るプリス。

彼女はすぐに顔を上げた。

「スレイヴはわたしたちが片付ける。ユラノはこの子たちを逃がしてやつてくれ。……でも、その前に応急手当が先か」

ミオが驚いたような声をあげた。そこには焦りの色がある。

「プリス。この子」

アカリの顔を見たプリスも驚きに目を睜った。

「……アカリか」

そして切羽詰った声で言う。

「ユラノ、できるだけ急いで、この子をチウ爺のところ連れて行くんだ」

急に態度を変えたプリスを、ユラノは訝った。

「どうしたの、なんで……」

「……噂くらい聞いてるだろ。この子は――」

プリスはやるせないような、憐れむような、しかしどこか悔いて  
いるような、とても複雑な表情で言った。  
「血の恋人　なんだ」

### 第三話

「チウ爺、あの子は？」

「何とか出血は止まった。意識はまだ戻らないが、命に別状はなからう」

ユラノはその言葉を聞いて、ほっとする。

チウ爺はユラノたちフリジア警備隊の面々がいつも世話になっている医者だ。年齢は三十歳後半、けて老いてはいないのだが、その容貌——顔の下半分を覆う豊かな髭、そして髪。その多くが白髪となっている——があまりに老け込んでいたので、爺と呼ばれている。

医務室の扉を閉め、アカリのものだろう血がついた白衣を脱ぐと、チウ爺はどっかりと椅子に腰かけた。そして深く息をつく。

「見た目は酷いものだったが、スレイヴの吸血態による傷だったのが幸いしたな。あれは血はたくさん出るが、傷自体はそれほど深くない」

「でも、チウ爺は流石だね。……あの子、血の恋人なんだよね」

「ああ、そうだな……」

チウ爺はやや、苦々しい表情になる。

「俺でも、厳しいかもしれん」

「どういうこと？ 血を止めたのはチウ爺でしょ？」

「いや、あの子はいつも自分用の止血薬を持ち歩いてるんだ。どうやって作ってるのか知らないが、これが素晴らしい効き目だな。俺も作り方を聞きたいくらいだ」

そう言ってチウ爺は少し寂しげに笑った。

「まあ、でも……あの子が助かって、よかったよ。ありがとう、チウ爺」

「なに、目の前で死にかけてる奴がいたら助ける。それが医者というものだ」

頼もしい医者存在に、ユラノは心の底から笑顔で頷く。

「あの子の様子、見てもいい？」

「構わないが、静かにな」

「うん」

ユラノは静かに扉を開け、医務室に入った。

開け放たれた窓から風が吹き込み、カーテンがそよいでいるのが目に入る。やわらかい夕陽。その下、二つある寝台の内、ひとつに人が横たわっている。

目を閉じて眠っている、真つ赤な髪の少女。顔色が悪い上に寝息が薄く、どきりとする。

彼女は、ユラノが守り切れなかったから酷い怪我をしてしまった。布がかかっていて見えないが、きっとその体は包帯に覆われているのだろう。

もう少し、僕がしっかりしていたら――。プリスは仕方ないと言ったが、それでもそう考えてしまうのを止められない。

例えばプリスたちのように魔法が使えたなら、彼女のことを守れただろうか。

怪我させることなく、安全に逃がすことができただろうか。

この手に、もっと強い力があつたなら……。

「ユラノ。ここにいたんだ」

ふと聞こえた小声に振り返る。そこに居たのは白い長髪、薄い翠色の眼をした少女。

「リンヤ。今戻ったの？」

「うん。街中に残ったスレイヴが居ないか、見回りしてた」

「そっか、お疲れ様。怪我なかった？」

「わたしは大丈夫だよ。一番安全なところにいるもん。……それよ、ユラノ、左腕」

「ああ、これは大丈夫。チウ爺に診てもらったから」

ユラノの左腕には包帯が巻かれている。先ほどの戦いでスレイヴに負わされた傷だった。

「そっか……うん。大丈夫そうで、よかった」

リンヤは心配そうな顔から一転、安堵の笑みをこぼす。

「あつ、そうだ。プリスちゃんが呼んでるよ」

「隊長も戻ってきたんだ。分かった、行くよ」

ユラノは去り際、ちらと赤い少女——アカリを見た。その瞬間、リンヤに手を掴まれる。

「早く、いこ」

「あ、分かったって。そんなに急がなくても」

四層区旧東門におけるスレイヴ群の襲撃事件は、プリスとミオの参戦によって速やかに終結した。この事件は結果的に死者こそ出なかったものの、多数の軽傷者と十人を超える重傷者を出した惨事として、街の住人たちを恐れさせることとなった。

「……という訳で、四区東部は完全閉鎖。三区東門もそれに伴って封鎖、つてことになったよ」

ユラノたちは警備隊舎の食堂、兼会議室として使われている部屋に集まっている。事件の顛末と、それに伴う決定事項をプリスから聞くためだった。

「あそこ閉鎖するんだ。……っていうか、ミオとカイは？」

出席者は隊長のプリスとユラノ、リンヤ。また隊員ではないのだが、ついでだからとチウ爺も同席している。

他、プリスの血約者であるミオと、カイという少年を加えた五名がフリジア警備隊の全隊員なのだが、今この場に彼らの姿はなかった。

「ミオもカイもタゴはんの支度。カイにはミオから話すからいいので、四区の閉鎖だけだね」

「あ、うん」

「前々からそんな話は出てたんだよ。あそこの廃墟群、小さな子どもたちの遊び場になってたからね」

「ああ——」ユラノは納得がいった。「あの女の子」

「そう、ユラノが遭遇した子ね。隠れんぼでもしてたんじゃないかな」

「じゃあ、あの赤い髪の子も？」

一緒に遊んでいたのだろうか。やけに攻撃的な目付きと口調だったが、女の子に対するときは優しいだった。

「いや、アカリのことは知らない」

プリスは否定する。アカリという名を口にする瞬間、妙に素っ気無い口調になったのが気になった。問い質そうかとも思ったが、そうする前にチウ爺が口を開く。

「あの子はどうも、ときどき街の外に出ているようだな。そのときに四区東部を通っていたのかもしれない。あそこから出れば、見咎められることもないしな」

「まあ、それはともかく」

プリスは半ば強引に話を進めた。

「今回みたいなことがあると危険だから、四区東部は完全放棄。今回破られた四区の東門も、昔一回破られたところをまたドカンだったからね。直してもまたやられるかもしれないし、というかみんな安心できないだろうし、だったらいつそ無傷な三区の門を強化しようっていう話になったわけ」

「質問」リンヤが手を挙げる。

「はい、リンヤ」

「子どもたちは、どうやって四区に入ってたの？ 三区の門からは出られないよね？」

「うん。答えは単純で、壁に穴が空いてたのね」  
「なるほど」

「だから明日、壁の穴を塞ぐ作業をするよ。これはみんな、あ、チウ爺は別だけど。みんなにも手伝ってもらってから、あとでよろしく」  
「俺だって別に、手伝っても構わんぞ」

「チウ爺が怪我したら誰が怪我人診るのよ。自重してよ。若くもないんだし」

「……お嬢に言われたら黙るしかないな」

親子ほどに年の離れた二人のやりとりに、ユラノとリンヤの両名苦笑。

そこで厨房からミオがやって来た。おっとりした声で言う。

「はい、ご飯できましたよ」

「よし、話はひとまず以上！　ご飯にしよう」

プリスの一声で、ユラノとリンヤは会議室を食堂にするために動き出した。すなわちテーブルにクロスをかけ、食器を用意し、プリス専用の椅子を部屋の隅から持ってくる。

「じゃあ、俺は一度帰るぞ」

腰を上げたチウ爺に、ミオが言った。

「チウ爺の分もありますよ？」

「いや、あいつらが待ってるからな。すまんが、また今度だ」

「相変わらず家族思いの親父さんのようね。いいことだ」

「おう」

片手を上げての挨拶の後、チウ爺は出て行った。

「……あれ、チウ爺帰っちゃったんだ」

そう言いながら食堂に入ってきたのは、やせ気味の体つきをした少年。中性的な顔立ちをしていて、ひらひらした微妙な少女趣味のエプロンが妙に似合っていた。彼の手にも盆があつて、夕飯が山盛りになっている。

「まあ、いつものことだよ……というか、家族放っぽってこっちで食べる、なんて言われたら逆に心配しちゃうしね」

「確かに、そうだね」

そう言つて少年——カイは微笑む。少しだけ頬を緩ませる、静かで穏やかな笑みだった。

「手伝うよ、カイ」

ユラノはカイの持っていた料理を受け取って食卓に並べていく。リンヤもミオを手伝う。そうしてすっかり支度が整うと、みなそれぞれ席についた。

「それじゃ」

プリスがわざわざばかり佇まいを正し、食事の始まりを告げる。

「今日は大変なことがあったけど、みんな無事に揃って食事ができることにまず感謝を。そしてこれからわたしたちの一部になる、動植物たちの聖なる血肉にも感謝を。いただきます」

プリスが略式の祈りを捧げると、他の四人もそれぞれに「いただきます」と唱和した。

「さあ、食べるぞー」

まずプリスが、専用の椅子——座高が高く、足をかけるための横木がついている子ども用のもの——から身を乗り出し、食卓の中央に山盛りになっているニンジンや干しぶどう入りの青菜サラダに手を伸ばす。

「ミオも今日は、いっぱい食べないとね」

「うん。私はこれ」

ミオの前にあるのは鶏のレバーソテー。量が尋常ではなかった。他の四人の前にも鶏肉のソテーがあったが、ミオのものは少なく見積もっても二倍以上。それを楚々と切ってはしずしずと口に運んでいる。

「ミオは相変わらずだね……。感心するような、うらやましいような。あ、ユラノ、その胡椒とって」

「はい」

リンヤはほうれん草の卵とじに胡椒をふりかける。軽快な調子。

彼女はいつも、そうやって楽しそうに食事をする。

ただし好き嫌いが激しい。

「……」

しかもより分けたピーマンなど苦い系の野菜を、無言でユラノの器に載せてくる。そして目が合うとにつこり笑うのだ、「今日もよろしくね」と。ユラノは苦笑いしつつそれを食べる。

カイは静かだ。あまり自分から何かを話し出すことはなく、聞き役でいることが多い。何か訊ねられればはつきりと答えるので、特

に話すのが苦手というわけでもない。

いま食卓にのっている夕食は、たいてい彼の作だった。そら豆のスープ、バスケットいっぱいパン、野いちごやオレンジなどのフルーツ……今日はいつもと比べても豪華だった。プリスが言うところの「大変なこと」があつた日には、たいていこんな風に食卓が華やぐ。警備隊の中でただ一人吸血鬼と戦うだけの力を持たないカイは、みんなへのせめてもの貢献といって炊事洗濯といった家事に精を出しているのだ。

いつもの和やかな食事風景。

ユラノはこのとき、とても落ち着いた気分になる。みんなと一緒に食事ができることをとても大切なものに感じている。

仲間のようでもあり、家族のようでもあり、そのどちらとも少しずつ違うような気もする、うまく言えない関係の五人。ただ少なくとも、こうして食事を採っているときは、まるで家族のようだなと思う。

それはもう、ここにいるみんなが失ってしまったもの——  
この五人はみな、もう、身寄りを亡くしてしまっている。

「ねえ、プリスちゃん。『壁の中』の用事、どうだった？」

みんなすっかり満足ゆくまで食べ、食後のホワ茶を楽しんでいると、リンヤがそんなことを言った。

「ああ」

自分用の椅子に座って足をぶらぶらさせ、ミオと干しぶどうの食べさせっこをしていたプリスは、思い出したように席を立った。そして部屋の隅に置いてあつた麻袋からそれを取り出す。

「ばっちり。二人分」

プリスは大事そうに、それを卓の上に並べた。

それは、二組の血約具——儀式短剣と、血約指輪。

「うわぁ……」

リンヤが感極まったような声をあげる。瞳がきらきらと輝くよう

だった。

「これが……」

ユラノも湧き上がる興奮を隠せない。置かれた短剣と指輪をまじまじと見る。

儀式短剣の刃渡りは二〇センチほど。柄のこしらえはとても簡素で、普通の短剣とほとんど変わりが無い。ただ、刃と握りの連結部分に大きな赤い石がはめこまれているのが大きな違いと言えた。

しかし儀式短剣の最大の特徴は、そこにはない。

「ね、隊長。さわってもいい？」

「もちろん。それぞれ、ユラノとリンヤのために造ってもらったんだから」

ユラノは鞘に納まった短剣を手にとり、そつと引き抜く。無垢の剣身が窓から差し込む夕陽を反射して、鈍く光った。

その剣身こそが儀式短剣の最も特異な点。そこには溝が刻まれている。複雑精緻な紋様を描く、幅・深さともに三ミル程度細く浅い溝——それは、血を流し込むための流路だ。

儀式短剣は騎士のための魔法具。血約者の血を取り込み、魔力を受けて魔法を発現するための媒体だ。溝に血が流れ込んだとき浮かび上がる紋様が、血に宿る魔力の利用効率を増幅する。この紋様こそ、儀式短剣の設計において最も重要視される点だった。

「魔力増幅流路は最新式のを使っただって鍛冶師が言ってた。わたしが使ってる三年前のやつよりも、いいやつだ」

「へえ……」

「指輪も最新式？」

リンヤは指輪のほうに興味がある様子。彼女はどちらかというとブリーデ志望なのかもしれない。

「そっちは特に……。というか、指輪のほうはもうずっと前から、技術的には変わってないよ」

「あ、そうなんだ」

少し残念そうに、それでも大事そうに、指輪をじっと見つめる。

指輪のほうは、儀式短剣と同じ赤い石がはまっている以外に特別なところは見られない。短剣よりもつくりが凝っているのは、指輪がもともと装飾具だからだろうか。

「これで、いつでも血約できるのか……」

ユラノは感慨深い思いでそう呟く。騎士。ブリーデと深い絆で結ばれ、強大な魔法の力によって吸血鬼どもを撃滅する者。……憧れだった。

「それについて、ひとこと言っておくよ」

プリスが言う。少し、真面目な声音だった。

「血約するということを、簡単に考えてはだめだ。する前によく考え、覚悟を決めること」

「覚悟」

「そう、覚悟。相手を傷つける、覚悟」

その言葉を聞いた瞬間、儀式短剣が重みを増した気がした。

「魔法を使うには、ブリーデの血が要る。その血を流させるのは、騎士の務めだ。自分じゃない、他人を傷つけるのだから——しかもそれが大切なブリーデなんだから、これはもう並大抵の覚悟でしちやいけないってことは、分かると思う」

「……うん」

「はつきり言うと、わたしはきみたちに血約して欲しくないと思ってる。それでも血約するっていうなら、止めない。けど、その前に——」

プリスの目が、据わった。

「——傷をつける練習くらいは、するべきだね。もちろん自分の体で」

口元は笑っている。というより、口元しか、笑っていない。ユラノは少し冷たい汗が背筋を流れていくのを感じた。

「隊長も……練習、したの？」

「そんなこと、私が許しません」答えたのはミオだ。「それにプリスは上手ですから。練習する必要なんか、ないんですよ」

微笑んで言う。

「魔力の変換効率も高いですしね。あんまり血を流さなくても、十分な魔力を取り出してもらえますから……」

「わたしたちの相性がいいんだよ。でも、ミオのためには、もっとずっと効率を高めないとね」

「今のままでも、私は十分ですよ」

手と手を取って、二人は笑い合う。

「……これが、騎士とブリーデというもののね……」

いたく感心した様子で、リンヤがそう呟いた。

その後リンヤは、ミオとブリーデ談義を始めた。ミオの付き添いとしてプリスも一緒。ブリーデにも傷つけられる覚悟が必要なんですよ、それはですね——ふんふん、それで——などと、話の断片が伝わってくる。

ブリーデか……、とユラノは思った。騎士になるには相手がいる。それは誰になるんだろうと、短剣と指輪を見ながら、ぼうつと考えていた。

血約。騎士にはなりたいたいと思うけれど、実際にすることを考えると、どこか遠い話だ。ただ、とりあえずは、この短剣と指輪を肌身離さず持つていようと思う。お守りのようなもの——これを持つていると、何だか心強い気がしてくるのだった。

そうやってしばらく話しこんでいると、廊下のほうで物音がした。音の主が姿を現す。食堂の脇を通って建物の出口へ向かう廊下。

赤い髪、青白い肌を粗末な服に包んだ少女——アカリだった。ユラノは反射的に席を立つ。

「だめじゃないか、まだ寝てないと」

「……うるせえな」

気だるそうに言い返す。顔色が悪い。少し汗もかいているようだ。やや乱れた袖口から、血のついた包帯がのぞく。

アカリはそのまま出口のほうへ歩いていく。ユラノはその後を追

った。

「だめだつてば。チウ爺に診てもらわないと」

言つても止まらない。仕方なく、ユラノはアカリの肩に手を伸ばした。

彼女は出し抜けに振り返る。きつとユラノを睨みつける。鮮烈な赤い瞳が、よく見えた。瞳の輪郭は、少しだけ、曖昧に揺れていて――

「……うるせえつて、言つてんだろ！」

物凄い剣幕で怒鳴られた。反射的に手を引つ込める。

カイも食堂から出てきた。

「アカリさん、酷い怪我だったんだから、もう少し休んでいてもいいんだよ？」

アカリの視線がカイに移る。

「一晩くらい……」

「あたしは帰る。こんなところで油売つてる暇はねえんだ」

「でも」

「……治療してくれたことには感謝する。ありがとう。じゃあな」  
ほとんど棒読みの礼を述べると、アカリは今度こそ出ていった。

ユラノはしばし呆然と、閉まった扉を見つめていた。食堂に戻るうかと思う。だけど。

血の気が失せた顔。覚束ない足取り。折れてしまいそうに細い手足。何より、頼りなく揺れる真つ赤な瞳が――とても、心に、引つかかる。

気がつけば扉の取っ手に手をかけていた。

「あつ、ユラノ……」

壁の陰からこっそり様子を伺っていたリンヤが驚いて声をあげる。  
「やっぱり放っておけないよ！　せめて送ってくる！」

そう言つと、ユラノはアカリを追つて外へと駆け出した。

「ユラノ……、なんであんなに必死なんだろ」

リンヤはつまらなそうに呟いて、食堂の自分の席に腰掛ける。するとプリスが口を開いた。

「……放つときなよ」

素っ気無い口調。少し俯いているので、リンヤからは表情が見えない。

「でも、あの子……血の恋人なんでしょ？ だったら」

「あんまり、関わり合いになるべきじゃない、って？」

「うん」

「でも」カイも戻ってきて、リンヤの隣に腰を下ろす。「ぼくはあの子がそんなに悪い子には見えなかったけど。血の恋人って言うてもね」

「そう？ わたしにはかなり悪く見えたけどなあ。いきなり『うるせえ』って」

リンヤはそう言うってアカリの口真似をする。カイは少しだけ、笑った。

「口はかなり悪いみたいだけどね。でも、雰囲気はそんなに嫌な感じじゃなかったと思うよ」

「分からないなあ。ユラノもカイも騙されてるんじゃないの？ あの子かわいいからね」

「……」カイは黙って、リンヤの顔を見た。

「……ん？ どしたの？」

怪訝そうに問われて慌てて目を逸らす。そして喋り出した。

「う、ううん。……ぼくにはむしろ、血の恋人の何がそんなに悪いのかわかって思うよ」

「血の恋人は、聖性の浪費者。だからだよ」

答えたのはプリスだった。ただ、彼女はまだ俯いていて、答えた声も棒読みのようなだった。

「確かにそう言う人がいるのは知ってるけど……でも、それってそんなに悪いことかな？」

「カイ、あんまりそれ、他の人に言わないほうがいいと思うよ……」

「あ、うん。一応その辺りはわきまえてるつもり」

「……どうせ、すぐ戻ってくるよ」

プリスの口調は素っ気無い。

「あの子がああなのは、血の恋人だってことだけが理由じゃないからね」

プリスはまだ俯いている。

「だから、気にすることはないよ」

二人は顔を見合わせる。

ミオはそんなプリスを、心配するような表情で見ている。

## 第四話

アカリにはすぐに追いついた。

すぐに声をかけるのは何となく躊躇われたので、アカリから少し離れて後をついていくような形になってしまう。

空はもう薄暗い青色に染まっていて、西空にわずか茜を残すのみとなっていた。いくつか浮かぶ雲は夕陽に当てられて濃い陰影を刻んでいる。人通りはもう絶えていた。かわりにあるのは夕食のいい香りと、家族のものと思しき談笑。

風が冷たい。

アカリは自分の肩を抱くようにして、一歩ずつ踏みしめるように歩いている。赤い髪を揺らしながら、少し頼りない様子で。

ふいに、立ち止まった。

「お前」振り返ってユラノを見る。「何でついてきてる訳？」  
あからさまに迷惑そうな顔だった。敵意、と言ってもいいかもしれない。

「心配で……」

そう言つと、鼻で笑われた。いや、鼻を鳴らしただけで、顔は笑っていないかった。

「見ての通り、あたしは一人で歩いて帰れるくらい元気だけど？」  
ユラノには正直なところ、ただの強がりに見えた。

「途中で倒れたりしたら大変だし。それに……」少しだけ、口ごもる。

「何かの拍子に、傷口が開いたら……血が、止まらないんでしょう？」  
アカリの顔から、表情が消えた。

「……なんだよ。やっぱり知ってるのか。あたしが」かすれ気味の声。「血の恋人だってこと」

「……うん」

「お前、だったらなんで、あたしに関わろうとするんだよ」

「え？」

「知ってるんだろ？ あたしに関わると、穢れがうつる。そう言われてるってこと」

「……」 噂では、聞いている。

血の恋人は流した血を止められないがゆえに、忌み子とされている。

この国では、血は聖なるものとして大切にされている。それは例えば毎食前に祈りを捧げることに現れているし、血約騎士たちの顕す魔法はまさに血の聖性の具現と言える。

血は聖なるもの。そして、血の恋人は流した血を止められない。ゆえに血の恋人は聖性の浪費者、穢れ持つ者である——これが、血の恋人が忌み子とされる所以だ。だが。

「僕はそんなこと、気にしないよ」

ユラノにはいまひとつピンと来ない話だった。血の恋人は忌み子であるという知識と、目の前にいるアカリの姿がどうしても一致しない。

血を流すのが、そんなに悪いことか？

アカリのどこが穢れているのか？

だからその言葉は本音だったのだが、アカリはそう受け取らなかったようだ。

「うるせえな。どうせお前も後になって去っていくんだろうが」

「そんなこと」

「しないって言い切れるのか？ うそだね。そう言って結局去っていった奴を、あたしは何人も知ってる。そう言えるのは、お前があたしらのことを何も知らないからだ」

それはそうかもしれない。ユラノはアカリのことを何も知らない。「迷惑なんだよ」

唾吐くような声、赤い瞳が鋭くユラノを睨みつける。

「そうやって上から手を差し伸べるようなことしやがって。手を掴んで、引き上げられて、その後で叩き落とされるくらいなら最初っ

から下にいたほうが楽なんだよ。お前そういうこと考えたことあるか？」

ある、とは言えなかった。

絶句したユラノを論破したと思ったのか、アカリは背を向け、小さくため息をついた。

風に乗って、わずか、眩きが耳に届く。

「……あたしに、関わるなよ」

小さな後ろ姿。痩せた肩がゆっくりと遠ざかっていく。冷たい風になびく髪と、包帯。

（関わるな、か……）

どうしてアカリはそんなことを言うのだろう。だったらどうして彼女はあのかとき——スレイヴに襲われたとき、逃げ遅れた女の子をかばったのだろう。彼女の言う通りなら、初めから助けようとせず、自分だけで逃げればよかったはずなのに。

ユラノにはどうしても、アカリが穢れているとは思えない。

（……やっぱり放っておけないよ）

ユラノはまた、アカリを追って歩き出す。

そして、今しがた交わしたばかりのやりとりを思い出す。

確かに、最初からずっと下にいたほうが楽だ、とは考えたことがなかった。けれど。

「下」が一体、どんなところなのか。

「下」にいる気持ちとは、どんなものか。

それはユラノにも、想像することができた。

三年前、身寄りを亡くしたときに知ったのだ。

——とは言え声はかけづらい。無言のままに後をついて行き、三層区の門を越え、二層区の門も越え、一層区に入った頃にはだいぶ自分がおかしなことをしている自覚が強まっていた。

アカリは大きな通りを避け、敢えて入り組んだ路地を選んでいった。そのせいでついに行くのには必死になってしまったのだが、そう

でなければとつくに声をかけていたと思う。

陽はもうほとんど沈み、空は紺色に染まっていた。風も少し強まっている。

アカリは一層区の居住街を抜け、更に街の外れへと歩いていく。

（あれ、こっちは――）

ユラノは訝しく思う。この先は、傷痕断崖の近くだ。家屋の数は疎らで、あったとしても全てが廃墟。現在の四層区東部と同じ、放棄された区画だった。

もしかしてこんなところに住んでいるのだろうかと考えたとき、アカリが振り返る。

「……もうあたしの家はすぐそこだ。満足しただろ？ とつと帰れよ」

「え、あ、うん」どうして今までついて来るなど言われなかったのか少し疑問だったのだが、どうやら単に諦められていただけらしい。「……でも、ここって」

「んだよ。確かにあたしらその他には誰もこんなとこに住んでねえよ。文句あんのかよ」

「いや、ないけど」

「だったらとつと帰れよな。まさか、家までついて来る気か？」

「いや、そんなことは」

今更に自分がしようとしていたこの意味を理解して、ユラノの頬が熱くなる。自分はただアカリのことのが心配だっただけだ。けれど家にまで行ってどうこうしようとか、やましい気持ちはない。……ないはずだ。

「じゃあ――」帰るよ、と言いかけたとき。

「お姉ちゃん！」

アカリが弾かれたように振り向く。区画の奥のほうに小さな影。「キララ！　なんで、だめだろ、こんなとこ出歩いてちゃ……！」そう言って駆け出す。

「だってお姉ちゃん、帰りが遅かったから、心配で」

少女だった。髪は腰を越えるほどに長く、毛布を羽織っていてもなお目立つほどに体は細い。背の高さはミオと同じくらい——十二、三歳くらいだろうか。

最も気を引いたのは、髪と瞳の色。赤い、アカリと同じ色だった。「あれ——お姉ちゃん、怪我、したの？」

キララと呼ばれた少女はそっと、包帯に包まれたアカリの腕に手を伸ばす。

「もう血は止まってるよ。キララが作ってくれた薬、持ってたから」「そっか……でもすごい包帯。大丈夫？」

「ああ、平気だよ。あたしは平気。それよりキララのほうが心配だよ。体、大丈夫なのか？」

「うん、今日は結構調子いいから。っていつか、お姉ちゃん」「何だ？」

「あのひと、だれ？」

二人の視線がユラノに向いた。

「僕は」「たまたま行き会っただけ。だれでもないよ」

自己紹介の暇もなく、アカリに声をかぶされてしまう。

「なあ、もういいだろ。帰ってくれよ」

「あ、う、うん」

きつと妹なんだ、とユラノは思った。髪や目の色が同じだし、顔つきも似ている——何より、あの呼び方。ならばアカリの家がこの近くにあるというのも本当のことに違いない。

家に帰り着くまで送るというのなら、これでもう十分なのだ。

「じゃあ、帰るよ。お大事に」

「ああ」

「え、帰っちゃうの？」

アカリがキララの袖を軽く引いて、逆の手でユラノを追い払うような動作をした。ユラノは苦笑する。やっぱり歓迎されていない。潮時なのだ。

ユラノはじゃあね、と言って帰途についた。キララはじゃあねと

言ってくれたが、アカリは反応してくれなかった。

もうすっかり陽は落ちてしまった。みんな心配しているかもしれない。特にリンヤ。出てくるとき振り切るような感じになってしまったし……。早く帰ろう。

キララに対するアカリの態度を思い出すと、自然と笑みがこぼれる。しきりに労わっているような様子だった。きっと仲がいいのだろう。やっぱりアカリは、本当はいい子なんじゃないか。

そういえば――キララの姿。もう陽は落ちかけていてよく見えなかったけれど、隣にアカリがいたから何となく分かった。アカリも顔色が悪かったけれど、キララはそれよりももっと、具合の悪そうな顔色をしていた。

どこかで聞いたことがあった気がする。誰に聞いたかとも思い出せないような曖昧な記憶だったけれど、キララに出会って思い出した、噂話。

血の恋人には、病気の妹がいる。

「ねえお姉ちゃん、あのひとだれ？　なんでここに来たの？」

家に戻るまで、戻った後もずっと、キララはこの調子だった。アカリは正直参りかけていた。なぜならアカリはついて来た少年の名前を知らないのだ。だれと聞かれても返答に困る。

「ほら、いいからちゃんと毛布かぶって温かくしなうて」

「ねえなんで隠すの？　いいじゃない教えてよ」

「だから、たまたま行きあつただけだって言っただろ」

「うそ。用も無いのにここに来るひとなんて、いないじゃない」

「変な奴だったんだろ。あたしは知らないって」

「えー。なんか怪しいなあ。お姉ちゃん隠し事してるんじゃないの？　あの男の子結構かつこよかったもんねえ？」

「はあっ？」

「かつこいい？　あいつが？」

顔が思い浮かんだ。黒髪。短め。赤い瞳。気弱そうな笑顔。すこ

し華奢で、頼りなさそう。

でも、やるときはやる。

助けてくれた。いや、正確に言えば、助けようとしてくれた。あたしは結局怪我をした。たぶん本当に何とかしたのはプリスの奴だろう。けど、剣を持って吸血鬼に立ち向かって行った。逃がそうとしてくれた。その勇気は、認めてもいい。でも。

「嘘だろ。っていうか、暗くて顔なんか見えなかっただろ」

「そうでもなかったよ？　なにお姉ちゃん、その誤魔化し方、余計に怪しいよ？」

そう言ってキララはへへっと笑う。

「怪しくない。大体——」

自分は血の恋人なのだ。忌み子なのだ。キララの言いたいことはよく分かるし、興味だつてないわけじゃない。だけど、無理だ。相手なんて見つかるわけがない。そんなことをしようとするだけ無駄、むしろ不幸になるだけだ。自分も、相手も。

だけど今血の恋人だということを理由にすれば、きっとキララは哀しむだろう。この体質のせいで今までどんな目に遭って来たか、キララもよく分かっている。もううんざりしているはずなのだ。

だからアカリは、違う言葉で否定する。

「——柄じゃ、ないしな」

半分は本当のことだった。我ながら悪くない返答だと思う。

キララは期待しすぎていると思うことがある。もう何度も裏切られてきたのに、まだ希望があると信じている。だからこんなに明るい。

それが、アカリには眩しい。

だけど、キララには明るいままで居てほしいとも思う。いつか幸せになってほしい。自分には無理でも、キララなら幸せになれるはず。血の恋人であることから一生逃れられないけれど、病気はいつか、治るはずだから。病気さえ治れば、キララはあたしから離れられる……。

アカリはキララのそばから立って部屋の中央に向かった。そこには小さな炉がある。床板を取り払って周りを石で囲んだだけの簡素なものだ。薪がくべられ、弱々しい炎を灯していた。

橙色の光が壁を照らし、アカリとキララの影が写っている。炎に合わせて彼女たちの影も揺れている。

アカリは炉で沸かしていたお湯を、木彫りの器に移した。そしてキララのもとに戻る。

「ほら、お湯。外寒かっただろ」

「ありがと。……ねえ、お姉ちゃん」

アカリははつとしてキララを見た。先ほどの面白半分な様子とは、違う声だった。

「わたし、お姉ちゃんには幸せになってほしい」

「キララ……？」

「わたしが病気になってからずっと、お姉ちゃんわたしの世話ばかりしてるでしょ？ だから自分のことが出来なくて、それで」

「何言ってるんだ、あたしはキララが元気になればそれでいいんだ」

「でも、わたしは……」

キララは俯いて、少しの間だけ、言葉を詰まらせた。

「……わたしのことは放っておいて、とは言わないけど。でも、もう少しくらい、お姉ちゃん自分のこと考えてもいいと思う」

湯の入った器を持つ、キララの細い手に力が入る。

アカリは、胸に小さな痛みを感じる。

「あたしには……」

分からなかった。自分のこと。それは一体、どんなことだろう？ どうすればいいんだろう？

「あたしには……、」キララしか、いないんだ。

「……お姉ちゃん？」

「……いや、何でもない。分かった、これから、考えてみるよ」

キララはしばらく心配そうな表情でアカリを見ていた。

「うん。……きつとだよ」

「うん、きつとだ」

そうすっかりと返事をして、キララの表情は変わらなかった。

窓から射し込む月の光が、プリスとミオの姿を青白く浮かび上がらせている。

「ミオ、薬塗るよ。腕出して」

「はい、プリス」

ミオは左腕に巻かれた包帯をほどく。複雑な弧を描いて、腕から離れた布が寝台の上に渦を巻いた。

プリスは寝台脇の台から薬瓶を取ると、中に入った軟膏を一掬い指につける。そっとミオの腕を取ると、傷痕に薬を塗り始めた。

「痛くない？」

「大丈夫。むしろ、気持ちいいです」

これは、魔法を使った日——つまりミオの腕を切った日には、必ずしていることだった。傷が化膿したりしないように薬を塗る。切る部分は基本的に左腕なので、ミオ自身でも薬を塗ることはできるのだが、プリスは必ず自分でやるようにしていた。そうすることで魔法を使うことがどういうことか、その重みを、忘れないようにするために。

「必要なこととはいえ……、どうして、こんなことしなきゃならないんだろっね」

ミオの左腕は、ざらついている。血約者<sup>ブリーデ</sup>として何度も傷ついたため、傷痕が消えずに残っているのだ。元々白い肌の上に、更に白い筋——傷痕が何本も走っている。三年に及ぶブリーデとしての日々、吸血鬼から街を守ってきた歴史、この傷痕はそういったものの証だった。

プリスは万感の思いを込めた呟きを漏らす。

「世の中が、もっと平和ならよかったのに」

「でも、自分たちで望んだことです」

「うん。後悔はしてないよ」

その言葉に偽りは無い。わざわざ言葉に出す必要さえない気持ちだったが、二人はよく同じことを話している。これも、確認のためだ。

薬を塗り終わるとプリスは包帯を巻き直す。慣れた手つきだった。手順、巻きつける強さ、そして方法。全てがミオのために考えられた、ミオのためだけの巻き方だ。

「はい、終わり。問題ある？」

「ないです」

「うん。じゃ、寝ようか」

プリスとミオは横になって掛け布をかぶった。二人で、一つの寝台を使っている。枕も一緒。横になるとお互いの顔がすぐ目の前に来るので、安らかな吐息が感じられるのだ。

おやすみ……、そう言うといつもならすぐに寝入ってしまうプリスだったが、今日は違った。

「……眠れませんか？」

囁き声。プリスは目を開く。ミオの顔が、すぐそこにある。

「……うん」

「アカリさんのこと？」

「それもある……。けど、アカリのこととはもう、終わったはずだ」

「……そう、ですね」

「だから、もう、いいんだ」

プリスはそう言って、小さく長いため息をついた。それきり口を開かない。アカリのこととは、プリスにとっては、心に刺さって抜けない棘のようなものになっている。

ミオが掛け布の中で、プリスの手をそっと握った。やわらかくて温かい手。一緒に歩いて行こうと誓った人の手だ。

プリスは目を開け、話し始めた。

「……最近、<sup>スレイヴ</sup>隷属吸血鬼の数が多いよね」

「確かに……気にしているのは、そのこと？」

「うん」

プリスたちが「外の街」の警備をするようになってからの三年間、スレイヴどもが街へ来襲する頻度は多くとも月に三度、大体は一、二度だった。

それが、この一ヶ月は既に五回。今日に至ってはスレイヴの数自体も、プリスたちの知る限りにおいて過去最大となった。

「不安なんだ。これじゃ、まるで……」

「…… ロード・レーヴァの禍」

ミオの呟いた言葉が不吉な響きを持って部屋に広がる。プリスはゆつくりと、噛み締めるように頷いた。

ヴァンパイア・ロード

三年前、ある吸血鬼の王がこの街にやって来た。事態を察知した「壁の中」の教会は血約騎士たちを派遣。戦場となったのは、ここ——壁の外の街だった。

大量のスレイヴに埋め尽くされた街。人々は次々と吸血鬼の手にかかり、男性はただ殺され、女性は血を奪われた。血約騎士と吸血鬼の戦闘に巻き込まれて命を落とした者もいた。壊れた街、傷付いた人々。あのときの街はまるで、地獄のようなところだった。

事態は結局、王の破滅をもって終息を迎えた。

このとき多くの人が身寄りを失った。それだけではない。騎士が最後に放った大魔法は地を穿ち、地形を変えた。街中に突如出現した深い裂け穴、大地の傷痕は、現在 傷痕断崖 と呼ばれ、惨劇と共に街の人々に記憶されている。今はもう、そこには誰も住んでいない。…… たった二人を除いては。

プリスたちが血約したのは、このときだった。

アカリと出会ったのも、このときだった。

そして彼女たちが身寄りを失ったユラノ、リンヤ、カイと出会い、フリジア警備隊を結成したのもこの災禍がきっかけだった。

あのとき——事の直前、来襲するスレイヴの数が大きく増したことが記録されている。

丁度、現在の状況のように。

「もしかしたらまた、何処かの王がやって来るんじゃないか」

プリスはミオを握る手に、少しだけ力を込めた。

「そうなったとき、わたしたちは、みんなを守れるのか。あのときみたいにみんな傷付いて、大切な人を亡くして、……笑うことが、できなくなるんじゃないか。そんな気が、するんだ」

震えている。繋いだ手を通じて、不安がはつきりとミオに伝わる。  
「大丈夫ですよ。……私たちは一人じゃない。二人でひとつの血約騎士です。しかも」

ミオは励ますように、ぎゅっと手を握った。

「あなたは五十年に一人いるかいないかと言われるほどの天才騎士、十歳にして 魔女 型第五階梯——<sup>アテプト</sup> 達人 に名を連ねるプリス・フリジア」  
「ミステイルじゃないですか」

「……その血約者<sup>フリーデ</sup>ミオ・フリジア」エメレインも、血に秘める魔力の強大さで有名だ」

「そう。だから、大丈夫」

ミオはプリスを抱きしめた。そうされると、プリスは自分の小ささを思い知る。

ミオの言う通り、プリスは天才だった。騎士としてだけでなく、心の年齢——知能においても。皮肉にもそのことがプリスに、小さな身に余るほどの想いを抱かせてしまっている。

どうかすると潰れてしまいそうになる彼女を、ミオはいつも支えてくれる。今腕の中で温かさをくれている、大切なひと……。

「大丈夫ですよ、プリス」

抱きしめる腕に力を込めると、それ以上の力で抱き返される。それはプリスに、例えようもない安心をくれるのだ。

「そうだな……。ミオがいれば、大丈夫、……だよね」

プリスは顔をあげた。不安が消え去ったわけではない。けれど、ミオと一緒にならば、たとえ不安でも笑うことができるのだ。

「ひとこと、言わせてもらおうなら——」

「はい」

「わたしは 魔女 じゃない。 魔法少女 だ」  
ミオは小さくふきだした。つられてプリスも笑う。  
それは、いつものプリスだった。

「あつ、ユラノ！」

家まで帰って来ると、そんな声が聞こえてきた。屋根の上から飛び降りて駆け寄ってくる、月灯りに鮮やかな白い髪。リンヤだ。

「リンヤ！ ずっと外で待ってたの？」

「うん。おかえり。大丈夫だった？ 何もされてない？」

「ただいま。大丈夫、そんな心配するようなことなんか何もないよ」  
「そっか」

リンヤは安心したように息をつく。しきりに両手を擦り合わせていた。

「寒くなかった？」

「ユラノがくれたマフラーがあるから、大丈夫」

そう言ってリンヤは首に巻いたマフラーを手取る。彼女の髪と同じ、白いマフラー。三年前にユラノがあげたものだった。ずいぶん気に入ったらしく、リンヤは本当にずっと身に着けている。ユラノとしては軽い気持ちであげたのだが、そこまで気に入ってもらえると悪い気はしなかった。

「明日、壁の修繕作業だね。頑張ろうね」

「うん。簡単に壊されないように、しっかりやらないと」

「わたしはお手伝いだけだけど、一生懸命おいしいご飯とか作るから。カイに教えてもらってるんだ、最近」

「そうなんだ。うん、期待してるよ」

リンヤは嬉しそうに笑うと、ユラノの手を握った。

「早く寝よ。明日も早いよ」

手を引いて家の中に入っていく。冷たいけど、しっかりそこにあることが分かる、温かい手だなとユラノは思った。

## 第五話

### 二章

出迎えはアカリの心底嫌そうな顔だった。

「何だよお前。また来たのかよ」

「はは……」

「いいじゃないお姉ちゃん、ええと、いらっしやいませ！」

キララの元気な声だけが救いだった。

ユラノがアカリと出会った日から、何日かが経った。アカリの家を訪れたのはあれ以来初めてのことだった。ユラノとしては毎日でもアカリの様子を見に行きたかったのだが、ここしばらくは壁の補修作業や見張り当番に追われていて時間が取れなかったのだ。諸々の作業がようやく完了したのは、つい昨日のことだ。

ひとまず、アカリが元気そうなので安心した。傷は悪化したりしていないようだ。

「茶は出さねえぞ」

アカリは仁王立ちだ。まるで妹には指一本触れさせないとでも言わんばかりの様子。

そこにキララ、ぼそつと言。

「というより、出せないんだけどね……」

「う、うるさいな。キララは静かに。っってお前何笑ってんだよ。何がおかしいんだよ」

半眼で睨まれた。ユラノは自然と浮かぶ微笑を引っ込めようとするが、うまく行かない。

「いや、仲がよさそうだなあというか……。妹さんの前だと、その……」

「んだよ」

「優しい、感じになるんだなあ」と

「……はあ？」アカリは目を丸くして驚いた。

「何言ってんだお前の目は節穴か。うつせー。うつせーよ」

「お姉ちゃんはやさしいよ」

寝台の上から掛け布にくるまったキララが言うと、アカリの頬に少しばかり朱が差した。

「キララは静かに」

キララはにこにこ笑うだけで、答えない。

「えっと、ところで、入ってもいいかな？」「だめだ」「いいよ」

姉妹共に即答。どうしようかなと思ったものの、結局敷居をまたがせてもらうことにした。どうもアカリは、妹に頭が上がらない様子だったから。

「お前あたしはまだ許した覚えねえぞ、入ってくんな！ しっしっ」

「はい、おみやげ」

差し出した瞬間、アカリの動きが停止した。

「干しぶどう。おいしいよ」

ミオ謹製の干しぶどうだ。ミオ自身干しぶどうが好物なので、その出来には並ならぬこだわりが込められている。警備隊だけでなく近隣の住民誰もが認める逸品だった。

「はい、どうぞ」

袋から何粒か取り出して、固まっているアカリの手のひらに載せてあげる。

反応がないので、キララにも同じようにしてあげようとした。すると、どうしたことが――

「あつ、えっと……」

キララからさっきまでの明るい態度は消えてしまい、困惑したような様子で両手をゆるく振ってきた。否定の仕草だ。

「もしかして、干しぶどう嫌いだった？ ……っ!？」

ユラノの腕が、ふいに掴まれた。驚いて干しぶどうを取り落としそうになってしまう。

腕を掴んでいたのは、アカリだった。真剣な目。ゆっくりと口を

開く。

「キララに、さわるな」

今まで一番低い声、重い口調だった。気圧されたユラノは、半ば無意識に手を引く。

アカリはユラノとキララの間に割って入ると、じっとユラノを睨んだ。

「ごっ、ごめん……」

「ごっ、ごっちこそ、ごめんなさい。えっと」

「ちよっと、ごっち来い」

アカリに腕を掴まれた。ものすごい力で出口に引っ張られる。

外へ出る直前、ちらと見たキララは、酷く悄然とした様子で俯いていた。

初めて見る姿だった。

「お前、キララのことは知らなかったのか」

話し声がキララに届かなくなるだろう距離まで連れて来るなり、アカリはそう言ってユラノを問い詰めた。

「噂では……その、病気だって」

「そうだよ。キララは病気だ。でもその分だと、どっという病気がまでは知らないみたいだな」

「……うん」

「伝染るんだよ、キララの病気は。触れると伝染る。それで何人も死んだ」

「えっ」

「だからこんな人気のないところに住んでんだよ。隔離された場所だな。あたしが血の恋人だからってだけじゃないんだ。もっとも……」

アカリは顔をしかめると、小さく舌打ちした。

「……とにかく、キララには触るなよ。本当言つとそばに寄るのさえやめて欲しい。けどな。キララはどういうわけだか、お前のこと気に入ってるみたいだ。お前がこの間来てから少しだけ、キララ

は明るくなった。だから少しだけなら、キララと話してもいい。少しだけだ。いいか、少しだけだぞ」

ユラノは頷いた。頷くしかなかった。

アカリの態度が、とても必死だったからだ。少しでも妹のことを幸せにしたい。楽になって欲しい。そんな想いが伝わってきたのだ。

アカリたちの家に戻ると、キララは元通り元気よく話しかけてきてくれた。さっきあったことを忘れたかのような態度だった。

けれど、それが空元気だということはユラノにもはっきり分かった。

血の恋人。伝染病。

姉妹を取り巻く環境を知ったユラノは、自分に何かできることはないだろうかと思った。

単に様子を見るだけでは足りない。それだけでは、何も進展しない。

だからユラノは、まずプリスに相談してみることにした。

「……駄目？ どうして？」

ユラノは、アカリとキララを警備隊で暮らすようにできないかと試してみた。

しかし、プリスの答えは、否定。

「アカリが血の恋人だから？」

プリスはこくり、と小さく首を縦に振る。

「なんで……。血の恋人って、そんなに重要なこと？ アカリのどこが穢れてるっていうの？」

「ユラノさん、落ち着いてください……」

身乗り出すユラノを、ミオが制する。困ったような表情だった。

「ごめん……。でも、どうして」

「わたしたちは、この街を守らなきゃいけない」

プリスは静かに語り出した。用意された言葉を読み上げているよ

うな、平板な調子だった。

「想像してみるといい。例えば、街の人たちがわたしたちに協力してくれなくなったとしたら、どうなると思う？」

「え……」

突然言われて、ユラノは少し混乱した。どうしてそんな話をするのだろ。アカリたちの話じゃなかったのか。答える前に、プリスは話を続けた。

「スレイヴがやって来た。警鐘が鳴るからそのこと自体は分かる。ただどこに、どれだけやって来たのかとか、詳しい情報は教えてもらわないと分からない。何とか人の流れから当たりをつけて、行ってみる。それでも協力は得られない。街の連中と連携が取れないから、討伐だつてうまく行かない。当然、危険が増える」

プリスの言う通りだった。警備隊が街を守るには街の人たちの協力が不可欠なのだ。騎士であるプリスたちも、敵と対峙しなければ力を発揮できない。それに、言うことを聞いてもらえなければ、街の人を魔法に巻き込んでしまうかもしれない。

「アカリを、血の恋人を——忌み子を助けるっていうのは、そういうことなんだ。わたしたちみたいな若い世代には気にしない人間も多いけれど、上の世代にはまだ血の恋人を忌避する習慣が残ってる。そういう人たちは、血の恋人に関わる人間さえも忌避するようになる。だからわたしたちは、アカリを助けるわけにはいかないんだ」

「……そんな」

「本当は」ミオが口を開く。控えめなミオにしては珍しい、たまにかねたような様子だった。

「皆さん、アカリさんのことは助けたいと思ってるんです。でも、彼女を助けるのは勇気がいること。忌み子を助けたら、自分も忌避されるかもしれない。そうなるのが怖いんです。だから——」

「ミオ」プリスが静かに名を呼ぶと、ミオは沈黙した。

「そんなこと言っても、仕方ない。実際にわたしたちはアカリを助けないって、決めたんだから。……それに、問題はアカリのことだ

けじゃない。キララだってそうだ」

「病気だから……？」

「そうだ。あの子の病気は、本当に危険なんだ。……病気だって分かった当初は、たくさんのが、亡くなった」

「でも、チウ爺に頼んで、病気を治せれば。チウ爺はアカリのこと、血の恋人だからって嫌ってないでしょ？」

「もうとつくに診てもらってる。あの子は三年前から今の病気に罹ってるんだ。でも、お手上げだ。触れると伝染るから、詳しく調べることまできやしない。あの子だけに連れてきても、できることなんて殆どないんだ。……だったら、アカリと一緒にいさせてやったほうがいい。アカリだけは、なぜか平気みたいだから」

ユラノは返す言葉に詰まった。プリスの言うことは理解できた。その上で、アカリたちを今の孤立した状況から解放するための考えが、何も思い浮かばなかったのだ。

プリスは唇を真一文字に引き結んで、テーブルの上、こぶしを固く握り締めている。ミオも俯きがちだ。

隊長たちだつてつらいのだ。単にアカリが血の恋人だから避けているわけでは、ないのだ。

そのことに思い至ってしまうと、ユラノにはもう何も言うことはできなくなってしまった。

一晩の間悩んだものの、いい考えが浮かばない。悶々とした気持ちを抱えたまま、今日もユラノはアカリの家に行ってみることにした。キララと話してもいいというアカリの言葉を抛り所にしてのことだった。

（今日も干しぶどう、持って行こうかな）

昨日、キララがずいぶん美味しそうに食べていたのを思い出す。本当に嬉しそうに、何度もありがとうと言っていた。アカリもまんざらでもなさそうな様子だった。

（ちよっと新鮮だったかも、あのときのアカリ）

干しぶどうを食べるキララの様子をじっと見ていたので、アカリにも食べる？と差し出してみたのだ。

『い、いらねえよ』

『いいよ、まだいっぱいあるし』

『いらねえっての』

『ほら』

『あ』

強引に手を取って一粒乗せてあげると、アカリは一分以上は干しぶどうを凝視した後、ゆっくりと口に入れたのだった。

（あのときの、アカリの様子）

いつも通り険しいままの目付き、けどどこか困ったような、どうしていいか分からないというような顔。口もとに持っていたまま、固まった指。ユラノの視線に気付いてはっとし、赤らんだ頬。無意識のうち、ユラノの顔に笑みが浮かぶ。

（こっちみんなよ、か）

「……何、笑ってるの？」

ぎくりとして我に返る。リンヤが立っていた。気のせいかな、少し視線が冷たく見える。

「……いや、えっと」視線が泳ぐのが自覚できた。「あ、リンヤ、干しぶどうの袋、どこにあるか知らない？」

「今日もあの子のところ？」

「うん、……え？」

ずっと、リンヤの顔から表情が消えた。

「やっぱり、そうなんだ」

起伏に乏しい声。

「リンヤ？」

リンヤは無言で廊下の壁に背を預けた。後ろ手に指を組み、つま先で床を軽く叩き始める。

ぎし、ぎし。ぎし、ぎし。ぎし。

俯いている。視線の行く先は床、少し目が遠い。

「……リンヤ？」

変だ、と思った。いつものリンヤとは、様子が違う気がした。果たして返ってきた答えは、ユラノの予想の外にあるものだった。あの子のところ、行くのやめようよ」

「……どうして？」

「決まってるじゃない、あの子、血の恋人なんだよ？ ユラノもみんなに無視されちゃうよ」

「な——」

一瞬、絶句した。まさかリンヤがそんなことを言うとは思っていなかったのだ。

「それに、すごい怖いじゃない、あの子……」

「待って、リンヤ、なんでそんなことを」

「なんで？」

急に、リンヤはユラノを見た。真っ直ぐ、目を、見ていた。

「ユラノのことが心配だからに決まってるじゃない。無視されたらどうするの？ すごいつらくなるよ？ それにあの子だって、いい子には見えないよ。きつとユラノ騙されてるんだよ。だからもう、会いに行っちゃだめだよ」

「騙されてなんかないよ」

「うっん、騙されてる」

「違う。アカリは本当はいい子なんだ。リンヤこそ誤解してるよ。確かに言葉は乱暴だし、目つきもちよっと怖いけど、しっかり話せばいい子だって分かる。リンヤも一度会ってみれば」

「やだ」

リンヤはわずか、震えていた。

「……やだ。会いたくない。ねえ、ユラノ、行かないでよ。もう行くのやめようよ。血の恋人だよ？ どうせ行ったらって何もできないよ」

言葉が胸に刺さる。確かに、そうかもしれないのだ。だけど。

「……放っておけないんだ」

「……え」

「リンヤの言うことも分かる、けど、どうしても放っておけないんだ」

そう言った瞬間、リンヤの眼がいつぱいに見開かれた。体の震えが少し大きくなる。

「……リンヤ？」

ユラノはリンヤの肩に手をかけようとした。その手は、ゆるく払われる。

「……ばか」

「え？」

「ユラノのばかっ！ 勝手に行つて、みんなに無視されちゃえ！」

大声をあげると、リンヤは踵を返して走り去ってしまう。ユラノは呆然と、その様子を見ているしかできなかった。

「……どうしたの？」

振り向く。通路の角から、カイが顔を出していた。

「……いや、その」

事情を話す。アカリのところに行くと言ったらリンヤの様子がおかしくなった、と。

カイは神妙な態度で聞いていた。聞き終えると、一言。

「ユラノは、リンヤのこと、どう思ってる？」

「え？」

カイまでおかしいことを聞いてくる。どうしたのか、と思った。

「どうつて……どうなんだろ。妹みたいな感じ、かな？」

妹。聞かれるまで意識したことはなかったが、口に出してみるとそれ以外無いような、しっくりする感じがした。

「うん、妹、だね」

「……そっか」

「どうしてそんなこと？」

「ぼくは、リンヤのこと、好きだよ」

ユラノは思わず、カイの顔をまじまじと見てしまう。カイは少し

赤くなつて俯いた。

「好き、って……そういうこと？」

こく、と頷く。

「そうだったんだ」

何故かユラノまで胸の鼓動が早くなる。

「いいんじゃないかな。応援するよ。僕——」

「でも」

ユラノを遮つて、カイは言う。絞り出すような声だった。

「リンヤ、前に言つてたよ」

そのときになって、ユラノはようやく気付いた。

カイの頬は確かに赤くなっていたけれど、その口元に、微笑みはなかったことに。

「リンヤは、ユラノのブリーデになりたいんだって」

## 第六話

「……はあ」

ユラノはため息をつく。何のため息なのか、自分でもよく分からない。

ブリーデになりたい。その言葉の意味を考えると、どうしてか自然とため息が出てくるのだ。

血約者<sup>ブリーデ</sup>。流した血を騎士に捧げ、魔法を顕す魔力の提供者。騎士と共に在る者。

騎士とブリーデ……、強い絆で結ばれた人たち……。

プリスとミオを見ていて、思う。騎士とブリーデの関係とは、単に魔法を使うためのものではない、もっと大切な絆の証なのだ。

魔法を使うには、ブリーデが血を流さなければならぬ。魔力はブリーデの血に宿るものだからだ。そして、血を流させるためブリーデを傷つけるのは——多くの場合、騎士の役目だ。

だから、騎士とブリーデの間には、強固な信頼関係が求められる。騎士とブリーデになる際に唱える血約誓詞からもその想いは見て取れる。何より、騎士であるプリス自身がそうだと言っている。簡単には血約するな。ブリーデのことを考えろ、と。

リンヤも、そのことはよく分かっているはず。

それでもそう言うということは……つまり。

「……むう」

ユラノにだって答えは分かる。騎士とブリーデの信頼関係が、恋愛関係と同じことを意味する場合はとても多い、らしい。

考えたことがなかったわけじゃない。いつかはプリスのように騎士になりたいと思っている。でも一人では騎士にはなれない。必ず相手、ブリーデがいる。その候補は誰かと考えると、結局リンヤしか思い浮かばなかった。ブリーデには女性しかねないからだ。

もちろん、候補に挙がるということと実際に血約することの間に

は、天地の開きがある。

それに、カイの気持ちを聞いてしまった今は。

（カイがあんな風に思っていたなんて）

いつも控えめなせいかな、全然気付かなかった。

例えばユラノとリンヤが血約したら、カイはどう思うだろう？

怒る？

祝福してくれる？

どっちもありそうな気がした。よく分からなかった。そもそもどうしてカイは、自分の気持ちを打ち明けた上にリンヤのことまで教えたのだろう。

「うーん……」

色々考えた末――、

ユラノは結局、今はそのことよりもアカリたちが心配だ、と結論付けた。

色恋沙汰、いや騎士とブリーデのことだから色恋だけでもないけれど、それよりもアカリたちの置かれている環境のほうが大ごとであると思ったのだ。

気付けばユラノは三層区の正門をくぐっていた。考え事をしながら歩いているうちに、いつのまにか四層区を抜けてしまっていたようだ。

晴天だった。空に薄く伸びる雲が、陽光を優しく広げている。風もゆるく、冷たくはあったがけして厳しくはなかった。通りを行き交う人たちの表情も穏やか。吸血鬼の脅威に常に晒されていても、道ゆく人たちの表情は明るい。

道のずつと先、巨大な壁に隔てられた向こう側に、巨大な城――血約教会の大聖堂が見える。

血約騎士たちの本拠地でもある大聖堂に、以前はプリスとミオも住んでいたという。三年前のロード・レーヴァの禍の後、フリジア警備隊組織に伴ってこちら側、「外の街」に引っ越してきたの

だ。そんなプリスはどうも、騎士たちの中では相当の変わり種であるらしい。外の街に騎士は、プリスしかないのだ。

陽光に白く浮かぶ大聖堂を視界に納めつつ、ユラノは更に歩く。二十分程歩くと更に内側、二層区に続く門が見えてくる。

壁の外の街は、四重の壁に囲まれている。

最も内側——「中の街」を囲む巨大な城壁と、第一壁に囲まれた区画——が「一層区」、以下外側に向かって順に二層区、三層区、四層区と呼ばれている。天上に何者かがいたならば、彼には街が年輪のような姿をしていることが分かっただろう。人々が集まるに従い、街の拡張工事が繰り返された結果だった。

ユラノたちは街の最も外側、四層区の正門近くに住んでいる。吸血鬼は外から襲ってくる、ならばフリジア警備隊は迅速に動けるよう、最も外に近い場所に居なければならぬ——そんなプリスの考えが反映された結果だ。

ユラノは最後の門をくぐって一層区へ入る。向かう先は傷痕断崖近くの、アカリたちの家だ。

災禍の傷痕として住む者をなくした区画を、ユラノは一人歩いていく。人が住んでいないというだけで、まるで大地まで元気を無くしてしまったような気がしてくる。それくらい寂れた土地だった。そんな中ひっそりと、しかし際立つようにアカリたちの家は建っている。

見た目は他の家々と同じように寂しく、黒々としていて、頼りない。それでも何故かはつきりと分かるのだ。そこに人が住んでいる、と。

不思議な感覚だった。住人とは家にとっての栄養分のようなものなんだろうか。

「こんにちは」挨拶しながら入口をくぐる。

「あつ、ユラノくん」

一目で家中を見渡せる。奥の寝台に、キララが一人。

「あれ、今日はひとり？」

「うん。お姉ちゃんはお出かけてるよ」

「そうなんだ」

言いつつ、持ってきた干しぶどうをキララにあげる。さわれないので、つまんだ干しぶどうを手の平の上に落下させるようなかたちになってしまふ。それでもキララは嬉しそうに受け取って、口に含み、咀嚼する。飲み込まないまま「ありがほお」と変な声でお礼を言う。

ユラノはそんな様子を、微笑ましくも切ない思いで見ると。

「ところで、何してたの？」

寝台の脇の卓の上に、石の器が置いてある。つい先ほどまで、キララはそこで何かをすり潰していたようだった。

「うん。これね、お姉ちゃんのお薬」

「アカリの？ 傷薬？」

うんそう、と言ってキララは作業を再開した。いびつな石を、器にこすりつけるようにして薬草らしきものをすり潰している。

「こうやってすり潰して、布に練り込むと、完成」

んしょ、んしょ、と可愛らしい声を出しつつ、真剣な表情で作業を続ける。

ユラノは正直、それだけ？ と思ってしまった。

血の恋人の傷を塞いで血を止める、チウ爺でさえ厳しいと言っていた難行を成す妙薬が、こんな簡単に――？

（いや、もしかしたら、薬草がすごい）

とすれば、もうとつくに薬師に発見されているはずだった。チウ爺だって知っているはずだ。

（どこかにものすごい秘密とか工夫が）

ありそうには見えなかった。どう見てもただすり潰しているだけだった。

（いや、きっとこの後の工程に……）

「よしっ、できた」

そう言ってキララはかいてもいない額の汗を拭い、器の中身を布

に練り込み始めた。

どう見ても目分量だった。聞いたこともない妙な歌を、楽しそうに歌いながら作業を進める。

「包帯を兼ねてるんだよ。すごいでしょ」

「う、うん」

キララは満足そうに、へへつと笑う。そうすると、口の端から大きな八重歯が覗いた。

「これがあれば、怪我しても安心なんだ。お姉ちゃんもすごい助かるって言ってるし」

「そうだね」

「わたし、お姉ちゃんの役に立ってるよね」

「うん、立ってる」

また、へへつと笑った。

本当に嬉しそうな顔だった。細かいことがどうでもよくなるくらいの。薬は実際にものすごい効果を持っていて、アカリは助かっていて、キララは満足している。それでいいじゃないか、と思った。

チウ爺には後で、薬がどういう風に作られていたか教えてあげようと思う。どんな顔をするか楽しみに思えた。本当のことを言ってもきつと信じないに違いない。

「じゃあ、ユラノくん、これ」

できたばかりの傷薬を、まとめて袋に入れて渡された。

「え、何？」

「お姉ちゃんに持っていてあげて」

満面の笑みだった。すこし悪戯っぽい感じもした。

「僕が？」

「うん」

「でも」

「でももなにもないの。わたしは動けないんだから！ 急がないとだから！」

「う、うん。でも、どこにいるの？ アカリ」

「きつと、あそこだよ。えつとね——」

ユラノは、密集する木々の中——土に埋まり、最上階だけを地上に出した廃教会の入口をくぐる。

割れた鐘。崩れた壁と天井。その隙間からのぞく広大な青空。壊れた床の隙間から力強く顔を出す無数の花々のものか、辺りはかぐわしい香りに満ちている。

ヴェールのような陽光がうつすらと空気にかかり、埃か、花粉か、小さな何かがちらちらときらめき舞っている。

半身が欠けた巨大な聖騎士像の下、赤い髪と目の少女が立って、じつと空を見上げていた。

廃れた陽光に包まれた痩せた体が、とてもぼんやりとして——一度限り、少しだけ優しさを見た以外は、険しい目しか見たことがなかった。今はそのどちらとも違う、細められて、ただ天に向かう目は。

遠くを見ているような……どこも見ていないような……透きとおっていて、きれいで……だからなのか、ユラノはそんなアカリを一目見て、その場から一步も動けなくなってしまった。

風が吹く。赤い髪が躍った。

止まった時間が吹き散らされたかのように、アカリはこちらを向く——険しい目つき。ちいさな舌打ち。苛立たしげな口調。

「……キララだな。このこと、教えたの」

床を覆う花畑をできるだけ踏まないように、ユラノのほうに歩いてくる。

「あ、うん……キララに聞いてきたんだ。これ、届けてつて」

傷薬の入った袋を差し出す。アカリは乱暴に受け取った。

「ありがとう。帰れ」

真っ直ぐ目を見て言う。ユラノは苦笑い。相変わらずだった。

アカリは踵を返すと、また奥のほうへ歩いて行った。

ユラノが立っている入口と逆側、建物の奥はほぼ全面に渡って壁が無く、外の景色が見えている。まるで巨大な刃物で斬り落としたかのように、唐突に床が終わっていた。その向こうには深い崖が口を開けている。

上は青空。下は闇。真ん中は向こう岸、二層区のマバラな家々。

「ここ……よく来るの？」

ユラノは崖の縁まで歩いて行き、下を覗き込んだ。今いる建物――壊れた教会の、下の階の断面が見える。その更に下、崖の底は、陽光があるにもかかわらず見えない。底など無いのかもしれない、そんな幻想を抱かせるほどに濃い闇。

――傷痕断崖。

王の災禍が刻んだ、大地の傷痕。

「帰って、言っただろ」

五歩ほど隣で、アカリが呟いた。その視線はユラノとは逆に、空を向いている。

静かな、独り言のような声だった。

一際強く風が吹く。

花々がさざめく。

アカリはそれきり、じっと動かない。口も開かない。本当に帰ったほうがいいのかもしれない、そっとしておいたほうがいいのかもしれない――ユラノはそう思い始めた。

……それにしても。

「ここ……きれいだな」

陽光の中、廃墟に広がる花畑……傷付き人々に見棄てられた場所に、それでも関係なく、こんなにきれいなものが生きている……そんな生死の落差が、余計に心をくすぐるのだろうか。

ユラノはもうアカリの反応は期待していなかったのだが、意外なことに彼女は口を開いた。

「……そうだな」

「ここに来てるのは……きれいだから？」

少し間を置いた後で、答えがあった。

「……母さんの、墓なんだ」

「ここが……？」

アカリの視線が空から、正面に移る。

「この先で、母さんは眠ってる」その先には、深い崖——闇、がある。

「なきがらは、もう無い……。三年前に、吸血鬼に殺された。なきがらは、この裂け目ができたとき、巻き込まれて消えた。きっともうどこにもない。あたしは助かった。けど……」

断片的な言葉。ユラノには、その意味するところは殆ど分からない。

ただ、声は空疎で、目付きはうつろで……これでは、まるで。まるで、アカリは、ひとりみたいだ——。

もしかしたら、キララがいても、アカリの心に本当の安らぎはないのかもしれない。

現実にはたった五歩の距離、それが途方もなく遠く感じる。アカリはここにいないかのようだった。今にも消えてしまいそうに儚く、希薄な少女……。

だからユラノは、本当にアカリがそこにいるのか確かめたくなかった。

「ねえ、アカリ」

答えはない。だからなのか、ユラノは自分でも意外になるようなことを呟いていた。

「つらくは……ないの？」

アカリは闇を見つめたまま、小さく呟く。

「……つらくない」

「本当に……？」

「本当だ。あたしは、つらくなんかない」

「じゃあ、どうして——」

——そんなことを言ってしまったのは、アカリが頑なで、ついむ

きになってしまったからか。

「そんなに泣きそうな顔を、しているの？」

アカリは一瞬だけ虚を突かれたような顔をした。それはすぐに歪んで、固まる。

「誰が……泣きそうだった？」

引き攣った口だけの笑顔。瞳は水面に映った炎のように儚く、暗い。

「無理しないで、つらかったらそう言えば」

「はっ」ユラノの言葉をアカリは嘲笑で遮る。

「……いいこと教えてやるよ。こんな言葉がある。『血の恋人は、涙のかわりに血を流す』。だからな、あたしは……泣かないんだよ」

「……何を」

「きれいな涙のかわりに、あたしが流すのは穢れた血だ。あたしはそのせいでずっと避けられてきた。だからな、もう、慣れてんだよ。これが普通なんだ。つらいわけないだろ」

「慣れるだなんて……。僕だって三年前に両親を亡くしてる。だからきみの気持ちは、すこし分かる気がするんだ。あれは」

そう言つと、アカリの表情が消えた。

「お前はあたしたちとは違う」

早口で言う。

「お前にはプリスたちがいる。あたしたちには誰もいない。違う。全然、違うだろうが」

「違わないよ。……だから、一緒に」

ユラノは一步、歩み寄った。アカリは怯えたように後ずさる。

「近寄るな」

ゆるく首を振る。その拍子に、アカリはわずか、平衡を失った。縁から転落しそうになったアカリの腕を、ユラノは反射的に掴む。

「っ触んな！」

言われた通りにするわけにはいかない。アカリは振り解こうと力いっぱい腕を振る。

二人ともに平衡を失って、倒れこんだ。

気付けばアカリの顔がすぐ目の前にあった。輪郭の曖昧な赤い瞳と目が合う。

揺れる——濡れた、眼球。

その向こう側には、どこまでも昏く深い、奈落が口を開けている。背中を崖に張り出した床に預け、そこから先は虚空の上に。今にも崩れ落ちそうな床の上に、二人で重なって倒れていた。

アカリは眉根をじっと寄せ、厳しい瞳で睨んでくる。

「……どけよ」

今どいたら、二度と触れられないような気がした。あるいはそのまま、落ちていってしまいそうな——。

「……どかないよ」

そうしてしばらく無言で見つめ合う——アカリは強く、目を閉じた。睫毛が小さく震えている。やがて搾り出すように言葉を吐き出した。

「……お前が、何を、してくるって言うんだよ」

どこまでも落ちて行きそうな暗闇を背に、アカリは囁く。

「どうせ、ただ同情してるだけ、なんだろ」

倒れたときに擦りむいたらしく、アカリの肘から、血が滲み出していた。

「あたしは血の恋人だ。忌み子なんだ。そのせいで親父はどこかに行っちゃったし、母さんは苦労しっぱなしだった。あたしがいなければ、キララだってもっとまともな治療を受けられた。今は笑ってるけど、母さんが死ぬまでキララは殆ど笑わない子だった。母さんもあたしの前では笑ってたけど、キララと二人きりのときに泣いてるのを何度も見た」

肘から溢れて止まらない血が、大粒になって奈落の闇に落ちていった。

「家族って何だ……？ お前なら、教えてくれるのか？」

アカリは震える声で喋り続ける。

「どうして、あたしたちなんだ。あたしが何をした。キララが何をしたんだ。血の恋人とか、病気とか。何が悪いんだ。何が悪かったんだよ。そんなにあたしが悪いことをしたのか。キララは悪い子だったのか。なんで。なんでなんだよ」

ぽたぽたと……赤い大粒の珠が、またひとつ、暗闇の中へ落ちていく。

「教えてくれよ。誰か、教えてほしいよ……」

ユラノは何も言えず、ただ見ていることしかできない。

やがてアカリは、ぽつりと言った。

「……重い。どいてくれ」

今度は、その言葉を拒否することができなかった。

アカリはキララの薬を使って止血を済ませると、ユラノに背を向けたまま言った。

「みつともないとこ、見せちまった。……今の、忘れてくれ」

嫌だ、と思った。だけど声には出せなかった。

「あたしは帰る。ずいぶん長いことキララを一人にしちまった」

「……うん」

ようやくそれだけを言う。

「お前も、来てもいい……キララが喜ぶから」

「……うん」

それきり、アカリは歩き出す。ユラノも後を追った。

歩みは重い。

——お前が、何をしてくれるって言うんだよ——

——どうせ、ただ、同情してるだけなんだろ——

アカリの言葉が痛かった。プリスに彼女たちの事情を聞いたとき、何もいい考えが浮かばなかったことを今更に思い出して気が沈む。

我ながら、よくも一緒に行こうだなんて言おうとしたものだ。

自分のしたことは、結局、アカリの傷口を抉っただけだった。

まるで足元が泥沼のような気がした。

「……はあ」

カイは警備隊の家の食卓で、ため息をついた。

（ぼくは、リンヤのこと、好きだよ）

（リンヤは、ユラノのブリーデになりたいんだって）

何であんなことを言ってしまったのだろう。あれでは何が言いたいのか全然分らない。自分で自分が、よく分からなかった。

（妹みたいなもの、かあ……）

カイはリンヤのことが、ずっと前から好きだった。ひとりの女の子として。

明るくて快活。引つ込み思案な自分にはないものを持っている。少し夢見がちで思い込みの強いところはあるけれど、むしろそこがかわいいと思う。

好き嫌いが激しいところも嫌いじゃない。せっかく作った料理をユラノにあげられたときは、ちょっとだけ、いや実はかなり、かなしいけれど。

長くて艶やかな白い髪はきれいだし、肌も透き通るみたいだし、淡い翠色の瞳も——要するに見た目とてもいいと思う。

特に好きなのは、弓を射る姿。細いけれどしなやかな腕が弦を引いて、真剣な瞳は的を真っ直ぐに見据えていて。立ち姿。力の入り具合。リンヤの一番きれいな姿だと思っている。

そんなリンヤは、でも、ユラノのことが好きなのだ。

リンヤにユラノのブリーデになりたいと聞いたとき、あきらめようと思った。お似合いだから。ユラノは剣を手に、街を吸血鬼の手から守っている。リンヤは弓矢でユラノを援護する。ユラノとリンヤは戦いにおいて、お互いをサポートし合う仲なのだ。

戦う力のない自分には、リンヤを守ることはできない。

自分は、リンヤの騎士にはなれない。

だからあきらめようと思ったのに。

（どうして自分の気持ちを、ユラノに言ってしまったのだろう）

ため息が出る。やっぱりあきらめきれていないのかなあと思う。

「ため息、三回目」

「うわっ」

いきなり話しかけられて驚いた。鈴が鳴るような声。リンヤだった。

「どうしたの？ 全然気付いてなかったみたいだけど」

「う、うん」

リンヤはカイの向かいに腰を下ろすと、じつと顔を見つめてきた。まさかリンヤのことを考えていたんだとも言えず、カイは黙り込んで俯いた。頬が少し染まっているのが自覚できる。

ちらと目線を上げれば、すこし不機嫌そうなリンヤの顔。ユラノがアカリのところに行ってしまったのがいまだに尾を引いてるようだった。当然かもしれないけれど。

不機嫌そうな顔もいいな、と考えてしまう自分が少しだけ嫌になる。

「……最近、吸血鬼多くなって」

考えていたことを知られなくなかったので、全然関係のない話題を出す。

「不安？」

うん、と頷いた。

「大丈夫だよ。スレイヴと戦うのは街の人たちも慣れてるし、プリスちゃんとミオもいるし」

リンヤから不機嫌そうな表情が薄れて、安心させるような笑顔が覗いている。

「それよりわたしはむしろ、今日のご飯が気になるなあ。っていうか吸血鬼の話してると吸血鬼が来るっていうもんね。あんまり、気にしないほうがいいよ？」

「そ、そうだね……えっと、今日の晩ご飯は——」

カイの言葉は、ふいに鳴り響いた音に遮られた。

慌しく打ち鳴らされる金属音。表が急激に騒がしくなる。

耳障りな、注意と共に不安を煽る、この音は――

「……吸血鬼だ」

スレイヴ来襲の警鐘。

リンヤは血相を変え、既に立ち上がっている。

「行ってくるよ、カイ、おいしい晩ご飯期待してるから」

プリスがミオと一緒に姿を現し、部屋の中へと声をかけてくる。

「リンヤ！ ユラノ！」

「ユラノはいないよ。わたしだけ」

答えるリンヤの声はいつもより少しだけ冷たい気がした。

「分かった。場所は正門、リンヤはいつも通りサポートに徹してくれ。行くぞミオ！」

「はい！」

三人は外に出ていった。カイはいつも通りにそれを見送る。

「……行つてらっしゃい」

そう言つて手を振るとき、カイの心にはいつも不安と寂しさがあった。

彼女たちの無事に対する不安と、一緒に戦うことができない寂しさ。いつもは寂しさよりも不安のほうが強いのに、今は、逆だった。

## 第七話

「どれくらい来てる？」

今回現場となった正門は警備隊の家から近い。プリスたち三人はものの数分で辿り着くと、物見櫓の上にいる見張りの住人に状況を聞いた。

すぐに答えが返って来る。数はぱつと見、三十から四十……。かなりの数と言えた。

「分かった、わたしたちが出る！ 門を開けて、みんなを退避させてくれ！」

相手は手を振り承諾の意を示す。鳴らされる鐘、逃げろという合図。

「ミオ」

「はい」

すでに袖も包帯も取り払われ、ミオの左腕は露わになっている。

プリスが儀式短剣を抜くのと、ミオが左腕を差し出すのが同時。

傷痕だらけの白い肌の上に、また一本新たな傷が刻まれる。赤い絆の証――、血が溢れ、短剣の腹に彫り込まれた溝へと通じる。剣身に浮かび上がる複雑な魔法紋様。

「繫血」

プリスが静かに呟くと、プリスが持つ短剣とミオの嵌めた指輪が光の糸で繋がった。ちらちらと赤い光の粉を散らす、ブリーデと騎士を繋ぐ魔力の路。

準備を整えたプリスたちの前で、門が開く。門の外で対応しようとしていた住人が街の中に逃げ込んでくる。

その向こうにいるのはスレイヴもだ。白日の下に晒された醜悪な肉体、爪、牙。人を傷つけ血を喰らう、邪悪な魔物どもが群れを成して迫ってくる。

門の外、またその周囲からの住人の避難があらかた完了したとこ

るで、プリスたちは呪文の詠唱を開始した。

『——集い来れ冬の妖精、氷雪の乙女たち』

『ロンド輪舞曲の調べは凍眠の誘い——』

『舞い、踊り、吹き荒れろ——』

詠唱が進むに従い急速に低下した気温が、プリスたちの周囲に薄い霧を生む。霜が降り、足元が白い絨毯に覆われる。

長い詠唱が終わる頃、プリスたちの前に居るのはスレイヴのみになっていた。

『請う。峻厳な、氷の抱擁を。——氷血輪舞』

詠唱の完了に呼応して大地から無数の氷柱が生え出す——氷の森とも言うべきそれがプリスたちの前を埋め尽くし、凄まじい勢いでスレイヴの群れに迫る。霧に霞む視界の中、先頭を来たスレイヴが氷柱に接触した。

粉碎。

鋭利な先端を持つ氷の柱がスレイヴの肉体を貫いた瞬間破裂する。接触破裂粉碎、氷の森が爆発的な勢いでスレイヴの群れを蹂躪する。霧と肉片と破裂した氷の欠片、そしてそこに反射して煌く陽光とが織り成す破壊の輪舞。

住民たちの歓声が響く。

門から数十メルの距離を氷の森が覆い尽くそうかという頃、唐突に何かが碎けるような音がして、蹂躪劇は終わった。

霧がもうもと立ち込める。

リンヤがプリスたちの下に走って来た。興奮気味に話しかけてる。

「お疲れ様、プリスちゃん、ミオ。今回はすごかったね」

だが——プリスは答えない。繫血も解いていなかった。

「……何か、変だった」

緊張した声。

「魔法の終わりがおかしかった。わたしはあんな風には終結させて、ない」

「……え？」

霧が少しずつ引いていく。プリスはその向こうに目を凝らす。そこに見えたのは、霧を裂いて輝く紅色の二つの光点。近付いてくる。霧の向こうから、氷の蹂躪を耐えた何者かがやって来る。

ふいに、光点が消えた。

霧が散る。そうして姿を現したのはいびつな形をした巨大な杭――、凄まじい速度で、プリスたちを狙って、飛んでくる！

「――！」

プリスはほとんど反射的に氷の盾を生み出した。衝撃、破砕。巨大な杭が氷を穿ち、諸共粉々になって飛散する。

ばらばらと降り注ぐ氷と杭の破片の向こうに、人影が姿を現す。

「……え？」

気の抜けた声を出したのは、リンヤだった。無理もない、プリスでさえその者の姿を奇妙に思ったのだ。

門の下に立っていたのは、小さな子どもだった。白い髪を頭の両脇で二つにまとめ、地面に届くほどに垂らした幼い女児。外見からすれば年齢は六、七歳程に見える。黒い布だらけの、装飾過剰な長衣を身につけ満面に笑みを浮かべている。

少女は片手に、人の形をした大きなぬいぐるみを抱えていた。

口を開く。

「スゴイ魔法。さすが 霧氷の魔女 とか言われるだけのことはあるね」

人と変わらぬ、いかにも幼女らしい声だった。だが。

「ハジメマシテ皆さん、ボクはミューレ」

名乗りながら笑う彼女の口元に、人には有り得ない長さの犬歯が覗く。肌は死人よりもずっと蒼い冒瀆的な色。そして――

「今日は、ねえ……」

その瞳には、禍々しく輝く紅の光が灯っている。

「――ミンナの血を、もらいに来タヨ」

それらが示す少女の正体を、プリスは戦慄と共に呟いた。

「騎士吸血鬼……！」  
ナイトイ

「あはっ」

小さく笑うと、吸血鬼ミューレは視線を巡らせ――

「……ナンダ、男しかイナイじゃん……。男は死ね」

地面に手を突いた。プリスは悪寒を覚え、叫ぶ。

「みんな逃げろっ！」

ミューレの手から赤血色のどろりとした光が漏れる。

地面が剥がれた。

石畳がばらばらになり、土くれとともに巻き上がる。それらは瞬間に集結し、現れたのは杭の群れ。ミューレを包むように浮かぶその先端が住人たちを狙っている。

プリスは短剣を突き出し、呪文を叫ぶ。並ぶ杭のさらに外側に氷の壁が出現する――と同時に、杭が一斉に射出された。氷壁が轟音を立てて崩れ去る。

「ヤッパリ――邪魔するんだな！ 騎士！」

たなびく霧の向こう、赤光を曳いてミューレが飛び上がった。天に向かって突き上げられた腕の先には、先ほどに倍する巨大な杭が浮かんでいる。

「覚悟シロよお！ ボクを邪魔したことを涎垂らして謝るまで、後悔させてやるからなア！」

『――貫け氷花、刹那の墓標となれ―― 烈氷槍 ！』

プリスが生み出した魔法の氷槍が杭と激突、互いに粉々になる。

だがプリスは、更に叫びをあげる。

「……貫けっ！」「……んあ？」

魔力の残滓を散らして消える氷槍の陰から、もう一本の槍が姿を見せる。ミューレの表情が驚愕に固まる――

が、それは一瞬。一転ミューレは笑みを浮かべ、腕に抱えたぬいぐるみを前方に突き出した。どろりとした赤光が漏れ、それに触れた氷の槍が溶け落ちるように消滅した。

「な……っ？」

後に残ったのは、赤い魔力の残滓と——何かが砕けるような、奇妙な音の余韻。

「ソナナの、ボクには効かないよお」

馬鹿にしたような笑顔を浮かべ、ミューレは再び杭を生み出す。

「オマエも女の子みたいだから、殺シはしないけど。——逝けえ！」

杭が動き出し、そして、

ひゅっ——と風を切る音がした。

ミューレの額から、一本の細い木の棒が生えた。

「……んあ？」

杭がほどけ、土くれになつてばらばらと落ちる。ミューレは額から生える棒を見た後、それが飛んできた方向に目をやった。

その先には、長い髪を風になびかせ弓を構える少女——リンヤが居る。

また一射。今度の矢はミューレの手に受け止められ、跡形もなく消えた。ミューレの口角が吊り上がる。笑顔——壊れた三日月のような、禍々しい笑顔。

「女……！」

「リンヤも下がって！ その弓じゃだめだ！」

「……わ、分かったよ……！ プリスちゃん、ミオ、気をつけて！」

「逃がスかつ」

「お前の相手はわたしだっ！」

プリスは再び氷槍を撃つ。が、先ほどと同様ぬいぐるみによって掻き消された。

砕けるような音の余韻が、耳を打つ——

「……あのぬいぐるみ」

「魔法を打ち消す効果があるみたいですね。さっきの詠唱魔法を止めたのも、きつとあれです」

「ああ。……でも、あれは、まるで——」

「あ——……もうソナナ、いなくナッタ……逃げ足速いな、もう……」

ミューレは少女らしい、しかし場違いにあどけない声で不満を訴える。額に刺さった矢を無造作に引き抜き、投げ捨てた。そして言う。

「デモ、ま、いつかア。血約者<sup>フリーデ</sup>がいるしい」  
紅眼がミオを捉える。

「霧氷の魔女 のブリーデだったら……さぞかしオイシイ血が採れるでしょうねえ!？」

土くれが集結し巨大な杭が生まれる。三本。

「ホラあとつとと逝っちゃえよお!」

射出。プリスは氷壁を張る。三本の激突音が一塊になって響いた。壁に亀裂が入る――が、まだ崩れない。わずかに時間の隙間が生じる。ミオが鋭く言った。

「プリス、糸が」

「うん。少し深く切るよ」

ミオは頷く。二人を結ぶ赤い糸は何度も魔法を使ったことで細く、輝きは薄くなっていた。

「うつ……、」

プリスは手早くミオの腕に傷を入れる。いつもより深く傷をつけ、たくさん血を短剣に通わす。赤い糸は再び強く煌いた。

氷の壁が崩れる。

『烈氷槍!』

同時に氷槍を放つ。しかしこれもぬいぐるみに掻き消された。

「ああーっ!」

プリスたちの赤い糸を目にしたミューレが、頓狂な声をあげる。

「血っ、勿体無い! 魔法になんか使ってナイでボクにヨコセ、主<sup>ロード</sup>に献上スルんだからさあ!」

空中で地団駄を踏んで悔しがる。二束の長い髪が大きく揺れた。あまりにも子どもっぽい、ほんのわずかばかりながら緊張感の殺がれる仕草だった。

「……お前たちの主は、誰なんだ?」

プリスはそう問いかけた。

ヴァンパイア・ロード

吸血鬼の王が大きな力を注ぎ込み、自らの片腕として生み出す者。低級な隷属吸血鬼とは何もかもが違う、人語を解し魔法さえ操る王の護衛者たち——それが騎士吸血鬼だ。彼らには必ず、仕える主がいる。

しかし、ナイティとは皆こんな風なのだろうか……と思う。話には聞いていたものの、実際に遭遇するのは初めてだったのだ。子どもの姿、奇矯な性質。想像との乖離が激しかった。

その力の強さと恐ろしさは、聞き及んでいたものに違わないのだが……。

「ボクの主お……？」

ミューレはわずかに怪訝そうな顔をした後、一転して笑みを深める。眉を吊り上げ傲然と胸を張る、誇らしげな態度。

「決まってる。ボクの主は——」

その口から飛び出した名前に、二人は驚愕する。

「レーヴァ様、だ！」

「——なっ」

「そんな……！ ロード・レーヴァは、三年前に破滅したはずですよ！」

「ハッ」

ミューレは腰に手を当て、人差し指を横に振る。

「ボクらの主は不滅デス。オマエラ如き人間なんかには殺られるか、バーカ。逝ケッ」

土くれが渦を巻いてプリスたちを取り巻く。その中から小さな杭が無数に現れ二人に迫る。プリスは慌てて氷の壁を張る——が、ロード・レーヴァの名に受けた衝撃のせいで反応が遅れた。何本かの杭がプリスたちの体を掠め、鮮血が飛び散る。

「アハハハ！ 血ダ、血ダー！」

興奮したミューレは攻勢を強める。プリスは混乱を止められない。「どういふことだ、奴の言ってることは本当なのか？ 主が破滅し

たらナイティも一緒に滅びるはずじゃ……」

あのぬいぐるみが魔法を打ち消すのを見て、よもやとは思った。

「魔法の破壊」、それはロード・レーヴァの魔法 塵化 の効果のひとつ。そしてナイティは、主の特質を反映する。

しかし――

「プリス！」

はっとする。ミオがじっと、目を覗きこんでいる。

「今は、ナイティを退けるのが先です……！」

ミオの顔色がやや悪い。プリスは不用意に動揺したことを自覚し、努めて冷静さを取り戻す。

「……分かった。でもどうする。遠隔魔法じゃあのぬいぐるみに防がれる」

「せめて地上に落とせれば……」

「うん……いや、待って。それならば、もうすぐ――」

ミオの表情にも理解の色が浮かぶ。ただそれにしても、チャンスはおそらく一度きり。失敗はできない――。プリスとミオは、そのことを目と目で確認し合う。

プリスは魔法を使って、周囲に深い霧を発生させた。

「何だア……？」

視界が閉じる。ミューレの姿まで見えなくなったが、それは相手にしても同様のはずだ。杭による攻撃は目で見て狙いをつけている――そんな予測のもとでの行動だった。

案の定、攻撃の手が止む。

「クソッ……、ウザったいなア」

時折、赤くどろりとした光が見える。おそらくぬいぐるみを使って霧を払おうとしているのだと思われる――が、払われるそばから新たな霧を発生させている。赤い光は敵の位置を知る格好の手がかりとなった。

そして、そのときが来る。時を稼ぎ切ったと知ったプリスは、一気に霧を消し去った。

晴れ渡る視界——ミューレの紅眼がプリスたちを捉え

——ひゅどんっ——

と、おそろしく鋭く重い音が響いた。ミューレの矮躯が弾かれ吹き飛び、街の外壁に叩きつけられて落下した。躯が地に跳ねる。

「ハア……？ なッ、んだコレ……？」

自分の胸に刺さったものを見て呆けたような声をあげる。それは、太い矢だ。

彼方の高架上、自身の身長をも超える長大な弓を構えるリンヤの姿がある。様々な材料を配合して射出力を大幅に強化された長弓が、ロングボウミューレを射抜いて撃墜したのだ。

『——儚き氷花』

呪文詠唱の声にミューレは視線を上げ、表情が歪む。疑問と混乱、そして戦慄。

プリスの隣に、ミオがいない。

「——はあッ！」

逆側。振り向いたミューレの視界にミオの体が躍る。裂帛の気合、体全体が回転し、ミオは強烈な蹴撃を放った。それはミューレの頬を穿ち、飛び上がる間もなく地に叩き伏せる。

『——仇を穿ち、咲き誇れ……』

ミューレは必死の形相でぬいぐるみを掲げる。しかしミオの第二撃がそれを跳ね飛ばす。

「ア——」

『氷穿花 あっ！』

穿孔。大地から生じた鋭利な氷がついにミューレを貫く。花開くように展がった氷柱が少女の軀を突き破る。氷柱の生長と共にミューレの矮躯は宙に浮き、固定される。

「うつ…… テメ……」

スレイヴならばとうに活動を停止しているほどの傷を受けても、ナイティたるミューレは止まらない。だが、あと一押しだ。

『貫け氷花——』

「レクレー!!」

ミューレが絶叫した。意味が分からない言葉——だが、変化はすぐに訪れた。ばがんと身の毛のよだつ音がして、何者かが立ち上がったのだ。

それはミューレの持っていたぬいぐるみ。開いている。胸から腹部が裂けて、体の中身が覗いている——普通ならば綿か何かが詰まっているだろうそこには、赤黒くねばついた液体に塗れた、無数の禍々しい牙が生えている。

それはまるで、吸血態。吸血鬼が血を奪うための忌まわしい姿。ぬいぐるみは異様な俊敏さでミオに迫った。回避しようと後ずさったミオの体が、よろける。

そのまま平衡を崩し——膝をついて、倒れた。

「ミオ!」

プリスの叫びは悲鳴に近い。

——貧血だ。急激な運動が、ミオに貧血を起させたのだ。

「レクレっ、ブリーデの血を吸っちゃいなア!」

プリスは走る。ミオを救うために。

いまや異形の本性を現した騎士<sup>ナイト</sup>吸血鬼の片割れが、ミオに近付く。まるで悪夢のように敵の動きは速く、自分の体は進まない。小さな体を呪った。速く走れないことを悔やんだ。

目の前で、ぬいぐるみと、ミオの体が重なる。

（ミオ……!）

声は出なかった。

鮮血が散り、赤が、視界を染める。

吸血態に捕らわれたミオの体が無数の牙によって傷つけられ、大量の血を流す。そして——

光輝の爆発。

赤い閃光が視界を灼く。

ミオが流した血によって、二人を結ぶ赤い糸が凄まじい輝きを放った。まるでひとつの季節の間に生まれて死ぬ、短命な灯火虫の光

を集めて輝かせたような力強くも儚い煌き。

『離れろっ、消し飛べ！』

プリスは思い切り、儀式短剣をぬいぐるみの背に突き刺す。

『砕氷核　！！』

絶叫と同時に、ぬいぐるみの軀が内側から破裂するように吹き飛んだ。

ぼろぼろになったぬいぐるみ、ミオを助け起すプリス、ミューレはそうしたものを見界に捉えながら呆然として呟いた。

「……え？」

ぬいぐるみの骸に、放心の態で語りかける。

「レクレ？　レクレ……！？」

それはもう、動かない。

「……ウ、うそ……」

プリスは気絶したミオの体を腕に抱き、鼓動を感じながら、短剣の切っ先をミューレの頭に突き付けた。そして言う。

「姫を攫うなら、騎士から倒せ。……知らないかったか、ナイティ偽騎士」

頬はプリス自身の涙とミオの血とで斑に染まっている。二人を繋ぐ赤い糸は、なおまばゆい。

「ううっ」

ミューレは怯えた表情で身じろぎした。氷の花が、いまだに彼女の軀を囚えている。

『貫け氷花——』

「ウ……っ、うワアアああああ！」

慟哭と恐怖が混じったような叫びを上げると、ミューレは自分の軀を引きちぎるように氷の戒めから脱出した。そして——

プリスたち目掛けて、宙を滑るように突進してきた。

虚を突かれたプリスは一瞬詠唱を中断してしまう。その隙にミューレはぼろぼろになったぬいぐるみを掴んで飛び上がる。

『——刹那の墓標となれ。　烈氷槍　』

氷の槍が飛び、ミューレの軀を抉る。だが浅い。彼女はそのまま

飛び去ってゆく。

「ウウウ、血、血が要る、血があ……ああ、レクレ、レクレえ」

泣き喚きながら飛行するミューレの進路は——街の奥。飛行する速度は、大人が走るよりもわずかに速い。

リンヤの矢が飛ぶ——が、これも空を切る。リンヤは次の矢をつがえて撃とうとしたが間に合わない。リンヤの筋力では長弓の連射は不可能だ。

「プリスちゃん……！」

逃げられる——プリスは逡巡した。逃がす訳には行かない、だが、ミオを放っておくこともできない。

「……リンヤ、ごめん、ミオを頼む」

赤い糸は未だまばゆい輝きを放っている。すなわちプリスはまだ、戦える。

ならば選択は、明らかだ。

それがミオとの絆であり、約束なのだ。吸血鬼は撃滅しなければならぬ。しかも相手は手負いとは言え、危険な騎士<sup>ナイト</sup>吸血鬼。騎士ではないリンヤに任せてはおけない。

「で、でも……」

困惑するリンヤを振り切るように、プリスは叫ぶ。

「早く追わないと見失う。……頼んだよ！」

「あ、プ、プリスちゃん！」

走り出した。プリスは、振り返らない。

ユラノは重い足取りでアカリの後ろをついていく。力になってあげたいのに何もできない、泥沼のように絡みつく無力感がユラノの歩を遅らせていた。

「——何だ、あれ」

アカリが呟く。空を見上げていた。

初めは青空に浮かぶ黒い点のように見えた。それは急速に大きくなり、すぐに細部が把握できるようになる。

人、だった。

それも小さな子ども。ぼろぼろの黒衣に身を包み、白く長い髪をなびかせながら飛んでくる。「……見ツケタ……！」

間近にやって来ると、それは殆ど墜落に等しい勢いで着地した。少女だった。笑っていた。しかしそれは決して喜楽に拠るものではない、絶望の内にわずかな希望を見たかのような悲愴な笑顔。片手に何か、ぼろきれのようなものを掴んでいた。

「……なっ……んだ、お前……！」

アカリは怯えて後ずさる。無理もない、その少女の両眼に灯る光を見たならば。

赤くて、黒い。

少女の両目に宿る禍々しい血色の光——それは吸血鬼の証だ。

「見ツケタ……！ お前、血の恋人だろ……！」

瞳孔の開ききった凶眼、狂気染みた笑顔。自分が標的だと知ったアカリは恐怖に顔を引きつらせる。

「お前の魔力があれば、レクレは助かるんだ！ 血をヨコセ！」

「下がってっ！」

ユラノは剣を抜きながらアカリを押し退け、吸血鬼との間に立ち塞がった。

「何ダよお、てめー……」

吸血鬼は苦しそうに顔をゆがめて一步下がった。

そのまま何処かに行ってくれるか、とユラノは期待した。——それは、すぐに裏切られる。

「邪魔するなよお、レクレが、レクレが死ンジャウんだからアア！」

凄まじい金切り声と同時に、大地が剥がれて集束する。それはユラノの視界を縦真つ二つに裂くほどの、巨大な鋸刀となった。

「死んじゃえよっ！」

「——あぶねえっ！」

体を引つ張られる。アカリと一緒にになって地面に転がった。刃がすぐ真横の地面を穿つ。

「アカリは逃げて！　ここは僕が――」

「馬鹿言ってんじゃねえ！　んなことできつか！」

影が差す。刃が再び落とされようとしている。

二人は地面に倒れたままだ。

ユラノは自分を盾にしてアカリを護ろうとした。

断頭台のように刃が落ちる。せめてもの抵抗に剣を掲げた。

襟首が引つ張られた。背後。入れ替わるように誰かが前へ。赤い後ろ髪。アカリだ。刃が迫る。落ちてくる。視界が狭まり刃で一杯になる。アカリを護らないと、でも間に合わない。もう刃はすぐそこだ。落ちてくる。二人まとめて断たれてしまう。刃がアカリの、頭に触れる、

直前で止まった。

「うう、血の、恋人……、テメ、邪魔すんなよお……」

アカリの額から数ミルメルの位置で刃は停止していた。いや、歪に生えた鋸刃のひとつが、わずかにアカリの額を傷つけていた。額から、鼻筋を伝って、流れ落ちる赤い雫。

吸血鬼がぶるぶる震え出した。すると融け落ちるように刃が消えていく。

「うっ、ボクも、血が……」

よろめき後ずさる。その鼻先を、凄まじい速さで氷の槍が通過した。遠くを振り見る。小さな少女と、細いが力強い赤い光。

「う、う、」

呻きながら、がくがくと不自然な動きで辺りを見回した。目が泳ぎ、瞳に宿る紅の光が狂ったように尾を曳き跳ねる。アカリを見、ユラノの剣を見、遠くのプリスを見て、最後に動かなくなったぬいぐるみの骸を見た。

「くそっ……、くそ、クソ、クソっ！」

ヒステリックに首を振りながらゆっくりと浮き上がる。

「お、覚エテロよ、お前らあっ！」

そう絶叫すると、ふらつきながら移動を始める。直後にプリスの

放った氷槍が刺さり、弾かれたように吹き飛んだ。しかし墜落には至らない。

吸血鬼は街から離れる方向へ飛び去っていく。

その姿が見えなくなった頃、ようやく二人は緊張から解放された。

「……助かった」

地面に大の字になったアカリが、心の底から安堵したように呟いた。

## 第八話

### 三章

ユラノは医務室の扉をノックする。返事を確認すると、扉を開けて中に入った。

ベッドの隣にはプリスとチウ爺が座っている。ユラノのほうを向いているのはチウ爺だけで、プリスはベッドに横たわる少女をじっと見つめていた。

「ミオは大丈夫……？」

チウ爺にだけ聞こえるように、小声でそう聞いた。

「ああ。今は寝ているだけだ」

「そっか。よかった」

安堵する。リンヤが泣きそうな顔で重傷だと言ったので、相当に心配していたのだ。

「普段から採り溜めていた血が役に立った。まさに備えあれば憂いなしという奴だな……これがなかったら、どうなっていたことか」

チウ爺はベッド脇に吊り下げられた革袋を見た。その下端からは管が伸びていて、ミオの腕まで繋がっている。

「それ……ミオの血？」

頷くチウ爺。

もしもの為にと、ミオは普段から少しずつ自分の血を採っては保存していたのだ。いつかあるかもしれない、大量に血を失ったときに備えて。

ミオは静かに眠っていた。お腹の上でそっと手を組み、ぴくりとも動かない。寝息すら殆ど聞こえなかった。言われなければ死んでいると思ったかもしれない、それほどに顔色は悪かった。日頃から白すぎる肌をしていたが、今は蒼いを超えて土気色がかっている。腕から伸びる輸血管が、痛々しかった。

「隊長……」

傍らでじつと自らのブリーデを見つめる騎士、プリスの姿を見る。うまく感情の読み取れない表情をしていた。色々な想いが混じり合っ  
つて、均一になってしまったような顔だった。

ただ、元々小さなその体が、いつもより更に小さく見えた。

「……ユラノ。みんな、いるかな？」

プリスは奇妙に表情の欠けた顔のまま、ユラノを向いた。

「いる、けど」

「今後のことについて話そう。みんなを集めてくれないかな」

「でも、隊長、ミオについてあげなくていいの？」

プリスの表情は変わらない。

「大丈夫だよ。命に別状はないって言うし」チウ爺をちらと見て、すぐに視線を元に戻す。

「チウ爺もついてくれる。それに、すぐにでも話したいことがあるんだ」

会議室にはプリス、ユラノ、リンヤ、カイの四人が集まっていた。プリスは皆が揃ったことを確認すると、静かに口を開く。

「みんな、まずは無事でよかった。大きな怪我もなく、本当に」その言葉に皆が反応する。最初に声をあげたのはリンヤだった。

「でも、ミオが」

「ミオは……大丈夫。ちょっと眠ってるだけ」

そう言って笑う。弱々しい微笑みだった。明らかに無理をしていると分かってしまい、ユラノは胸を衝かれてしまう。

「いいんだ、ミオにとっては覚悟していたことだから。ミオが頑張ってくれたから、誰も大きな怪我をしないで済んだ。わたしには断言できる。ミオは、後悔していない」

「でも、プリスちゃんは……よかったの？」

「わたしは騎士で、ミオはわたしのブリーデだ」

即答だった。静かな、しかし強い声。

「わたしは決めたんだ。護るべきもののために、大切なもののために、ミオを傷つけることを厭わないって。わたしたちは血約したときから、そうやって生きることを決めた。このくらいのことでもたしがミオを傷つけるのを止めたら、ミオはきつと怒る。そのことが――わたしがミオにつける傷が、わたしたちの、信頼と絆の形なんだ。それが騎士とブリーデということなんだと、わたしとミオは、信じてる」

そう言って微笑む。笑顔は弱々しくも、目はしっかりと前を向いている。

「だからいいんだ。わたしは後悔していない。ミオも絶対に、後悔なんかしていない」

「……分かったよ。でも、あんまり無理しないで欲しいな……。プリスちゃん、わたしたちには無理するなって言うくせに、自分たちはばかり無理してちよつとずるいよ」

「そうだよ。隊長はもう少し、僕らに……」

頼ってくれても、と言おうとしたユラノは言葉に詰まる。明らかにプリスたちのほうが強い力を持っていることを思い出してしまうのだ。隷属吸血鬼スレイヴが相手ならば何とかなっても、ミオをあれほど傷つけてしまう者が相手では、どれほど通用することか。

「ユラノ……、ありがとう」

「えっ」

「リンヤもね。みんながいるから、わたしたちが無理できるんだから」

ユラノとリンヤは顔を見合わせる。そういうことではないのに、と思う。けれどお互いの顔には笑みが浮かんでいた。やや、苦々しくはあったけれど。

「カイも。いつもご飯おいしいよ」

「あ、う、うん」

ずっと黙っていたカイは、とつぜん話を振られて慌てたように頷いた。

「ぼくにはそれくらいしか、できることがないし」

「でも、重要なことだよ」

「今日なんか、カイがいなかったらご飯抜きだったもんね。ふふ」  
リンヤに微笑みかけられて、カイは照れたように俯いた。

「戦いだけが全部じゃないから。できることを、すればいいから」

「……うん」

カイは安心したように笑みを浮かべて、少しだけ頷いた。

「——さて」

場を改めるようにプリスが一声放つと、空気が瞬時に緊張感で満ちる。

「これからのことを話そう。みんなもう知ってると思うけど、この街に騎士<sup>ナイティ</sup>吸血鬼が来た」

ナイティという単語が出るだけで、部屋の中がわずかに暗くなっただようだった。

「それ自体も重大なことだけど、もっと大変なことがある。ナイティには主になる吸血鬼がいるんだけど、その名が……レーヴァ」

「ロード・レーヴァって、三年前の禍のときの王、だよな」

「そう。だから、おかしいんだ」

ロード・レーヴァは三年前に破滅している。少なくとも記録ではそうなっているし、プリスもその目で見た。

「ナイティも王から魔力を受けて動いているから、王が破滅したならもろともに活動を停止するはずなんだ。それなのに……あのナイティは、確かに主はレーヴァだと言った」

ゆっくりと、みなに理解が浸透する頃合を見計らいつつ、プリスは語る。

「……あのナイティが使っていた魔法の性質からしても、本当に主はレーヴァである……つまり、実際にはロード・レーヴァは破滅していなかったと考えるのが、わたしは妥当だと思う」

みな、黙り込む。沈む空気。

このとき、ユラノの頭には三年前の惨劇が蘇っていた。他のみな

も一様に暗い表情になる。

「また、三年前みたいなことが起こるってこと……？」

リンヤの不安な呟きは、皆の心中を代弁していた。

「そうはさせない」

プリスの態度は断固たるものだ。

「わたしたちが、そうはさせない。こんなときのために、わたしは騎士になったんだから」

「僕たちだって手伝うよ」

「わたしも」

ユラノはリンヤと一緒に身を乗り出して言った。そもそもプリスとミオだけに任せるつもりはなかったが、プリスの態度に逆に不安を煽られたこともある。あまりに決然としていて、考えたくもないような行動を取るのでは、と思ったのだ。

「うん、みんな、一緒だ」

その答えを聞いても、少しだけ、プリスが遠い存在に感じられた。「ナイティには結局、止めを刺せなかった。だから奴はきっと、また来る。当面はそっちに注意すべきだと思う」

また来る、と聞いた瞬間、ユラノの脳裏に吸血鬼が言っていたことが蘇る。

——お前、血の恋人だろ。

今にして思えば、あの吸血鬼は明らかにアカリを狙っていた。その割にはアカリの命を奪うことに躊躇いを見せたりと、行動に一貫性がないような気はした——が、もしまたあの吸血鬼が来るならば、きっとアカリを襲うに違いない。

ユラノは、その考えを皆に話した。

「僕らの家で、アカリを守ろうよ」

すぐに答えた者は、誰もいなかった。

しんと静まった部屋の中、誰もが複雑な表情で視線を逸らし、あるいは俯いている。

しばらく経った後、ようやくプリスが口を開いた。

「……それは、どうだろう」

「どうしてっ……」

知らず、声が大きくなってしまった。

「少なくとも、ここに匿うのは危険だ。ここは街のと真ん中だし、ナイティを呼び寄せてしまう結果になるかもしれないことは、簡単には決められない」

ユラノは言葉に詰まる。

「……そうか……そう、だよな」

意気消沈する。確かに、アカリを守るためだけに街を危険に晒すわけにはいかない。

「じゃあ、僕たちがアカリのところへ行けば」

この提案にも、プリスの返事は冴えない。

「前にも言っただと思うけれど、街の人たちの反発が、心配だ」

「……じゃあ、どうすればいいの？ アカリを見殺しにするの……？」

「そうは、言っていない」

「でもそういうことじゃないか」

「ユラノ、落ち着いてよ……」

カイがユラノを制する。ユラノは小さく謝った。それでも湧き上がる気持ちは萎まない。

気が付けば、口に出していた。

「僕一人でも、アカリを守るよ」

「えっ？」

驚いたのはリンヤだ。アカリの話になってからじつと俯いて口を噤んでいたのだが、ユラノの一言で弾かれたように顔を上げる。

「だってここに呼べない、誰もアカリについていてあげないんじゃない、もし吸血鬼が来たとき守れないじゃないか。相手は空を飛べるんだし、今回みたいに正面から来ないかもしれない」

「でもっ、ユラノ一人じゃ！」

リンヤは叫ぶ。ほとんど悲鳴のような声だった。

「危なくても、見殺しになんかできないよ」

「だったらわたしも行く！」

今度はカイがはっとしてリンヤを見た。

「ずっと一緒に戦ってきたんだもん。わたしはユラノのパートナーだよ。ユラノが行くなら、わたしも行く。……いいでしょ？」

ユラノに向かって必死に訴えるリンヤを、カイはしばらくの間、じつと見ていた。

そして、どこか諦めたように俯いてしまう。複雑な表情だった。

「危険、だと思うけど……いいの？」

「なに言ってるの、ユラノが最初に言い出したんじゃない」

「そうだけど……」

「いいよね、プリスちゃんも。だめって言っても行くけどね」

プリスは首を、縦にも横にも振らなかった。じつと唇を引き結んで、黙り込む。

「……騎士でもないきみたちが、たった二人でなんて」

「それでも、やらなきゃならないことはある。……隊長が、いつも言ってることだよ」

言いながら、ユラノはアカリのことを思った。拒絶するときの険しい目付き。キララを見るときの優しい表情。そして、教会で空を見上げていた、消えてしまいそうな姿。

そして、確かに想う。

先ほどは勢いから守ると言ってしまったけれど、それは、確かに本心だったのだ——と。

「これは、隊長がミオを傷つけるのと、同じことなんだ」

プリスは雷に撃たれたように、目を見開いて硬直した。しばらくそうしていたプリスは、しかし、結局——

「……ごめん」

俯いてたった一言呟き、それきり黙り込んでしまった。

「ユラノ、すぐにあの子のところ、行くの？」

「うん。いつ吸血鬼が戻ってくるか分からないし、早いほうがいいと思うんだ」

「そう、……だね」

そのとき夕飯後の食堂に残っていたのは、ユラノとリンヤの二人だけだった。プリスはミオが気になると言って早々に席を立ち、カイは食事の後片付けで水場にいる。

もうすっかり陽は落ちている。外は闇だった。

「あの……さ。ユラノ」

急にリンヤはごそごそと何かを探ると、立ち上がってユラノの前に来た。両手を背中に回し、どこか落ち着きない様子でユラノと視線を合わせないようにしている。何かを言おうするように顔を上げてはまた俯く、ということを何度か繰り返した。

何だろう……と思いつつ待っていると、リンヤは意を決したように口を開いた。

「あのね。これから、もしかしたら、あのすごい吸血鬼が襲ってくるかもしれないでしょ？」

「うん」

「ユ、ユラノが剣で戦って、わたしは後ろで弓矢を撃って、って今までやってきたよね」

「うん。僕は前に出て吸血鬼を止める。リンヤは後ろからサポートしてくれる。リンヤ弓上手いし、すごく助かってるよ」

「ありがとう。……でもね、これからもそれで大丈夫なのかって、わたし思ったの」

確かにそうかもしれない。戦ったのはわずかな時間だけだったが、あのナイティの恐ろしさは身に染みている。剣一本で太刀打ちできる相手ではないかもしれない。

これから二人でアカリを守ろうと言うのに、今の力では心許ない。……でね」

リンヤの声が一段、小さくなった。何だかもじもじしていて、俯いた頬が、ほんのりと……染まって、いて……。

そのときユラノは、ようやくリンヤが何を言おうとしているかを悟った。

意識した瞬間、胸が凄まじい勢いで弾み始める。頬がかつと熱くなる。

リンヤが後ろ手に持っているものが猛烈に気になる。考えが正しければ、リンヤが今後ろ手に持っているものは、「あれ」に違いないのだ。

「……あのね」

ついにリンヤの腕が動く。ゆっくりと、背中から、ユラノの前に向かって。

姿を現したそれは全く予想通りのもので、だからユラノの鼓動は更に激しく跳ねた。

「も、もし、よかったら、ユラノ……」

リンヤの桜色の唇から、決定的な一言が紡がれる。

「わたしの、騎士になってくださいっ!」

## 第九話

差し出されたのは血約の儀式短剣。リンヤは鞘を両手で捧げるように持っていて、握りが今、ユラノの目の前にある。お辞儀するよ  
うな体勢になっっているので表情がよく見えないが、額が真っ赤にな  
っているのが分かった。そのままの体勢でじっと、動かない。

頭が真っ白になった。

そういえば……、リンヤは僕のブリーデになりたいって、言っ  
たな…… カイが。

そんなことを、ぼんやりと考えた。誰か別の人間が代わりに考え  
ているような気分だった。

「あ、あの……」

反応がなくて不安になったのか、リンヤが顔を上げつつ話し出し  
た。

「け、血約すれば、その、プリスちゃんとミオみたいに仲良くじゃ  
なくて強くなれるし、これからすごい怖い吸血鬼とか来ても安心だ  
と思うんだ」

聞いたこともないような早口だった。

「わたしなら弓が使えるから足手まといにならないし、ずっとユラ  
ノと一緒に戦ってきたからユラノのことよく分かってるつもりだし、  
あと、その、今でも一緒に暮らしてるから色々と便利だと思うんだ、  
うん、いいと思うんだよ、わたし、オススメだよ」

真っ赤な顔でうんうん、と頷く。

「オススメ……だよ？」

いきなり不安そうな声になって、上目遣いでそろそろとユラノの  
様子を伺ってくる。

「……ど、どうかな？」

どうなんだろう、とユラノは思った。リンヤと血約する。僕がリ  
ンヤの騎士になる。

僕がリンヤに、血を流させる――

急に頭がはつきりする。好意を向けられて舞い上がっていた心が冷静さを取り戻す。騎士になるということの意味を、しっかりと認識し直す。

改めて考える。僕は、リンヤの騎士になれるのか？

しばらく……考えた。

そして、答えを出した。

「……ごめん」

「……え」

「僕は、リンヤの騎士には、なれない……よ」

言った瞬間、リンヤの瞳がいつぱいに見開かれた。糸が切れたように短剣が下がる。

かすれた声で言った。

「どうして？」

「覚悟が……できないんだ」

「覚悟……？ わたしはユラノに傷つけられる覚悟、できてるよ？」

「ううん、できてないのは、僕がリンヤを傷つける覚悟のこと」

「傷つける、かくこ……」

「騎士は、ブリーデのことを大切にしないといけない。魔法を使い続けるにはブリーデの体を傷つけないといけないから。ブリーデの体を大切にしながら、傷つける……矛盾してること、だからこそ、騎士になるのは、ものすごい覚悟が必要なんだと思う」

「ユラノはわたしのこと、大切に思っていないっていうこと？」

ユラノは首を横に振った。

「リンヤのことは大切に思ってる。けど……何か、騎士とブリーデっていう関係とは、違う気がするんだ……どちらかというと、妹みたい……」

言いつつ、心中では別のことも考えていた。それは、カイのことだ。

カイはリンヤのことが好きだと言っていた。だから自分がリンヤ

と血約してしまえば、カイはきっと哀しむだろう。表面上は祝福してくれるかもしれない。けど、気持ちを知ってしまったからには、それを無視することはできなかった。

そんなことを考えている間、リンヤは一言も発さず、ぴくりとも動かなかった。

感情が抜け落ちた顔。瞳だけが、わずかに震えている。

——目じりから一雫、涙が零れた。頬に跡を残して落ちる。

「……リンヤ？」

呼びかけると慌てたように目元を拭う。

「い、いい。わかった。わかったよ……ユラノが、わたしのこと、ちゃんと考えてくれてるんだってことはわかったから……いい。十分、だよ」

「……ごめん」

リンヤは俯き、ぎゅっと唇を噛んだ。強く、強く——血が滲むほどに噛み締める。

しばらくの間、言葉はなかった。堪えかねたように、ユラノは口を開く。

「それじゃ、僕は……行くよ」

「わたしも、行く」

「……大丈夫？」

顔を上げたリンヤは、笑顔だった。

「だ、いじょうぶ。行ってくて言ったし。二言とかないし！　っていうか、ごめんね、おかしいこと言っちゃって、気にしないで」

「うん……」

「じゃあ、準備してくるから。弓とか持っていないかね。外で待ってて、すぐ行くから」

そう言つと踵を返して、部屋から出て行つた。直後、はあ、という大きなため息がユラノにまで届く。

ユラノは何だかやるせない気分になる。心の中だけで、ごめんね、ともう一度だけ呟いた。

準備を終えて食堂に戻ると、ユラノはもう居なかった。言った通りに外で待つてくれているのだろっ、とリンヤは思う。ユラノはそういうところは素直なのだ。

「……はあ」

誰もいない部屋でひとり、またため息をつく。

物音。顔を向けると、カイの姿が目に入った。

「……リンヤ」

カイは悲しそうな様子だった。それで分かってしまう。先ほどのやりとりを、カイも聞いていたのだと。リンヤは笑って言った。

「ふられ……ちゃった」

笑えたのは口元だけだった。

「どうしよ、カイ、わたし、ふられちゃった……あはは」

そう言ったことが引き金になって、泣いた。涙が溢れてきた。ぼろぼろ、後から後から涙は湧いてきて、頬をびっしり濡らしている。カイとしてはそんな様子を見せられても困るだけだと思うけれど、止められない。酷い顔になっていると自分で分かる。それでも落ちた涙で足元の床が濡れている。声をあげて泣きそうになるのを、せめて必死で我慢した。涙を拭う余裕がない。

「ごめ……、カイ」

「いいよ」

顔をあげた。カイはじっと、リンヤを見ていた。

「ぼくのことは気にしないでいいよ。泣いても、いいよ……」

女の子のようにきれいな顔が、気弱そうな、でも優しい表情で笑ってくれている。堪らなかった。つらくて、誰でもいいから、頼りにしたかった。カイがいいよと言ってくれて、だから、リンヤは気がつくとかイに抱きつくような格好で、肩の上に顔を埋めていた。

嗚咽。もう我慢できない。こもった自分の泣き声が頭の中に反響する。背中にそっとカイの手が触れてくる。温かくて柔らかい、手。泣くのをもつと我慢できなくなる。

それから涸れるほど泣き続けた。カイはずっと無言で、リンヤを慰め続けた。

扉を開けると、聞き慣れた、だけど今一番聞きたかった声が耳に飛び込んできた。

「プリス」

「……ミオ！ 大丈夫？」

ミオは頷いたが、身はベッドの上に横たえたままだった。蠟燭の弱々しい炎が、ミオの顔を仄赤く照らしている。それでも顔色が悪いことがよく分かった。

傍らですっとミオの容態を見ていたチウ爺が言う。

「峠は越えた、といったところだ。ミオの希望で輸血は外した。まだしばらくは安静にしている必要があるが、そのうちまた動けるようになるだろう」

「そう。ありがとう、チウ爺」

「これが俺の役目だからな。俺は戻る。何かあったら呼んでくれ」  
そう言ってチウ爺は出ていった。ということは、本当に安心していいのだろうと思う。

「……干しぶどう食べる？」

「うん。食べる」

持ってきた革袋からひと粒の干しぶどうを取り出して、ミオの口元に運ぶ。少しだけ身を乗り出して、ミオは干しぶどうを口に入れた。指とくちびるがわずかに触れる。乾いた感触が指に残った。

「状況は、どうなったんですか」

ミオが目覚めた安心を噛み締める余裕もないことに、わずかにやるせない気持ちになる。

それでもプリスは気丈に答えた。

「結局、取り逃がしたよ」

「そう……ですか」

「ロード・レーヴァは、破滅してなかったんだな」

母を殺した王の名を呟く自分の騎士を、ミオは不安そうな面持ちで見ている。

「ナイティが出てきたんだ。この件は、一刻も早く片付けないといけない。こればかりは……あいつらには任せられない。……騎士でなければ、ナイティや王とは戦えない。そのためにこの三年間、ずっと準備してきたんだ……」

——それなのに、自分は何をしているのだろうと思う。彼ら二人だけをアカリのところへ行かせて、自分は動けないでいる。

「ユラノ君たちは、どうしてますか？」

ミオの問いに、プリスは苦々しい想いはさらに募る。

「ユラノとリンやは、アカリのところに行くって」

「アカリさんのところに？ どうして？」

「ナイティがどうも、血の恋人を狙ってるみたいなんだ」

「……ナイティが」ミオは考え込むように俯いた。

「プリス、覚えてますか？ 三年前、ロード・レーヴァがアカリさんに異常な執着を見せていたこと」

「……うん」

「私気になつて、教会の書庫で血の恋人について調べたことがあるんです。それによると……今まで、女性の血の恋人というのは、ほとんどいなかったそうです」

プリスの中で、何かが繋がった。

「……女性の血は、魔力溶媒だ」

「そう。もしかしたら、アカリさんの血は、吸血鬼にとって特別な意味があるのかも」

黙り込む。状況からも、アカリが狙われるのはほぼ確実。とすれば、アカリを守るのが最もいい手段のはずだ。

そう、分かっている。ユラノに言われるまでもなく、アカリのところへ行くのが最良なのだ。

それでもプリスは動けない。血の恋人にまつわる因習、街を守る使命、そしてアカリとの間にあるわだかまり——それらの鎖が、き

つくプリスを縛り付けている。

そのことを十分に理解した上で、それでもミオは言う。

「……私たちも、アカリさんのところに行くべきだと思います。ユラノくんただけに任せておくわけには、いきません」

「でも」プリスは慄いた。声が震える。「わたしは、アカリに、酷いことを……。わたしが行ったら、アカリはどう思うか」

「確かに、そうかもしれません」

プリスはまるで殴られたような顔をする。

「ねえ、プリス」

ミオはつらそうな表情で、じっとプリスを見る。そして静かに言った。

「……逃げるのは、もう、終わりにしましょう」

「ミオ……」

「今までは確かに、避けることがアカリさんを守ることになっていたかもしれない。だけど今回は、本当にあの人を——アカリさんだけじゃない、ユラノくんたちまで、見殺しにすることになります。

……プリスにとってアカリさんのことは、痛みを伴う思い出だというのはわかっています。でも」

ミオの言葉がプリスを打つ。

「痛みから逃げるのは、私たちの在り方ではない。……違いますか？」

「——あ……」

その言葉がきっかけとなって、プリスは先ほどユラノが言ったことを思い出した。

——それでも、やらなきゃならないことはある——

一人でもアカリを守りに行くと言って聞かなかった……それはまさに、プリスがそう在ろうと誓った姿ではなかっただろうか。

「その通りだ……」

なぜ、気付かなかったのだろう。

プリスは過去に間違いを犯した。それを正すために必要な痛みも、

ミオを傷つけるときの痛みも、結局は同じことのはずなのだ。

そうと分かってしまえば、プリスはミオとの絆のために、もはや躊躇ってはいられない。

「わたしたちも、アカリのところに、行こう。……もう逃げるのはやめだ」

そう言うミオの表情がそっと緩んだ。

「……うん。それでこそ、プリスです」

頭を撫でられる。プリスは照れた。

「……子ども扱いするな」

「はいはい、霧氷の魔法少女さん」

まだ撫でられる。

「こんなときだけ、魔法少女という……。まったく」

表面上だけ不満そうな声を出しながら、プリスはミオの胸に頭を預けた。そして目を閉じる。

「アカリのところに行ったら、今までのこと全部、謝ろうと思う」

「うん」

頭に触れるミオの手に集中する。心地よかった。久しぶりの感覚だった。

「すごく……不安だ。だから、ミオにもついてきて欲しい」

「当たり前です。……私にだって、責任はあるんですから」

そうじゃない、と思った。ミオは悪くない。けれど口には出さずに別のことを言った。

「……ミオ。もう少しだけ、こうしてていいかな」

「うん。いくらでも、いいですよ」

ミオに撫でられるたびに不安が解けていくようだった。おかしい話、吸血鬼と戦うことよりも、アカリと話すことに大きな不安を感じている。ただ、それもミオと一緒にいてくれるなら、きつと越えていけるだろうと思えた。

ミオとは絶対に離れ離れになりたくない。プリスは心の底からそう思った。

「それじゃ、行こっか」

家から出てきてそう言ったリンヤは、いつもと変わらないように思えた。少なくとも声音はそうだ。表情が見えたなら何か分かったかもしれないが、今は夜。リンヤの顔はよく見えない。気まずかった。けれど、どうしていいか分からない。

結局、特に言葉を交わすこともなくアカリの家に着いてしまった。そこはもうすっかり静まり返っている。

「もう今日は寝てるかな」

小声でリンヤに囁きかける。

「どうか。……もう吸血鬼に襲われた後だったりして」

笑えない冗談だった。いつもより声が無感情な気がして、それが余計におそろしい。

「確認してみたら？」

「う、うん」

「今夜はわたしが見張ってる。ユラノは寝ていいよ」

そう言うのと、近くの廃屋のほうに歩いていく。わずかな取っ掛けを足場にして器用に屋根に上り、腰を下ろして片膝を抱えた。そして遠くをじっと見る。

どこことなく寂しそうな様子だった。それはそれで気になったものの――

（……ともかく、ちょっとだけ確認しようかな）

リンヤの言う通りだったら大変だ。傾いた扉に手をかけようとすると、勝手に開いた。

「なんだ、お前か」

アカリだった。物音が気になって出てきたようだ。額に包帯を巻いている。今日の昼間、吸血鬼につけられた傷だ。

「その傷、大丈夫？」

挨拶も忘れ、ユラノはそう言ってしまう。

「……ああ、大丈夫だけど」

安堵する。

「ていうか、何やってんだ、こんな夜更けに」

「吸血鬼から、きみを守りにきたんだ」

「あたしを……？」一瞬怪訝そうな声を出した後、息を呑む気配が伝わってくる。

「今日の奴が、また来るってのか？」

「そうかもしれない。血の恋人を狙ってたみたい、だったし」

アカリはため息をついて、ゆるく首を振る。疲れたような仕草。

「本当は、僕たちの家に匿えたらいいんだけど」

「どうせそれが駄目だから、わざわざこっちに來たんだろ？」

「……うん」

プリスとのやりとりを思い出して、すこし気分が沈む。

「せめてもう少し守りやすいところに行きたいんだけど、どうかな。

キララも一緒に」

「駄目だ。キララの調子が悪いんだ。今は動けない」

「そうなんだ……」悪いことは重なるな、とユラノは思った。「様子はどうかの？ 大丈夫？」

「今日戻ってきてからずっと、苦しそうにしてる。まあ、今までもたまにあつたことだから、我慢してればその内おさまるよ」

アカリの様子にそれほど深刻なところはない。本当に大丈夫なのだろう。

「そっか。じゃあ、僕はとりあえず近くにいるから。今夜はリンヤが見張っててくれるって」

「……ああ」

「じゃあ、また明日」

ユラノは手を振る。アカリはその手を見るだけで、反応しなかった。

ユラノが近くの適当な廃屋に消えるまで、アカリはずっとそこに立っていた。

二日後の朝。ユラノが目を覚まして外に出ると、ミオが来ていた。  
「ミオ？ もう大丈夫なの？」

「ええ。おかげさまで、すっかり」

微笑む様子に不安なところはない。ユラノは安心する。と同時に不審に思う。

「隊長は……？」

アカリについては腰が重い様子だったから、本当にミオ一人なのだろうか。

「ええと……ここに」

ミオが後ろを振り返るような動作をする。すると、ミオの影から小さな姿が現れた。

「隊長、どうしたの？」

「……いや、その」

プリスは妙に歯切れの悪い様子で、ミオの服の袖を握ったりしている。あまり見られない、年齢相応に頼りなさげな様子だった。

「アカリに、会いに来ただけ。いないみたいで」

「いない？」

アカリの家を覗く。寝台の上でキララが寝息を立てているだけで、確かにアカリの姿は見えなかった。そういえばリンヤの姿も見えない。アカリの後を追っていったのかも知れない。

行く先の心当たりは——あった。

「隊長、ミオ、ついてきて」

ユラノがそう言つと、二人は怪訝そうに顔を見合わせた。

傷痕断崖の廃教会に行くと、果たして入口のすぐそばにリンヤがいた。

「おはようユラノ……って、あれ？ ミオ、もう大丈夫なの？」

「ええ、まだ完全に本調子というわけでもないですけど」

「あんまり無理、しないでね……？」

リンヤはミオの腕を取って、肌をさすったりしている。

「おはよう、リンヤ。中にアカリいるよね？」

「ん？ うん。いるけど……？」

不思議顔のリンヤにミオが言う。

「私たちも一緒に、アカリさんを守ることにしたんです」

「え、そうなの？ あんなに渋ってたのに？」

二人の会話を背後に聞きつつ、ユラノは教会の中に入っていった。堆積する瓦礫。崩れた壁から見える空。床石の隙間を縫って咲く花々とちらちら漂うその芳香。見棄てられた場所の停滞した、しかし清澄な空気の中、いつかのようにアカリは崖の縁に立って空を見上げていた。

「アカリ」

呼びかけると、ゆっくりと振り向く。表情が薄かった。しかしプリスがいるのに気がつくと、その顔に軽い驚愕が浮かび——すぐに、怒りに変わる。押し殺した声で言った。

「……お前、何しに来た」

プリスはアカリの様子に気圧されたように俯き、口ごもりながら言う。

「まだ、ここに来てたんだ」

「何しに来たって聞いている」

そう言うアカリの声は、ユラノが初めて会った頃よりも陰しかった。プリスの声も暗く沈み、いつもの覇気が感じられない。二人の間には何かがあると常々感じてはいたものの、思っていた以上に溝は深いのかもしれないと思った。

「きみを、守りに来たんだ」

アカリの目がわずかに見開かれる。

「守るだって？ ……お前が、あたしを？」

「そう。わたしは……」

プリスはその言葉を、最後まで言い切ることができなかった。それはきつとアカリの顔を見てしまったから。

目には暗い怒りの炎を灯し、口元には冷笑を浮かべて。アカリの

視線は、プリスをともに射抜いていた。

更に、言葉の刃が振り下ろされる。

「そう言ってお前はまた、あたしを裏切るのか」

「……ちがう」プリスの声は小さく、アカリには届かない。

「あのときみたいに」

かたちだけの冷笑は、一瞬でかなぐり捨てられた。

ユラノはそのとき気付いた。プリスをきくと睨むアカリの瞳はまた、曖昧に揺らいでいる。

何度か見た瞳だった。だから今では何となく分かる。

きつと、今のアカリの本当の気持ちは、怒りではなくて――

「どうせ、あたしが血の恋人だから、穢れてるからって、見捨てるんだろっ！」

――寂しい、のだ。

+

「……おねえちゃんがいない」

寝起き直後のはっきりしない口調で、キララは呟いた。声は誰もいない家の中へ溶けこむように消える。

頭を巡らせる。いつもの家だった。腐りかけの木壁、ほとんどただの穴と変わらない窓からは朝の光が射し込み、その中を埃か何かがふわふわと浮遊している。

静かだ。息を殺してじつとすれば、本当に何の音も聞こえない。

静けさは、寂しさを連れてくる。

アカリが何処に行ったのかは大体わかっている。だから、心配なわけではなかった。

ただ、寂しいのだ。

痛む頭を押えた。体が熱い。胸が別の生き物みたいに跳ねている。体の調子が悪いのに、アカリがそばに居てくれないことを寂しく思う。

でも、本当は何となく分かっているのだ。どうしてアカリが、あの廃教会に行くのか。

どうして調子の悪い自分を置いて、行ってしまうのか。

「お姉ちゃん……」

二年ほど前から、アカリはあの廃教会に行くようになった。街の人たちとの間に起こった色々なことが落ち着いて、しばらく経った頃だった。ちょうどキララの病気が、今のように突発的に悪化するようになった時期でもあった。

「……わたしを、置いて行かないで」

アカリは、たぶん、逃げているのだ。

あの教会は逃げ場所なのだ。もしかしたら死んだ母の思い出を掘り所にしているのかもしれない。ただ一人優しかった母の思い出を、最近はずっと頻繁に行くようになっていく。そのことが、とても不安だった。姉は自分を置いて何処か遠いところに行ってしまうのではないか。

そう、もしかしたら、最近来るようになったあの人——ユラノくんといっしょに——。

ユラノくん。ずっと一人だった姉を構ってくれる、すこし珍しい人。ちよつと格好いい。頼りない感じはするけれど……でも、きっと、優しい人。キララも決して悪い印象は、持っていなかった。……お似合いだと、思う。

だから、お姉ちゃんと一緒に、どこかに行ってしまうても……おかしく、ない。

とつぜん強烈に、お姉ちゃんに会いたい、と思った。

キララは掛け布を羽織り、のろのろと寝台から身を起した。外に行く準備を整え、調子が悪くてうまく動かない体を押して、歩き出す。お姉ちゃんに会いたい。置いて行かないでほしい。わたしのことを、忘れないでほしい。それだけを思っ

キララはこのとき、少しだけ——ユラノに、嫉妬していた。

## 第十話

アカリの言葉が心に刺さる。

ある程度は予想していたことだ。けれど、それでも痛い。呼吸が乱れてうまく話せない。体の感覚が半分くらい、どこかに行ってしまったような気がした。ユラノが驚いたような顔をしている。きっと信じられないのだろうと思う。

だけどアカリが言っていることは、本当だ。確かに言った。血の恋人は穢れていると。アカリと出会った三年前は、プリスは今よりずっと古い考えに囚われていたのだ。そのせいで、当時一緒に暮らしていたアカリとキララを追いつ結果になってしまった。

「……確かにわたしは以前、そう言った。だけど、今は違う。そんなことを考えてない。あのときのわたしは、間違ってたんだ。今は——アカリを、本当に、守りたいって思ってる」

「信じられるかよ」

たった一言で切り捨てられた。アカリは険しい目付きを一寸も緩めない。

「もう、裏切られるのはたくさんだ。またあんな想いをするくらいなら、ずっとキララと二人で居るほうがいい」

頑なだった。

つらかった。アカリが頑ななのは自分のせいなのだ。初めにアカリを裏切った自分が一番悪いのだ。その事実が、とても苦しい。

だが、アカリのほうがずっと苦しい想いをしてきたはずだ。最低限生きていくだけの助けしか得られず、見棄てられた地にたった二人で暮らすことがどれだけ苦しいか——プリスには想像することしかできない。

「今更お前が何をするって言うんだ。もうあたしたちが街に戻って暮らすことなんてできない。キララの病気も治らない。一体、どうするって言うんだよ。お前に、答えられるのかよ……」

その哀切な訴えに対して、プリスは真正面から答えることはできなかった。おそらくそれは誰にとってもできないことだ。血の恋人に対する偏見を無くすことはできないし、キララの病気の治し方も分らない。

誰にも直接アカリを助けることはできない。しかし、それならば

「——わたしはせめて、きみの身にこれから迫る危険から、きみを守りたい」

それが精一杯の答えだ。

じつとアカリの目を見て言った。見返すアカリの視線が怖くて、目を逸らしたくなるのを必死で耐えた。本気だということを示したかった。自分が犯した間違いから目を背け、今までずっと逃げてきた。その過ちを、償いたい。言葉だけでは足りないかもしれない。態度だけでも足りないと思う。だからその両方で、わずかな想いだけでも伝えられるように。

「確かに一緒に暮らすことはできないかもしれないし、キララの病気も治せない。だけど、きみたちの心の支えにはなることは、できると思う。きつと、少しずつでも……」

「心の、支え？」アカリの表情が怒りに燃え上がる。

「どっ、どの口で！ あたしが穢れているからキララが病気になった、とまで言った奴が！」

ユラノが更に大きく驚いたのが気配で分かった。

「確かに、言った……けど、もうそんな風には思っていない。後悔してる。償いたいんだ……」

「ハッ……どうだか」

アカリは強く顔を歪めて吐き出すように言った。その仕草が、またプリスを傷つける。

伝わらないのか。遅かったのか。もう修復できないところまで来てしまっていたのか。

いや、きつと、違う。単にまだ、足りないだけ。それなら——

「……ごめん」

「——なっ……」

アカリも、ユラノも、リンヤも——ミオでさえもが、驚愕の声を漏らした。

プリスはひざまづき、地に手をついて深く頭を下げていた。地面に擦るほどに。

「お前……なっ、」アカリは激しく狼狽する。

「何してんだよ、やめろ、頭上げろよ！」

「本気なんだ。間違ってたって思ってるんだ……」

「何なんだよ、お前……なんで、そこまで」

ユラノは呆然とプリスの様子を見詰めている。リンヤが駆け寄ろうとしてミオに止められた。アカリもどうしていいか分からない様子で立ち竦んでいる。怒りの色はすっかり消え失せ、ただ困惑だけがその顔に浮かんでいる。

——そのとき、その場の誰もが驚き、プリスの姿に注目していた。だから初めに気がついたのは顔を上げたプリスだった。

それはすでに、アカリのすぐ背後に浮かんでいた。

「あはッ……！」

二束の白髪が風になびき、瞳は大きく見開かれ、口元にはまるで壊れた三日月のような歪んだ笑顔。ぼろぼろになったはずの衣服も穴だらけになった軀も、すべてが元通りになっている。——片腕に下げた、ぬいぐるみの骸を除いて。

「吸血鬼！」

「——捕まえたあ！」

ナイティ・ミューレはアカリの腕をしっかりと掴み、間髪入れずに強く引く。吸血鬼の凄まじい力が抵抗などまるで無視してアカリの体を吊り上げる。アカリの顔が痛みに歪んで、恐怖に染まる。ミューレは狂ったように笑った。

「あ、アハ、ハハ、アハハ！ 血の恋人、捕まえたア……！ ——あ？」

しかし、急にその動きが止まる。ミューレは教会の入口に、じつと視線を向けた。

つられてみなが、そちらを見る。

「キララ……っ？」

アカリが信じられない、というような声を漏らした。

確かにそこにはキララがいた。捕らわれた姉に対する心配からか、それとも吸血鬼に睨まれた恐怖からか、目をいっぱいに見開き固まっている。アカリが叫ぶ。

「来るな！ 逃げ……っ！？」

言葉半ばにミューレが飛んだ。腕が強く引つ張られる痛みからか、アカリの言葉が途切れる。

ミューレはプリスたちの頭上を越え、あっと言う間にキララのもとへ――

「ひっ――」

着地。腕を掴まれたままのアカリが強く地面に打ち付けられる。

そのまま地面を引き摺られて、アカリは苦悶の声を漏らした。

キララは蒼白な怯え切った顔で首を振り、自分の体を抱くようにあどずさった。激しく震えている。現実から逃避するかのように、額を、片手で押えた。

ミューレがキララに近付く。

そしてじつとキララの顔を見つめ、壊れたような笑みを更に深めて、高らかに叫んだ。

「レーヴァ様！」

――全員の動きが、止まる。

（……何を言っている？）

プリスは訝った。ミューレはキララを見つめている。あの吸血鬼は、確かにキララに向かって叫んだのだ。彼女の、主の名を。

キララは反応しなかった。額を押えて俯き、もう片手で自分の体を抱いたまま、動かない。

「レーヴァ様……？」

ミューレは少し迷った後にぬいぐるみを手放し、空いた腕でキララの腕を掴んだ。キララはされるがまだ。

「レーヴァ様、ボクやったよ、血の恋人捕まえたよ！」

掴んだ腕を振りながら、興奮気味にミューレは語る。その動きに合わせてキララの体がかがか揺れる。

「……てめつ、キララから手え放せ！」

「ウルサイな。血の恋人は黙ッテろ」

ミューレはアカリに頭突きをした。一声呻いてアカリは黙る。彼女の額が割れ、血が流れて白い肌を赤く染めた。

キララは少しだけ、頭を傾けた。アカリの様子を見たようだった。プリスは違和感を覚えた。

——なぜ、キララは動かない？

吸血鬼に話しかけられた上に腕を掴まれているのに、あの無反応さはどこおかしい。

もつと慄くなり、喚いて逃げ出そうとしてもいいはずだ。いや、初めは確かにそんな態度を取っていた。いつから今のようになった？ ……いつのまにか、体の震えも止まっている。

あれではまるで——冷静、そのものようだ。

その想いを証明するかのように、キララが口を開く。

「……お姉ちゃんを」

それは、確かにキララの声だった。だが。

「お姉ちゃんを、傷つけるな」

明らかに、違っていた。言われたミューレはびくりと身を竦ませる。

「コ、コレは……その、仕方なく」

「うるさい」

冥い声だ。……キララの、聞いたことのない声。

「お姉ちゃんを、傷つける奴は——」

キララはミューレの目の前に掌を突き出した。

「消えろ」

「……え？」

ミューレは半分笑ったまま、キララの掌を見返す。

次の瞬間、ミューレが消えた。

まるで最初からいなかったかのように、わずかに腐ったような香りだけを残して——少女吸血鬼は跡形もなく消え失せた。彼女の持っていたぬいぐるみの骸だけが残る——キララはそれを見ると、ゆっくりと拾い上げて、同じように塵に返した。

俯いたまま、平板に呟く。

「お姉ちゃんを傷つける奴は、許さない」

そして、顔を上げた。そのかんばせは。

肌が、口元が、そして瞳が——もう人ならぬものへと、変貌していた。

死人の如き冒瀆的に蒼い肌。人の肌を突き破り、血を啜る為の長大な犬歯。そして——

「吸……血、鬼？」

プリスが呆然と呟く。

キララの両目には、まさにその証——赤血色の渦々しい光が灯っていた。

——開いた。ずっとそこにありながらも閉ざされていた扉が、しもべ《ナイティ》の接触によってこじ開けられた。キララに融けて眠っていた王の記憶が呼び起され、血の流れに乗って解放される。

何もかもを思い出した。三年前に騎士に追い詰められ、破滅寸前に至ったレーヴァが何をしたのか。その結果、自分の身に何が起きたのか。

「ロード・レーヴァ……なのか？」

プリスが問う。キララは今や、それにはっきりと答えることができる。

「違う。わたしはレーヴァじゃない」

「それなら……、その眼は一体……それに」

プリスは繋血を維持している。いつでも魔法を放てるよう、短剣を油断なく構えたままだ。

「今の力、ナイティを消したのは、塵化——ロード・レーヴァの操る魔法じゃないのか」

困惑の空気。プリスだけではなかった。誰もが何が起こったのか、把握できないでいる。

全てを理解しているのは、唯一、キララだけだ。

キララはプリスの問いに答えず、アカリのそばにしゃがみこんだ。

「……痛そうだね。お姉ちゃん」

そつと額の傷に手を添える。いまだに血が流れ続けるアカリの傷に。

「でもね……これからは、怪我してもすぐに治してあげられる」

触れた場所からわずかに、赤くどろりとした光が漏れる。すると額の傷がきれいに消えた。

「もう、薬なんて形式を通る必要はないよ」

アカリは呆然とその様子を見ている。プリスも同じように呆然とした声で、さらに問う。

「傷を、治す……？　ロード・レーヴァにはそんな力が？」

「そう」

キララはゆらりと立ち上がり、プリスを振り向いた。

「わたしの——レーヴァの力は、あなたたちが言うような　塵化

とは少し違う。壊すだけじゃなくて、癒すこともできる力——分解と再構成。それがわたしの、本当の力」

「再構成……？」

プリスの中で、色々なことが繋がる。ミューレの力。大地を剥がして杭にしていたあれは、すなわち大地を分解して杭に再構成していたのだ。

「でも、分からない。どうしてキララにそんな力が」

「レーヴァは、わたしの中にいたの。三年前から」

「キララの中に、いた……？」

「わたしの、血の中に」

プリスは思考し――

「まさか」

やがて、答えに辿り着く。

「自分を分解した、のか……？」

「そう。騎士との戦いで破滅しかけたレーヴァは、自分を分解して血になった。そしてわたしの中に溶けて隠れたの。傷が癒えるまでの時間を稼ぐために」

アカリが口を挟んだ。

「キララ、じゃあお前は、吸血鬼なのか……？」

キララを見上げる目は、まるで悪夢を見るようだった。対照的に、キララは微笑んでいる。

「違うよ、お姉ちゃん。わたしはキララ。吸血鬼でも、あるけれど」

「本当なのか。本当に、吸血鬼に……なんでだ。なんでよりもよって、キララだったんだ」

「それは、わたしがお姉ちゃんの妹だったからだよ」

「……何だって？」

「お姉ちゃんが、血の恋人だから」

アカリは絶句する。顔色が失せる。

「あたしのせい、だっていうのか？」

「お姉ちゃんのせいじゃない。お姉ちゃんのお陰だよ」

「何がだよ。キララはそんなになっちまって……」

「本当は、わたしの心はレーヴァに殺されてしまはずだった。けれど、そうはならなかった……お姉ちゃんの血が、とても強かったから。お姉ちゃんが、わたしの心を守ってくれた」

キララはそつとアカリの頬に手を添える。

「わたしは吸血鬼になってしまった。けれど、お姉ちゃんがいれば

――血の恋人の強い魔力があれば、もう血を吸う必要なんてない。お姉ちゃんはいってくれるだけいいの。なぜなら、わたしたちは、血が繋がっているんだから」

「あたしがいれば……血を吸わなくてもいい？　じゃあ何も、問題、ないのか？」

「そう」

キララは微笑む。

「何も問題なんかない。これからは、二人で幸せに過ごしていける」「本当に？」

「うん」その返答に、アカリの表情がわずかに緩んだ。

「もう、辛い思いをすることもない。わたしの力と、お姉ちゃんが  
いれば、もう——人の中で暮らしていく必要なんかない」

「……え？」

「二人きりで、暮らしていける」

微笑んで、言う。心の底から自分の言葉の真実を疑っていない顔だった。

「どこか遠いところで、誰にも関わらずに生きていける」

アカリは——動かない。

「食べ物だって取ってきてあげる。わたしが食べさせてあげる。今まではわたしが世話してもらってたけど、これからは逆。恩返しだ  
と思ってくれればいいよ」

キララは迷いない瞳、威風溢れる態度でアカリを見下ろし、手を  
差し伸べる。

「行こう、お姉ちゃん。これからはずっと、一緒だよ」

アカリは地面にへたりこんだまま、じっと差し出された手を見つ  
めた。

目が泳ぐ。何度かそつとキララの目を見て、すぐに逸らした。手  
を取ろうとは、しない。

キララは焦れた。

「お姉ちゃん」

少しだけ強く呼びかけて、自分からアカリの手を取ろうとする。  
「——待って！」

キララは動きを止めた。

「……ユラノくん」

「行っちゃだめだ」

「どうして？」

「ずっと二人きりなんて……。何も問題がないなら、僕らと一緒に暮らせばいいじゃないか」

「だめだよ」

「どうして……」

キララの心に苛立ちが生まれる。何も分かっていない言葉だ。

「わたしは吸血鬼だから」プリスとミオを見る。「騎士は吸血鬼を、放っておかない」

「でしょう？」と視線で問いかける。答えはない。

「繫血だつて解いてないし。……やる気満々だよね」

「隊長！」

悲痛とも言えるユラノの声。それでもプリスは繫血を解かない。

「……わたしが繫血を解いても、キララはアカリを連れていくのをやめないだろう」

「もちろん」

「わたしもユラノと同じで、アカリを連れて行かせたくない。だつたらもう、手段は一つしかないじゃないか」

「そんな！」

「どうしようもないんだ、ユラノ。キララは吸血鬼になった。しかもただの吸血鬼じゃない、王の力を持っている」

「まだ決まったわけじゃ」「わたしたちが！」

プリスは声をあげて、ユラノの言葉を遮った。

「……わたしたちが見逃しても、他の騎士たちが放っておかない。だつたら」

ミオの手を握りしめ、言う。

「せめて、わたしたちが、……やる」

断固たる態度だ。

キララは思う——これが、騎士の姿だ。吸血鬼の狩り手、天敵、

けて相容れない者。血の因縁で縛られ運命付けられた敵同士。そう、プリスの言う通り。騎士は吸血鬼を見逃さない。

「これで分かったよね、ユラノ君」

ユラノは愕然とした様子で立ちすくんでいる。何も分かっていない愚かな人。どうしていいか分からないようだ。

「わたしたちは解り合えない。騎士は吸血鬼と出会ったら、戦わずにはいられないようになってるんだよ」

キララはアカリに手を差し伸べる。

「ねえ、お姉ちゃん、一緒に行こう。……来てくれるよね？」

アカリは、やはり動かない。手を取ってくれない。

自分から手を伸ばした。

アカリははつとして――身を引いた。

「……お姉ちゃん？」

「お前、本当に……キララなのか？」

空白。思考が止まる。笑顔がひきつるのが自覚できた。

「なに、言ってるの……見れば分かるでしょ？……ちょっとは変わっちゃったけど」

「キララはずっと普通に暮らしたいって思ってた。二人だけで暮らすうだなんて……そんなこと言う子じゃなかった」

「だって、わたし吸血鬼になっちゃったし……」

「だからって、いきなりたった二人だけでなんて、普通じゃない」

「じゃあこの人たちと一緒に暮らすって言うの？きつとわたしを殺しに、騎士が来るよ。返り討ちにすればいいかもしれないけど、お姉ちゃんだって巻き添えに――」

――アカリが、さらに後ずさった。

「……やっぱりお前、おかしいぞ」

硬くて少し震えている、声。異物を見るような目。怯えている？

誰に？わたし？

「殺すとか返り討ちにするとか……キララは簡単にそんな言葉口にしない。お前は、……お前は、キララじゃ、ない」

お前は、キララじゃ、ない。

「……お姉ちゃん」

すぐるように手を伸ばす。払われた。  
はつきりと。

拒絶。拒絶された。お姉ちゃんに。拒絶、されてしまった。

「……へ、へへっ」

全然嬉しくも楽しくもないのに、なぜか笑えた。笑おうなんて思っ  
てない。どうしてわたしは笑っているのだろう——お姉ちゃんに拒  
絶されたということは、つまり、わたしはひとりになってしま  
ったということなのに。お姉ちゃんに捨てられた、ということなの  
に。

どうしよう。

なんで？

ねえお姉ちゃん、なんでなの？

——ああ、

そっか、……分かった。

お姉ちゃん見てるもんね。ユラノくん。プリスちゃん。みんなを。  
そっちがいいんだ。わたしよりそっちがいいんだね。分かった。ど  
うすればいいか分かった。いや、最初から分かった。答えはずつ  
と頭のどこかで理解していたはずだった。知らないふりをしていた  
だけ。聞こえないふりをしていただけ。

だって。こんなに激しく、訴えかけているんだから。

寒気がする。頭が痛い。痛むほど、激しく、教えてくれている。

きつとこれはわたしの中に溶けて混ざった吸血鬼<sup>レーヴァ</sup>の記憶。生きるた  
めにどうすればいいのか、教えてくれている。

騎士がいるから、わたしたちは安心して暮らせない。奴等は吸血  
鬼と見れば襲いかかってくる、天敵。だったら。

やられる前に殺せ。

消される前に、みんな殺せ。殺してしまえ。騎士に与する者も一  
緒だ、殺せ、塵殺しろ。安息のために、塵殺しろ。塵殺しろ。塵殺

しろ――。

「……うつ……」

そうだね……。

みんな、死んじゃえばいいんだ。

……まずは誰……？ いちばん悪い人がいい。プリスちゃん？

違う。あの子はずっと前、わたしたちを一度見捨てた。お姉ちゃんが一緒に来てくれないのは、あの子のせいじゃない。

だったら、そう。いちばん悪いのは――

お姉ちゃんに誰かと触れ合う温かさを思い出させてしまった、あの  
人。

ユラノくん。

あなたが、いちばんだ――

## 第十一話

キララが急にユラノを見た。

表情が抜け落ちている。ついさっきまでは笑っていたのに、今は虚ろな無表情。ユラノを振り見た動きも唐突で不安定感を抱かせる。瞳の輝きが異様に増したように見えた。

プリスの肌がぞわりと粟立つ。戦慄。

キララはもう、さっきまでとは違ってしまっている――

歩き出した。ユラノに向かって。凝視している。歩みは速い。

「キララ……？」

ユラノは動かない。変化を感じていないのか。いや、様子がおかしいことには気付いている。ただ行動に結びつかないだけだ。

「ユラノくん」

口調からも情動が感じられなかった。

手をゆっくり上げていく。

呟いた。

「――死んでよ」

『隔て、氷晶の囲い――！』

ユラノとキララの間には氷壁を立てる。一部がキララの手に触れた。赤光、瞬間、消滅。分解の魔力が氷壁を粉々以上の無に還す。後に残ったのは霧の残滓のみ。煙る視界を吸血鬼の紅眼が裂く。

「逃げるユラノ！ キララはもう――」 「邪魔しないでよ。どうせ

――」

「――わたしたちの知ってるキララじゃない！」 「――みんな順番に殺してあげるんだから」

霧を裂いてキララの手が伸び――

「捕まえた」

身を引くユラノを追いかけて、腕を、掴んだ。

どろりとした赤光が漏れる。

「……消えちゃえ」

「やめろキララッ!!」

びくと痙攣するように、キララは止まった。赤光は霧散。

アカリがキララの肩に手をかけていた。

「お姉ちゃん。なんで邪魔するの？」

「当たり前だろう!」

アカリはキララを押し退けるように、ユラノとの間に割って入る。ちらと後ろを振り返り、ユラノの様子を確かめた——掴まれた腕を押さえている。指の隙間からたくさんの血が漏れ出していた。わずかに発動した分解の魔法が、腕の表面を抉り取ったのだ。

アカリは痛ましそうに目を細める。

「……本気で殺そうとするなんて……」

「それこそ当たり前だよ。ユラノくんがいるからお姉ちゃんはわたしと来てくれないんだから」

キララは底無し沼のように淀んだ目つきで、アカリとユラノを睨みつける。平板な声との落差、あるいは合致が怖ろしい。

「殺すしか、ないじゃない」

「……キララ、お前」

「どいて」

「駄目だ」

「どいてお姉ちゃん」

「駄目だ。どけない」

キララは唇を噛んだ。

「……どうしても。ユラノくんが。大切だって、言うんだね」

「大切っていうか——キララ？」

両手で顔を覆い、呻く。

「——うう」

喉が破れそうな、割れた呻きだった。それは急速に、震えとゆがみと、大きさを増して広がってゆく。

「う、うう、うううう……!」

「おい、キララ」

伸ばしたアカリの手は、乱暴に払われた。呻きは更に高まり続け

「うあああ……」ついに爆発する。

「うあああああああああ！！」

拳がアカリを跳ね飛ばす。絶叫あるいは悲鳴、現れたキララの顔は――

……キララの顔には、もう、柔和だった頃の面影など欠片もなかった。血の涙を流さんばかりに瞳は見開かれ、絶叫する口は裂けそうなほどに開き切り、全力で握り固められた拳には幾本もの血の筋が浮かび上がっている。

誰もが凍りつくに十分な、おそろしくかなしいキララの豹変――。

「お前がつ、いるから！！」

一歩前へ。踏まれた瓦礫が粉々に砕ける。

「お姉ちゃんは！！」

拳を振り上げる。

「わたしと一緒に、来てくれない！！」

叩き付けた。

聞き慣れない異常に不快な音がはつきりと響いた。ユラノが床に転がる。キララは構わず殴る。殴る。呻きながら、嗚咽にも似た絶叫を上げながらそして慟哭の悲鳴を上げながら、何度も何度も殴った。お前が。お前がいるから。消えろ、死ね砕ける消えてしまえ。

それはプリスの氷槍がキララを串刺しにするまで続いた。妹の無残な姿を目にしたアカリが悲鳴を上げる。しかしキララの狂態の前では、穴の空いた軀さえまるで些事のようだった。

「ああああああつ！！」

体を貫く氷など無関係だとしても言うように、なおキララは喚き叫んで拳を振るう。氷のせいで動きが阻害され、それはすでに届かない。

「早くユラノを――！！」

「がああつ！！」

だが脚は届いた。思い切り蹴り飛ばされたユラノの体が、吹き飛ぶ。重さを忘れたように何度か跳ね、転がった。

その先には断崖が口を開けている。

誰かの悲鳴。ユラノの体は止まらない。縁から、ずり落ちるよう  
に下へと消えた。

全員が息を呑む。気温が一気に数度も下がったようだった。

ユラノの姿が消えたことで鎮静したのか、息荒くもキララは黙り、  
自分を貫く氷柱を見下ろしている。その他には、誰も、何も言わな  
かった。

「……嘘、だろ」

沈黙を破ったのはアカリの独白。それがきつかけとなった。

「まだ死んだと決まったわけじゃない！ リンヤ、下に行つてユラ  
ノを！」

プリスが下階への階段を示しながら叫ぶ。蒼白な顔のリンヤが頷  
き駆け出すのと、キララの姿が掻き消えるのが同時。

「アカリも逃げろっ！」

キララが氷柱のすぐ横に現れる。分解とそれに続く再構成。疵は  
一切、癒えている。

アカリはわずかばかり逡巡した様子だったが、結局、リンヤを追  
つて下階に向かった。

キララはその間、動かない。

「追わないのか」

「……これ以上、邪魔されるのは嫌だから」

ユラノ相手に見せた発作的な怒りは、もうない。淀んだ目つきと  
平板な声に戻っている。

「それにどうせみんな殺すんだから、あなたからでも一緒だよ。下  
に逃げ場はないしね……」

「……そうか。ならわたしは、ここできみを止める」

プリスはそつとミオに寄り添う。もうプリスたちとキララの他には  
誰もいない。

静謐。

いつの間にか空は曇っていた。凍える風がプリスたちの髪と、床の割れ目から顔を出す花々をなぶる。

ざ――、

どこからか響く葉擦れの音は、わずかに揺れた割れ鐘の音に掻き消された。

プリスはミオにだけ聞こえる声で囁く。

「ミオ」

「はい、……プリス」

いつもの呼びかけ、そして応え。しかしいつもより覇気に欠けた声だった。

目の前に立つ少女を見る。ナイティを消滅させた強大な力、ユラノを殴りつけ蹴り落とした狂気、いずれも今までのキララのものではない。彼女は自分をキララと認識しているようだが、目の前の少女は決して今までのキララそのものでは有り得ない。

キララは言った――レーヴァは死んだと。しかし、違う。レーヴァは死んでなどいない。王はキララと混じりあって一つになってしまったのだ。そのせいでキララは狂ってしまった。全員を殺すと言いつち、そうするだけの力もある。そして、実際にユラノが――。

……もはや、彼女は、敵なのだ。

ならば、やらなければならぬ。そう決めたのだ。襲い来る吸血鬼を撃滅し、全ての人を守り抜こうと。例え騎士<sup>ナイト</sup>吸血鬼だろうと、王<sup>ロード</sup>だろうと関係ない。

目の前に居るのは敵。排除すべき敵。

プリスは――迷わない。

「相手は王。いつものわたしたちでは敵わない。だから――やるよ、ミオ。ずっと準備してきた、わたしたちの奥の手を」

応えるミオの言葉にもまた、迷いはない。

「はい、プリス。覚悟は、できています」

プリスは頷き、短剣を握る手に力を込めた。そしてミオの腕に刃

を入れる。いつものように断固たる態度で、いつものようにミオのことを想い、そしていつもよりも遙かに深い傷を刻み付ける。

「う……」

ミオが痛みに顔をしかめ、溢れる血が腕を伝い流れ落ちる。儀式短剣に血が通う。

すでに繋血は完了している。だからその言葉はもう要らない。

プリスは告げる。たった一語で彼女たち二人の覚悟と絆を象徴する、決死の血約起動句を。

「——<sup>リイン・ノット</sup> 晶血」

赤い血の色をした閃光が、視界を塗り潰した。

+

あいつが落ちた。そう思ったら居てもたってもいられなくなつて、キララを置いて下の階に向かつてしまった。

もしかして、もう——そう思う度に体の中身がひっくり返りそうなほど気持ち悪くなって、その気持ちを必死で押し殺す。でも、どれだけ殺しても、黴のようにこびりついて離れない。

キララは……あいつを、殴っていた。泣き叫びながら何度も。

あたしのせいだ。

あたしが、お前はキララじゃないなんて言つたからだ。

とてつもない後悔がアカリの胸を刺す。もう少し早く気付いていれば。もっとキララをよく見ていれば。心の底からそう思う。

あたしは、なんて酷いことを。

あれは吸血鬼なんかじゃない、確かにキララだ。でなければ拒絶されて、あんな風に泣き喚いたりはしない。取り憑かれていたというのは本当なのだろう、だからきつと、そのせいでおかしいことになつてしまつただけなのだ。

キララの言つた通り、キララは吸血鬼じゃない。まだ、ここにいる。

でも、どうすればいいか分からない。

——あいつのこと、気に入ってると思ってたのに。

暗い気持ちになる。お前がいるからお姉ちゃんがわたしと一緒に来てくれないとキララは言った。あいつがいることで、もしかしてキララに寂しい想いをさせていたんだろうか。そんなつもりは全然なかったのに。吸血鬼のせいでおかしなことになってるとはいえ、殺したいほど憎むなんて。……まさか本当に、死んでは……いないよな。

そんなことを考えながら、アカリは階段を下る。

三年前の決戦で滑落し、土の中に埋もれた教会。その際に崩れたのか階段は至るところが割れ、瓦礫に埋もれていて簡単には降りられない。もどかしさと焦りが募る。先に階段を下りていったリンヤという子はもう見えない。もうずっと先に行ってしまったようだった。

苦労して元二階だった階層に辿り着いた。そこも最上階と同じように壁の一面がごっそり消滅し、崖半ばの景色が見えている。他の壁も割れ、そこからは周囲の森からのものだろう土や植物の根が侵入していた。天井からはおびただしい数の根や蔓のようなものがぶらさがり、足元は瓦礫と花々に埋め尽くされている。上階以上にむせ返るような花の香りが満ちていた。

自然の蹂躪を受けた階層の奥、崖の縁に、白い長髪の少女が蹲っている。駆け寄って背中ごしに向こう側を覗き見た。

あいつがいた。花々の絨毯の上に横たわっている。

酷い有様だった。腕は青黒く腫れ、ぐったりとして動かない。腹の防具が一際大きくへこんでいて、キララに蹴られたことがはっきりと分かった。顔だけが奇跡のようにほとんど無傷。腕の具合との落差が激しく、逆に痛々しかった。

リンヤがさめざめと涙を流しているのに気付いて、ぞっとする。

だが、胸の部分を良く見ると、ゆっくりと上下していた。——生きている。

安堵。それが思っていたよりもずっと大きくて少しだけ戸惑った。誤魔化すように呟く。

「生きてたんだな」

そう呟くと、リンヤがこちらを見た。

泣きながら睨んでいた。たじろぐ。自分は何が悪いことを言ったのか？

「あなたのせい」

涙と怒りで震えた声。

「あなたのところに行っていたから、ユラノはこんな目にあっただ」

すさまじい衝撃に襲われる。——確かに、その通りだ。

「なんで、ユラノがこんな目に遭わなきゃならないの。何にも悪いこと、してないのに」

答えられない。彼女の言う通りだった。あいつは何も悪くない。

あたしが全部、悪い。

「なんで、ユラノは……こんな子のこと」

そう言い捨てると、リンヤはアカリから目を逸らした。そしてとても優しい手つきでユラノの頭を抱え上げる。

「……生きててよかった」

胸に頭を抱いて、泣きながら呟いた。

——きっとこの子にとって、あいつはとても大切な人なんだろうな。それを、あたしは。

リンヤはそのままじつと目を閉じ、動かなくなった。

奪おうと……してしまった。大切な、命を。

……ここに居ては、いけない気がした。

強烈な冷気が降りてくる。上で何かが起きている。アカリは静かに天井を見上げた。

キララを前にし、プリスは思う。

…… 本当はずっと、悩んでいる。

ミオを傷つける度にもうこんなことはしたくないと強く思う。自分の体を傷つけるよりも、ずっと痛い。騎士としての誓いに背くことはすなわちミオに対する裏切り、だから断固たる態度でミオの腕を切るけれど、本心ではもうこれ以上毛先ほどの傷もつけたくはなかった。

「…… 何、それ」

プリスとミオの周囲を幾重にも赤い糸が取り囲んでいる。それらが放つ閃光が、一面を赤黒い血の色に染め上げている。

「繫血、じゃない？」

キララの呟きに、プリスは心中でその通りと答えた。

晶血したことにより、プリスの魔力はミオの体を通じ、プリス自身に還ってきている。いまや儀式短剣には、プリスとミオの二人分——並の人間には到達し得ない魔力が満ちていた。

プリスの額を一筋の汗が伝い落ちる。反動は、予想以上だった。体の中から大切なものを引きずり出されるような感覚。気を抜けば意識は閉じ、倒れてしまいそうだ。

これが、魔力消耗の感覚——。プリスはある種の感慨を持ってその異様を体験していた。

ミオはいつも、こんな感覚を味わっているのか。傷の痛みの上に身がよじれるようなこの不快感。ミオはどれだけ辛い想いをしてきたのだろう…… 自分で自分の魔力を操れたなら、どんなによかったことか。

だが、それはできない。自分で自分の魔力を利用すれば、自閉ループに陥った魔力が際限なく消耗され、術者は死に至る。それを防ぐために敢えて一度、ミオの体を通していいのだ。

ミオを見る。立っているのもつらそうだった。肩で息をしている。通常の魔力消耗の上、さらにプリスの魔力圧を受け、ミオの負担は

常よりも大きなものになっているはずだ。

目が合うと、微笑んでくれた。

信頼。

ミオの頬を一筋の雫が伝い落ちる。それは汗なのか、それとも――

その様子がプリスを誓いに駆り立てる。誓いの形は呪文の詠唱。

『我ら霧氷の乙女フリジア、ここに願い詠う』

それはどこか、絶望に似ている。

――吸血鬼を傷つけるのに、一切の躊躇など存在し得ないと思っていた。

それは、間違いだつたと知った。

呪文詠唱の始まりを受け、キララは動く。

赤い糸に劣らぬ強烈な輝きを灯した両の眼が、霧を裂いて迫ってくる。

だが、プリスの魔法が発現するほうが早い。

『生霧――降霜――氷結――閉鎖。凍眠に誘え……』

霧が爆縮する。キララの肌表面に霜が降り、急速に凍結する。

キララの動きが鈍る。それはただの霜ではない、活力を奪い魔力を封じる魔法の呪縛だ。

キララの両手から暗く粘り気のある光が漏れる。分解――魔法を破壊する光が、しかし、唐突に消え失せた。

「分解――できない？」

キララの顔に焦りが生まれる。晶血の魔力量が、キララの分解能力を上回る魔法強度を生み出しているのだ。そのことに気付いたキララは更なる魔力を掌に込めるが、届かない。

極低温の霜は降り積もる。

今自分が魔法を放っている「敵」は、誰なのか。本当は分かっ

いる。どれだけおかしくなっても、見た目が吸血鬼でも、彼女はかつて一緒に暮らした——キララなのだ。

巡る赤い糸からこぼれた魔力が煌々と散る。赤い血の色をした粉雪が、霧に混じって消えてゆく。

詠唱は続く。

『咲き乱れよ氷花。枷となり、仇を繋げ——』

キララの前後左右から無数の氷柱が生え出し、彼女目掛けて襲い掛かる。それは伸びるに従い枝分かれし、可憐な花のように咲いていく。敵を貫く氷花の群れ。

「——っ！」

キララは掌を突き出して 分解 による防御を試みるが、呪縛の霜がこれを許さない。氷花の群れがキララの体を縫い止めた。

吸血鬼は残らず破滅させると誓った。大切な人を、吸血鬼から守ると誓った。

キララは吸血鬼になってしまった。そして、ユラノを傷つけた。でも——。

「ミオ……。陣を」

ミオは無言で頷き、背を向けた。もう喋るのも辛いのかもしれない。プリスは一瞬だけその小さな背を見つめる。躊躇っている暇はない。短剣を持つ手を握り直す。

こんなに、儀式短剣は、重かっただろうか。

刃をミオの背にあてがう。震えた。目を閉じたくなる。そんな逃げは許せないと、自分で自分を叱咤した。

何もかもを抑え込んで、切る。ミオが呻く。その声を聞いて手が震える——歯を食いしばって、耐える。真つ二つになった衣服の向うにミオの背中が露になる。そこに描かれた複雑な図形に、傷が新たな一線を加えていた。プリスは呟く。

「起陣」

ミオの背直上に赤い輝線が疾り、凄まじい速さで図形を描く。直径二メルほどの円形をベースとし、複雑精緻な幾何模様と言霊を組み合わせた魔法陣。ミオの背中に、ミオ自身の血を用いて彫り込んでおいた、魔力増幅回路概念が形を顕す。

輝く赤い魔法陣はゆっくりと回転し、空間は血色の粉雪に煙る。響くのは慟哭のような、呪文の詠唱。

でも、守るべき人が吸血鬼になってしまったときは、どうすればいいのだろう？

答えは出せなくて、だから結局、誓いに従うしかできない。

『停滞の音に耳を澄ませ、始まりと終わりの闇へと還れ。臨零の揺籃、深淵に至る子守唄——』

ミオが気を失い、倒れた。

気が遠くなる。呪文の連唱によって凄まじい魔力量が引きずり出され、消費されてゆく。

キララは氷の花畑と極低温の霜に阻まれ動けない。ただ両眼はますます輝きを増している。まるで募る怒りと狂気を表現しているかのようだった。

……どうしてこんな気持ちでミオを傷つけないといけないのだろう。

本当はこんなことをしたくないのに、誓いだからと、自分に言い聞かせていたのに。

視界はぼやけて赤一色。降り散る魔力の粉雪、キララの眼、二人を結ぶ赤い糸。そしてミオの血。血、血——。

『——永遠の静謐に汝は至る。安らぎは我が手の中に在り』  
ようやく——ようやくだ。

終わる。

『あらゆる痛苦の……、停止と、解放を！』

呪文の詠唱が、完了する。

『アンテ＝セルヴィの永久揺籃 ……！』

空間が凍結する。氷花もキララも巻き込んで何もかもが閉ざされる。すべてを飲み込み閉じ込めて、刹那の姿に止め置く氷のゆりかご。

その色は、赤い。

キララの体が赤い氷に飲み込まれる。氷の花に貫かれ、身を乗り出し何かを叫ぶ形相のまま、キララは止まった。

『産声の前に』

凍りついたキララの頭上に巨大な氷の十字架が顕現する。その色もまた赤い。逆巻く霧と粉雪を、まるで従えるようにその身にまとう。

これを落とせば。

『墓標を』

王は、滅びる。

——しかし。

「キララあっ！」

割り込み。赤い、髪をした、少女。両手を広げ、赤い氷の前に立ち塞がり、落ちてくる十字架をじっと、見つめた。

『……立てろ』

止められない。氷のゆりかごに囚えられたキララめがけ、赤い十字が落ちていく。

突き立つ。地を揺るがす轟音。衝撃で天井が崩れ、剥がれた建材が降り、土煙が巻き起こる。

光が消えて世界が色を取り戻した。プリスとミオを結ぶ赤い糸も、ミオの背に浮かんでいた魔法陣も、何もかもが消え失せた。

アカリたちの姿は煙に紛れて、見えない。

プリスは力尽き、儀式短剣を取り落とす。膝をついた。そして気

を失ったミオに重なるように倒れ込む。

呪文は確かに完成し、正しく発動した。しかし――。

土煙が晴れる。その向うに現れたのは氷に閉じ込められたキララと、へたり込んでそれを見上げるアカリの姿。

そして、赤い氷十字。

それはキララを逸れて、すぐそばの床を深々と穿ち、斜めに傾いで立っている。

それを見た瞬間、プリスの意識は途絶えた。

## 第十二話

### 四章

目を覚ましたユラノが初めて見たのは、リンヤの顔だった。

「ユラノ……！」

薄い翠色の瞳が一瞬で濡れ、揺れる。そのままユラノに抱きついてきた。

「痛っ……！」

「あつ、ごめん！……大丈夫？」

色々なところが痛んだ。特に左腕——動かない。目を向けると、添え木の上に包帯が幾重にも巻かれて固定されていた。折れているらしい。

「うん。……大丈夫」

リンヤの行動が大事に至らなかったという意味で、そう言う。痛みが落ち着くと、頭がはつきりとしてきた。ここが何処なのか、自分がどういう状況なのか、すこしずつ情報が浸透してくる。

見慣れた家の医務室だった。窓は開け放たれていて柔らかな陽光が射し、優しい風がカーテンを翻している。窓際のベッドにはプリスとミオの姿があった。あの輸血袋が、またミオの体に繋がっている。

「……隊長、ミオ」

何が起こり、どういう結果になったのかは分からない。けれど、少なくともプリスとミオが怪我をしたということだけは分かった。胸が締め付けられるような想いがする。

プリスが吸血鬼と戦うと言ったときの決然とした態度を思い出す。やはりプリスは、一線を超えてしまったのだろうか。

いや、しかし相手はキララだった。それでもプリスは、魔法を撃ったのだろうか。

「プリスちゃんたちは、大丈夫だって」

ユラノの想いを察してくれたのか、リンヤがそう言った。ひとまずその言葉に安心するが、疑問は晴れない。

「キララは……？ どうなったの？」

リンヤの顔が曇る。

「プリスちゃんたちが何とかしてくれたよ」

この話をしたくない、という気持ちが口調に滲んでいた。やや気が引けたが、聞かずにはいられない。

「何とかって……？ もしかして——」

リンヤは首を横に振った。

「殺したりはしてないよ。ただ、動けなくしたただけだって」

「動けなく……？ どういうこと？ キララは無事——」

「ねえ」

その声は静かだったのに、不思議と言葉を止めずにはいられなかった。

リンヤはさがるような目付きで、じっとユラノの目を覗き込んでいる。

「……もう、いいじゃない。どうして、あの子のこと心配するの？」

「どうしてって、それは——」

「ユラノをこんな風にしたのは、あの子なのに」

包帯で固められた左腕を、触れるか触れないかという手つきでそっと撫でる。

「プリスちゃんたちだって、もう少しで……」

そしてユラノの目をじっと見る。

「……どうして？」

そのままユラノの返答を待つ——かと思いきや、リンヤはすぐに目を逸らした。

「いい。べつにいい。わかってるから」

「わかってる、って——」

どういうことだ、と思う。ユラノ自身すぐにこれだと言えないの

に。

「とにかく。ユラノは怪我人なんだから、寝てればいいの。ここでずっと」

「リンヤ？」

「私、見張りに行かなくちゃだけど。ぜったい、寝てなきゃだめだからね。ぜったいだから！」

何度も釘を刺しながら、リンヤは部屋から出て行った。

「……どうしたんだろう」

妙に必死だった気がする。リンヤのことだから単に心配していただけかもしれない。けれど、それ以上の何かがあるように感じられた。まるで何かを隠しているような。

プリスたちが何とかしてくれた、とリンヤは言った。本当にそうなのだろうか？ キララを動けなくした、とはどういう意味なんだろう。元に戻ったわけじゃない？

アカリはどうしてるだろう。今も動けなくなっただけというキララの元にいるのだろうか。どういう気持ちでいるのだろうか。妹が吸血鬼になってしまっただけ。

分からなかった。今の状況も、自分が何をすべきなのかも。

リンヤの言う通りにこのまま寝ているだけでいいのだろうか。そう自分に問いかける。

答えは、否だった。

直接行つて、自分の目で、どうなったか確かめないといけない。どこに行けばキララやアカリに会えるかは分からない、けれどきつとあの教会か、家にいるだろう。

そう思うと、いてもたってもいられなくなった。ベッドからそつと抜け出して自分の足で立ち、ゆっくりと歩いてみる。何とか動けそうだった。

リンヤには悪いと思う。でも、見つかったらきつと止められると思ったから、声はかけずに出て行くことにした。

「じゃあユラノ、わたし行つてく——」

弓矢その他見張りに必要な準備を整えて戻つてくると、ユラノのベッドが空になっていた。

——抜け出したんだ。あれほど言ったのに。

やっぱり、と思う。そして哀しくなる。どうしてわたしの気持ち  
はこんなに伝わらないのだろう。いつもユラノは、わたしの話を聞  
いてくれない。

でも、哀しんでいる場合じゃない。早く追いかけて、連れ戻さな  
いと。まだ遠くには行っていないはずだ。

リンヤは踵を返し、家の出口を目指した。

弓矢は持ったままだった。

「——ユラノ！」

まだ家の敷地からも出ないうちに背後から声をかけられた。思っ  
ていたよりも早い。

謝罪の言葉を考えつつ振り向く——と、そこにはさっきと同じ、  
すがるような表情のリンヤがいた。その顔がユラノに言葉を詰まら  
せる。

「行っちゃだめ」

「どうして？」

「とにかく、だめなの」

「そんな。理由もなしに、納得できないよ」

リンヤは一步も引かない態度。だが、それはユラノも一緒だ。

「僕はキララに怪我させられたんだから、彼女がどうなったか、知  
る権利があるはずだ」

「わたしはユラノに行つて欲しくないの！……どうしても、だめ  
なの？」

「……リンヤ」

「お願い。行かないで」

リンヤは走り寄るとユラノの右手を掴んだ。予想以上の力の強さ

に、少しだけ怯む。それはリンヤの気持ちの強さそのものようだった。

「教えてよ、リンヤ。どうしてそんなに、僕を止めようとするの」「言ったら、行かないって約束してくれる？」

「それは……」

約束することはできなかった。きっと理由が何であれ、自分はいくだろう。……とすれば。

気付いてしまった。自分はどうしても行く。リンヤは行かせたくない。だったら話し合いは、もう――。

「……ごめん、リンヤ。僕行くよ」

繋いだ右手を、引く。

「……あ」

あれほど強く握られていたのに、それはあっさりと抜けて、繋いだ手はほどけた。

リンヤの呆けたような顔が痛い。けれど、決めてしまったのだ。行くと。

背を向けて歩き出す。リンヤが追ってくる気配はない。そのまま、歩く。

「……ユラノ」

異様に静かな声で、再び名を呼ばれた。名状しがたい寒気を感じて振り向く。

ぎよっとした。

鏃が、こちらを向いている。構えているのは――リンヤだ。腕が震えているのが、数歩離れたここからでもはっきりと分かった。

怯えたような、混乱したような――曰く言いがたい瞳が、鏃と一緒にこちらを見ている。

――わたし、何してるんだろう。

自分以外の誰かが勝手に弓を引いた、そうとしか思えなかった。だけどユラノに矢を向けているのは確かに自分の体で、ユラノはそ

れを、口を半開きにしてぼうつと見ている。きつと驚き過ぎて何が起きたか分かっていないんだろう。

それはそうだよね……。

弓を、引いているんだもの。このまま右手を離したら矢が飛んで、間違いなくユラノの額を貫く。腕が震えているから少しは逸れるかもしれない。いや、きつと貫く。放つ瞬間には震えは止まるだろう。吸血鬼を撃つときはいつもそうだった。分かるんだ。撃つ前から当たるか当たらないか、だいたい分かる。いまは当たる。当たったら困る……。

泣きたい。

なんでこんなことしなきゃならないんだろう。ユラノを守るための弓だった、はずなのに。

吸血鬼と戦うことに決めたとき、ユラノに言われた。

『僕は前に出て、直接吸血鬼と戦う。リンヤは後ろから、弓で援護する。そうすれば僕はリンヤを守れるし、リンヤは安全に戦うことができる——』

自分にはどうやら弓の才能があるらしいと分かったときは、嬉しかった。わたしはユラノの役に立てる。守ってもらっただけじゃなくて、わたしの弓がユラノを守る。それは本当の意味で、一緒に戦えるということ。

そのはずだったのに、今していることは何……？

ユラノに弓を向けている。ユラノを守るはずの弓で、ユラノを撃とうとしている。おかしくなりそう。いや、もうなってるのかな？

「……いけないで」

ぐちゃぐちゃな声だった。わたし、泣いてるのかな……。

「……ユラノ、いけないで」

ユラノの空気が張り詰めた。何かを言おうとしている。表情はよく見えなかった。けれど。

何を言おうとしているのか、言われる前から分かっちゃって——  
「ごめん。僕、やっぱり、行くよ」

耳を塞ぎたかったけれど、弓矢のせいで、できなかった。

「……ユラノ……」

手から引き剥がすように弓矢を放って、リンヤは地面に膝をついた。ひとつ、ふたつ、土の上にしずくが落ちる。

ふと、首筋に違和感を覚えた。無意識に手を触れる。

マフラーだ。ユラノに会ってからずっと、片時も放さず身につけていた大切なマフラー。リンヤが初めてユラノにもらったもの。

出会った日は寒くて、ユラノはそのとき身につけていた白いマフラーを、リンヤにそっと巻いてくれたのだ。白い髪だから似合ってるよと言って笑っていたのを忘れない。

温かった。

それがユラノとの繋がりのような気がして、ずっと身につけていた。吸血鬼と戦うときはもちろん、家の中でもできる限り。

柔らかくて温かったマフラーなのに、今は、何かがおかしい。息苦しい。冷たい。気分が悪くなってくる。

たまらなくなつてマフラーをほどいた。持っているのにさえ抵抗を感じて地面に取り落とす。落ちる過程で広がって、白い布地が土に汚れた。

違和感が去って、別の感覚がやってくる。首筋にあるべきものがない、ぽっかりと空いたような、うつろな感覚。

でも、それでいいと思った。なにもなくていいんだ、と。

廃教会の入口をくぐった瞬間、ユラノは息を呑んだ。

一面が赤い氷に覆われている。崩れた壁も、瓦礫も、割れた床の隙間から生えた花畑も、何もかもが赤く閉ざされてしまっている。

きっとプリスたちの魔法の結果なのだろうと思ったが、こんな赤い氷など見たことはなかった。不吉な色だ。現実には、プリスもミオも寝込んでしまっている。

ユラノは歩き出した。薄く霧が出ていて視界が悪い。氷の放つ冷

気が教会全体に張り詰めている。霧の上に突き出た、一際巨大な赤い氷十字に目を引かれる。

その根元に影があつた。

「……アカリ？」

そこはとりわけ氷の浸食が激しいようだった。肌寒く、吐く息が白く煙る。そんな中、アカリはじつと立ち尽くし、氷の中の一点を注視していた。

視線の先には、キララの姿がある。

ユラノは目を瞠った。リンヤが言っていた、動けなくしたという言葉の意味を知る。

完全に静止していた。何本かの氷の柱に身体を貫かれ、宙に浮いたような状態で凍り付いている。右手は何かを掴むようにこちら側に突き出され、髪は乱れて燃え立つようだった。

瞳に灯っていた吸血鬼の証——禍々しい赤い光は、今は消えている。しかし表情はけして安らかではなかった。むしろ逆、深い怒り、憎しみ、哀しみ——目は視線で射殺さんばかりに、口は絶叫するように、限界まで開け放たれていた。

改めて見る豹変したキララの表情に、戦慄を覚える。

「何しにきたんだ」

ふいの言葉は静かな呟き。

「お前、ばかじゃないのか。そんな目にあつて、まだ来るなんて」

ユラノを見ない。独り言のように、静かで——霧に溶け込みそうな口調だった。

口調だけではない。アカリの姿そのものが今はとても頼りなくて、霧とひとつになって消えてしまいうに见えた。頬はこけ、目には色濃い隈があり、手足は今にも倒れてしまいうに頼りない。

あれからずっと、ここにいたのだろうか。キララのそばで何も食わずに。

そのことについて問い質そうとすると、アカリが先に口を開いた。「あたしの、せいだったんだよな」

「……え？」

「キララがこうなったのはあたしのせい。あたしが血の恋人だったから、キララは吸血鬼に狙われたんだ。あたしがいなければ、キララはこんな目に遭わずに済んだ……それなのに」

アカリは、笑った。息を吐き出しただけのような乾ききった笑み。「プリスのやつが言ったとおりだった。あたしが血の恋人だから、キララは病気になった」

「そうと決まったわけじゃ……」

「そうとしか思えないだろ……。キララが病気になったのはあの事件の直後だった。しかも、あたしだけキララに触っても平気だった。おかしいだろ普通。そんなこと、ありえないだろ。……あいつの言った通りだったんだ。あたしは穢れてるんだ。だから周りを不幸にする」

光の欠けた瞳が曖昧に揺れる。

「あたしなんか——いないほうが……」

アカリははつとして、下を向いた。ユラノはアカリの手を、しっかりと掴んでいた。

「だめだよ」

じつとアカリの目を見つめて、ユラノは言う。

「いなくなるなんて、だめだ」

「じゃあどうしろって言うんだよ」

声は震え、掴んだ手は力ない。

「あたしはこんなに周りに迷惑かけて。どうやって生きていけばいいんだよ」

「アカリのせいじゃない」

「何言ってるんだよ。人が死んでるんだぞ。キララの病気が伝染ったせいで何人も死んでるんだ。あたしのせいってことじゃなか。あたしのせいじゃないなんて、言えない。それで誰が許してくれるんだよ」

「きつとみんな、分かってくれる。隊長だって謝ろうとしてたじゃ

ないか」

「今までだけじゃない。これからだって同じようなことはきつと起こる。……あたしは、もう、いなくなったほうがいいんだ」

アカリはユラノから視線を外し、床に深く突き刺さる赤い十字架を撫ぜた。

「本当は、プリスがこれを撃ったとき——あたしは、キララの代わりにこれを受けるつもりだった。そうして、あたしは……」

ぽつりと、一言。

「もう死のうって、思ったんだ」

鼓動が止まりそうなほどの衝撃を受けた。

——嫌だ。

心の底からそう思う。アカリが死ぬのは嫌だ。もう会えなくなるなんて嫌だ。死ぬなんて絶対に駄目だ。生きていてほしい。

伝えたい。アカリにここに居てほしいと、伝えなかった。だけど、言葉ではきつと伝わらない。今までずっとそうだった。アカリに自分の言葉は届かない。

どうすればいい。

アカリのことを大切に思っている。そのことを伝えるには。理解してもらうには。分かってもらうには、何をすればいいのだろう。色々な想いが湧き起こる。一緒にいたい。触れたい。元気になってほしい。笑っていてほしい。離れていつてほしくない。気持ちを通い合わせたい。結びついていたい。絆がほしい……、

……絆。

そうか。絆だ。

その言葉が浮かんだ瞬間、ユラノは腰からそれを引き抜いていた。「アカリ」

アカリは振り向き——驚いて動きを止めた。かすれた声で言う。

「お前……なに、するつもりなんだ」

「傷つける」

何を。そう問おうとしたアカリの言葉は声にならない。その前に、

ユラノが動いたからだ。

「ずっと、隊長とミオのことを見てきた」

手にしたもの——血約の儀式短剣を、ゆっくりと上げ、自分の腕にあてがう。

「二人の血約騎士としての在り様に、憧れてたんだ」

そして、引く。

「傷つけて、傷つけられることが、騎士たちの——隊長とミオの絆の証だった。だから」

一筋の赤い線が生まれ、血が珠になって滲み出す。すぐに零れて腕を包む包帯を赤く染め上げながら、幾滴かは地面に落ちた。

アカリはその様子を、呆然と見ている。

蒼白な表情で、じっと、見つめている。

「だから……僕にとっても、傷は最高の、絆の表現なんだ」

痛みに顔をしかめながら、それでもユラノははっきりと言った。

「……お前」

「アカリ」

名を呼ばれたアカリは、か弱い小動物か叱られた子どものように身体を縮こまらせる。

「前にきみは言ったよね。僕はただ同情してるだけだって。でも、違う。同情なんかじゃない。僕は心の底から、きみにここにいてほしいと思ってる」

アカリは震え、ただ黙ってユラノの言葉を聞いている。

「死ぬって言われてようやくわかった。ぼくは、きみのことが——」

次の言葉を言おうとすると、胸がとつぜん、ものすごい勢いで鼓動を始めた。息苦しくて言葉がつかえる。

それを無理矢理ねじ伏せて、言う。

「——好きなんだ」

アカリの目がいつぱいに見開かれる。

「だから」

伝えたいことがある。

嫌がられるかもしれない。拒絶されるかもしれない。気持ちなど届かなくて、今まで重ねた言葉も自分自身を傷つけたことも、何もかも無意味になってしまうのかもしれない。それはとても怖いこと。それでも。

これしかないと思うから、これが一番気持ちを伝えられる方法だと信じるから。

きっと後悔しない。そんな最高の決心を持って、告白する。

「——僕と、血約しよう」

きれいな赤い色の彼女の瞳。いつも曖昧に濡れて、揺らいでいた  
はかない瞳。

この泣きそうな瞳を止めてあげられたらいいなと思う。

彼女が心から笑っている顔をこの目で見たいと思う。

もう二度と、死ぬなんて言わせたくない。

だから、届け。そう強く願った。

——長い沈黙があった。

「……ばかじゃ、ないのか」

アカリは俯いて、搾り出すように言った。

「お前のその怪我だって……あたしのせいなのに……」

小さく震える、弱々しい声。

「アカリのせいじゃない」

「あたしの何が、そんなにいいんだ。こんなにひねくれた、嫌な奴なのに」

「そうは思わない」

「みんなに無視されてる、血の恋人なんだ」

「僕は無視したりしないよ」

「ずっと無視されてきたから、普通の暮らしなんてわからない」

「これから少しずつ一緒に覚えていけばいい」

「ちょっと怪我しただけで、血がたくさん出て大変なんだ」

「大丈夫だよ。チウ爺だっているし」

「そのせいで、お前はプリスみたいに魔法を使えないかもしれない」  
「魔法なんか使えなくなっただけいい。血約したいっていうのは、きみへの気持ちの証明だから。魔法が使いたいからじゃない。きみと一緒にいたいから、血約するんだ」

「……お前……」

声が詰まり、途切れる。そしてまた長い沈黙があって——アカリが、顔をあげた。

「本当に、……ばかなやつ」

地面に雫が落ちて、跳ねる。ユラノはそれを見て微笑んだ。

「やつぱり、あれはうそだったね」

「……なにが」

「『血の恋人は、涙のかわりに血を流す』」

アカリは今気がついたかのように、乱暴に目元を拭った。もうそれくらいでは隠しきれないほど涙は彼女の顔を濡らし尽くしている。目は真っ赤で、桃色に染まった頬はぐちゃぐちゃだった。

「ばかやろ……。あたしがうそ、言うわけ、ないだ……。ろ」

「じゃあ……これ」

ユラノは儀式短剣をしまって、代わりにもう片方の血約具を取り出した。

「最初の一回だけ。ほんの少しだけ、血を流せばいい。……キララの薬、まだ、あるんだよね？」

差し出された血約指輪を、アカリは涙まみれの目で見ている。

「涙のかわりに、血を流して、くれるんだよ……ね？」

あまりに動かないアカリの様子に、不安になる。けれど。

アカリはそつと、手を伸ばしてくれた。

今まで感じたことがないような、温かい気持ちが胸に広がる。指輪に——自分の手に近づくアカリの手を、早く受け取って欲しいような、ずっとそのままでいて欲しいような気持ちで見つめる。

やがて、彼女の指が、触れそうになって――。

「――お姉ちゃん」

二人、弾かれたように振り向いた。

氷のゆりかごから赤い光の粒が散っている。粒子が降り落ちることに少しずつ、氷のかさが減っている。溶けている――否。

分解されているのだ。

ちりちりと氷の戒めはほどかれてゆき、やがて――キララがその中から、顔を出した。

一層区に続く道の上をリンヤとカイが歩いている。

「ねえリンヤ、お願いだから考え直してよ」

「しつこいよ……。わたしは何て言われたって絶対いく。カイは早く戻りなよ」

「リンヤが戻るって言うまで、ぼくも戻らない」

リンヤは諦めたような、胡乱な目つきでカイを見た。

「……もう知らない。勝手にしたら」

何度同じようなやりとりをしたことか。

リンヤにはカイの制止を聞く気はない。今にもユラノが危険な目に遭うかもしれないのに、立ち止まって押し問答をしている余裕などないのだ。

カイはカイであり強く出られない性格なので、結果的にリンヤの後をついていくような形になっている。もう一層区も近い。

「待つてよ、リンヤ」

カイはついに堪りかねたのか、リンヤの腕を掴んだ。

「放してよっ」

乱暴に振り払う。

「早く行かないと、ユラノが！」

「ぼくだってリンヤのことが心配なんだ！」

突然の大声に驚く。カイがこんなに大きな声を出したのを初めて聞いた。

「プリス隊長やミオみたいに大怪我したら、どうしようって……本当はスレイヴをやっつけに行くのだって止めたいくらいなのに……王だなんて。騎士でもないのに、危なすぎるよ」

気弱そうな印象そのままに、薄く涙を浮かべて、カイは懇願する。  
「行かないでよ、リンヤ。ぼくは」

口ごもったのは、一瞬。

「……きみのことが、好きなんだ」

リンヤは立ち止まり、カイの姿をじっと見ている。しかし体は前を向いたままだ。

「カイの言いたいことは、よく、わかった」

「じゃあ！」カイの表情が明るくなり、

「でもね」すぐに、固まる。

「わたし、ずっと前から知ってた。カイの気持ち。……ごめん」

そう言つと、リンヤは踵を返して再び歩き始めた。

## 第十三話

分解された氷は魔力の残滓となり、薄赤く煌きながら散り落ちる。キララの瞳には再びあの赤く禍々しい輝きが戻っている。今のところ上半身までが自由になっているが、さらに氷の分解は続いている。いずれ下半身も解放されるだろうと思われた。

「やっぱり……生きてたんだな」

「うん。わたしはこれくらいじゃ、死なないよ」

まるで吸い寄せられるようにキララに近づくアカリを、ユラノは制した。

キララはその様子を、無表情に眺めている。

「あたしは、キララに言わなきゃならないことがある」

「何を……？」

「お前はキララじゃない、……って、言ったことだ」

アカリはユラノの制止をほどこいて一歩前に出る。キララはあくまで無表情だ。

「お前は、やっぱりキララだ。ただ、吸血鬼のせいで、ちょっとおかしくなっちゃっただけなんだよな。だから、ごめん。キララじゃないなんて言って、ごめん……」

「いいよ」

アカリの表情が安堵に晴れる。しかし。

「別に、いいよ。だってお姉ちゃん」キララの顔に、表情は無い。

「……ユラノさんと血約して、血約者<sup>ブリーデ</sup>に、なるんでしょう？」

暗闇と冷気が突然噴出したかのようだった。ひたすらに平板で無感情なキララの声は、怒りと恨みを圧縮したもの。底無し沼のように淀んだ視線がアカリの安堵を消し飛ばす。

「騎士は敵……ブリーデも、敵……」

喋るうちに、少しずつキララの様子が変わってゆく。

「でも、お姉ちゃんは……わたしの……うう」

苦しそうに呻く。手で顔を覆い、激しく掻き毟った。皮膚が破れて血が滲み出す。頬が見る見る内に赤く濡れ、一粒、顎から血が滴り落ちた。

唐突に動きを止める。血塗れになった自分の両手を見つめ、夢うつつに呟く。

「……お姉ちゃんは。わたしを……裏切っ、た」

「違う！」

「うう、う、うるさい！」

悲鳴のようなアカリの声はキララの絶叫に掻き消される。そしてユラノを睨み付けた。

「お前が……全部悪い！ お前がわたしから、お姉ちゃんを奪ったんだ！」

「違う、あたしはキララから離れてなんてない！」

「うそだ……！ だったらなんで、血約なんてするの！？」

キララは身を乗り出し叫び続ける。下半身を覆う氷にも分解が及び始めた。危険を感じ、ユラノは半ば無意識にアカリの手を取る。キララがそれを捉える。

異常に静かに、言った。

「……逃げるの？」

「何言つてんだ……、あたしは、逃げたりしない！」

「だったらその手はなに……？ 逃げないでよ。お姉ちゃん……逃げないでよ……！ 置いていかないでよ！」

キララは激しく暴れ、そのたびに氷から赤い煌きが散ってゆく。だが、まだキララはその場から動くことができない。

「そいつとなんて、行かないで——」瞳が、急激に、輝いた。「ここに、いてよおっ！」

ユラノたちの周りの床が剥がれて浮き上がり、集まって一本の杭になった。鋭い切っ先がユラノに向かって放たれる。アカリの身体がぶつかって来て一緒になって転がった。杭は二人のすぐそばに突き刺さり、飛び散った破片が頬を打つ。

「うつ……」

アカリの呻き声。ユラノは慌てて身を起こす。

赤い――血。

夥しい血がアカリの腕を濡らしている。床に突き刺さった杭が、アカリの腕を挟んでいた。

「アカリ！」

「だい……じょうぶだ。心配、すんな」

腕を押えながら身を起こす。その様子には苦痛が隠しようもなく、滲んでいた。

「……なんてことを」

見上げる。キララは静かにそこにいた。

激情はどこかに消えてしまっていた。それだけではない。悲痛な表情も、他の何も、もはやその顔には浮かんでいなかった。

無表情。

ただひたすらに静かでうつろだった。まるで何か突き抜けたよう  
な――

「……お姉ちゃん……」 呟く。「……痛い？」

「当たり前、前だろ」

「そうだよ。うん。わたしわかった。わかつちゃった」

そう言つて、キララは笑った。

「痛い思いさせればいいんだ」

「何……？」

「どうせ治せるんだもの。お姉ちゃんのこと、たくさん傷つけても大丈夫。わたしのところにずっといるって約束するまで、何度でも痛い思いさせればいいんだ……」

無邪気な笑顔だった。ただ目だけはどこまでもうつろだった。それは絶対の真理に気付いた子どものような、とても純真で残酷な笑顔。

「ねえ、お姉ちゃん」

そつと手を差し伸べ、キララは願いをかける。

「わたしのところに、ずっと、居てくれるよね？」

ぞっとする。「――逃げようアカリ！」

ユラノはアカリの手を掴むと出口めざして全力で駆け出した。折れた腕が激痛を訴え背後からはアカリの苦しげな声まで聞こえてくるが、それでも走る。例えようもない恐怖がユラノの背中を押した。「逃がさない」

再び床が剥がれて杭となり、ユラノに向かって撃ち出される。何本も杭が放たれ体を傷つけられながらも、ぎりぎりのところでユラノはアカリと逃げ続けた。

何度目か、避けた後。

「あは……。もう逃げ場がないね」

いつのまにか、二人は崖を背にしていた。絶望的に黒い淵がまるで二人を待ち受けるかのように口を開けている。

「まずはきみから、串刺しにしてあげる……」

ユラノは崖を覗き込んだ。そして素早く、アカリにだけ聞こえるように言う。

「――飛び降りよう」

「何だって？」

「下の階に降りるんだ。僕は一度落ちてるし、たぶん、死にはしない」

アカリも崖を覗き込み、息を呑んだ。

決意は一瞬。

「……わかった。お前を信じる」

アカリの手を強く握った。それ以上の力が繋いだ手を通して返ってくる。

頷き合う。

そして二人は跳んだ。

リンヤは廃教会に入った途端、杭の一撃がユラノとアカリを突き落とす場面を目にした。

「……うそ？」

力が抜けて弓矢を取り落としそうになる。それを危ういところで止めたのは、キララの姿。罅割れた氷から上半身を出して真っ赤な髪を振り乱し、今ユラノたちが落ちて言った崖の縁を血塗れの形相で睨みつけている——それは……

——敵、だ。

そう認識した瞬間自動的に体が動いた。弓持つ左腕を跳ね上げると同時に矢筒から一本の矢を引き抜き、つがえて弦を引き絞る。何千と繰り返した必殺の動作、その両腕に込めるのは全力と、敵への殺意。だが——

（これじゃ、当たらない……）

このまま撃つても、絶対に、当たらない。

リンヤの天性が、そのことを理解させた。このまま撃つても無駄だ。いまの自分では絶対に当たらない。なぜなら。

首筋——どうしようもない虚無感が意識を侵す。ずっとあつたものの、そこにあるのが当然だったものが、今はない。その小さな、しかし重大な差異が、リンヤの射撃感覚を完全に狂わせた。天性だからこそ、それは微細なずれで崩れ去る。

（ユラノのマフラーがないと……わたし、弓が撃てないんだ……！）

キララはゆつくりと氷を分解し、戒めから抜け出そうとしている。赤い光の粒子が散る。少しずつ、それは勢いを増しているように見える。きつとあれが消えたとき、キララは完全に解放されるのだ。

リンヤには一瞥もくれず、ただじつと二人が落ちた崖を睨んでいる。

——追うつもりなんだ。

絶望。体が感覚を失くした気がした。崖から突き落としたただけは飽き足りないのだ、殺して死体を確認するのか、あるいは吸血鬼ゆえに血を吸うのか、そうするまで満足しないのだ。なのに今の自分では何もできない。ただ敵がゆつくりと戒めを解いていくの指をくわえて見ていることしかできない。

このまま何もしなかったら、ユラノはきっと死んでしまう！  
何か。何か今できることはないか。弓以外に自分にできること。  
敵を止めることができるだけの、力。

ざり——、と、背後から瓦礫を踏む音が聞こえた。振り返る。

あ……。

あった。私に今、できること。

リンヤは弓を放り捨てた。もう、これは要らない。

彼に近付く。ずっと彼女の後をついてきていた、カイに。

落下、不快な浮遊感、衝撃。激痛。

「だい、じょうぶ？ アカリ」

半ば無意識に繋いだ手に力を込めると、ぐっと力が返ってきた。  
次に声が聞こえ、安堵する。

「あたしは大丈夫…… お前のほうこそ、どうなんだ？」

言われて初めて自分の体に意識を向ける。折れた左腕が酷く痛んだが、我慢できないほどではない。他の箇所も特に大きな傷を負ったりはしていないようだった。自ら覚悟を決めて跳んだのが良かったのかもしれない。

「僕は大丈夫だけど…… アカリの腕が」

アカリの腕は真っ赤に染まっていた。キララに挟まれた傷から、血が止まらず流れている。

「ああ……」

アカリは曖昧に返事をする、懐から布を取り出して傷口に当てる。キララの薬だ。

そして天井を見上げ、じっと動かなくなる。遠く、向こう側を見通すような視線。

ユラノもつられてそちらを見る。

天井は崩れかけ、一部からは木の根や蔓のようなものがぶらさがっている。今その向こうにいるのは——。

「……キララは、元に戻ると思うか？」

ユラノは、すぐに答えられなかった。

「この薬を作ってくれたのは、キララだった。今思うと、吸血鬼の力を使って作ってたんだよね……。あたしのことを、守ってくれた。なのに、今は」

ぐつと、苦しそうに目を細める。

「あたしを……痛めつけて、言うこと聞かせようとするなんて……」  
傷口を押える手に力が込められる。痛みをこらえるようにじつと上を見る。

「何とかして、元に戻してやりたい。どうしていいかは分からないけれど、少なくとも今のままじゃ駄目だってことだけは、分かる」

そして、ユラノを見た。

「血約つてやつをすれば——お前は、魔法を使えるようになるんだよな？」

ユラノは目を瞠った。アカリは、魔法を使えと言う。それはつまり――

「だめだよ。魔法を使うには、血を流さないといけないんだ。血が止まらないきみじゃ……」

「分かってる。覚悟は、できてる」

アカリは真っ赤に染まった腕を上げ、握った拳を、真っ直ぐユラノに向けて突きつけた。

「キララが力でこつちを捻じ伏せようっていうなら、こつちにもそれ以上の、力が必要。でないとまともに話すことだってできない。

……違うか？」

「それは、そうかもしれない、けれど……」

「お前になら、切られたっていい」

「え……？」

アカリは目を逸らさずに、はつきりと言う。その頬が、少しだけ染まっていた。

「……正直言うと、お前が血約しようって言ったとき、嬉しかった

んだ。お前が本気だつてことがよく分かったから。だから、お前に  
だったら、切られてもいい。それに、あたしはキララを救いたい。  
この体が役に立つって言うなら喜んで捧げてやる」

アカリの瞳がはつきり見える。いつも曖昧に揺らいでいた彼女の  
目は、今は全く揺らいでいなかった。

「勘違いするな。もう死にたいなんて言わねえよ。どうせあたしが  
死ぬほど切ったりはしないんだろ？」

「う、うん。もちろんだよ」

「だったら、あたしを切ってくれ。血約つてのをして、魔法で――  
キララを何とかしてくれよ……。それとも、お前には、あたしを切  
る覚悟は無いって言うのか？」

揺ぎ無い意志を視線に込めて、アカリは問う。いや、これはきつ  
と、問いではない。

確認だ。

覚悟はあるか？――答えは当然、是だ。血約を申し込んだ時点  
でもう覚悟は決まっている。アカリを傷つけ、彼女と痛みを分かち  
合う。それが血約するということだ。

アカリはキララのことと痛みを負ってしまった。今それを贖える  
のはユラノだけだ。ユラノがつける身体への傷だけが、アカリの心  
を癒し得る。

……本当にできるかどうかは、でも、分からない。ただの可能性  
でしかないかもしれない。アカリの体も保たないかもしれない。寝  
台に横たわるミオのように……けれど――

それが、アカリのためなら。

魔法を使うことによってしか、アカリの力にはなれないなら……。  
「分かった」

アカリに負けない強い意志を持って、彼女の視線を受け止める。

「僕はきみを守るために、きみの身体を傷つける」

ユラノは手を伸ばし、突き出されたアカリの拳をそっと包み込ん  
だ。

「血約しよう」

「お願い——血約して、カイ」

言われたカイは目を丸くして驚いている。それはそうだろう、こんな状況で突然血約を申し込まれるなんて、予想もしていなかったに違いない。けれどこんな状況だからこそ、血約しなければいけないのだ。吸血鬼がユラノを殺そうとしている今、それに対抗するだけの力が必要なのだ。そんな力があるとすれば、魔法以外にありえない。

魔法を使うには騎士及び<sup>フリーデ</sup>血約者になる人間と、一組の血約具——儀式短剣と血約指輪が要る。

全部ここにある。

あとは儀式を行うだけなのだ。

「で……でも」

「いいから。早く血約しようよ」

カイは後ずさる。リンヤの様子に気圧されているようだった。だがリンヤには分かっている。カイは、拒否しない。

知っているのだ。カイの自分に対する気持ちも、騎士への憧れも、何もかも。分かっている。わたくし、嫌な子だな……と思う気持ちが一瞬だけ頭の片隅に浮かんで、ユラノを想う気持ちに押し流されて消えた。

「これ、儀式短剣。持って」

押し付けるように渡す。

「血約誓詞、覚えてるよね？」

強引に進めてしまえばいいのだ。

「うん……。でも、本当に、いいの……？」

カイの心配そうな表情が目に入る。自分のことよりも、リンヤのことを想っている顔だった。

胸が痛んだ。カイも全部、分かっているのだ。

でも——今更、止められない。

「いい。早く、しよう。間に合わない」

「……うん」

敵は氷を分解するのと崖を凝視することに集中していて、こちらには全く注意を向けていない。今ならこの場で儀式をしても気付かれることはなさそうだった。——いや、気付かれたって構わない。敵がユラノのところへ行くまでの時間さえ稼げれば、それでいい。

リンヤは指輪を、カイは短剣を持った。

そして彼らは儀式を始める。

## 第十四話

「……血約って、実際にはどうすればいいんだ？」

「指輪をはめて、血約するための誓いの言葉——血約誓詞を唱えるんだ。僕が言った通りに言ってくれればいい」

「わかった、と頷く。」

「それじゃ、指輪をはめるから……手を、出して」

アカリは素直に手を差し出してくる。ユラノは静かにその手を取った。

触れるのは初めてではないはずなのに、その柔らかさに驚く。胸が高鳴った。

緊張に震える手で、ゆつくりとアカリの薬指に指輪を通す。それはアカリのために作られたものではなかったはずなのに、不思議とぴったり彼女の指に合った。

「それじゃ始めよう——『僕らはここに、血約する』」

儀式短剣の刃をアカリの指輪にあてがい、儀式の開始を宣言する。儀式短剣と血約指輪が仄かな赤い光に包まれた。温かくもどろりとした、まわりつくような血色の光。

「騎士は傷を、ブリーデは血を」

アカリに続けるよう、視線で促す。

「えっと……『騎士は傷を、ブリーデは血を』」

「互いに捧げ、これを証す」

「『互いに捧げ、……これを、証す』」

血色の光は脈動するように明滅し、次第に色濃く広がってゆく。同時に意識の底から未知の感覚が浮かび上がってくる。

見ればアカリも戸惑ったような表情を浮かべていた。わずかに頬が上気している。きつと同じものを感じているのだ。それは熱く、締め付けられるような気持ち。指輪と合わせた短剣から、とても大切なものが流れこんでくるようだった。

繋がりがゆく、赤い糸のイメージ。心の中核に辿り着いてしっかりと結びつく——そんな実感が、次第に明確な形を取ってゆく。

かつてない昂ぶりの中、二人は血約誓詞を紡ぐ。

『——つらいときも、哀しいときも——』

『——泣いているときも、不幸せなときも』

リンヤは指輪を指にはめ、カイは短剣をそれに合わせて、血約誓詞を紡ぐ。血約具から漏れる光をキララから隠すように、二人で身を寄せ合う。

『赤い糸で結ばれているときも、そうでないときも——』

キララはまだ、気付いていない。氷の分解は進み、もうほとんどキララの身体は解放されていた。血約が完了するのとどちらが早いか分からない。

『痛みを分かち、手を取り合い苦難を乗り越え』

儀式が進むに従い、リンヤとカイの心の中にもかつてない感覚が浮かび上がっている。

『互いを守り、慈しみ——』

その温かくて力強い昂ぶりにあてられて、リンヤは静かに涙を流した。

『——絆を守り、育むことを』

光が溢れる。まるでこの世界に自分とアカリ、たった二人しかないように錯覚する。

意識の底から、二人を結ぶ血約名が浮かび上がる——。

「僕、騎士——ユラノ・セイエ『フオイエ』と」

「その血約者——アカリ・セイエ『ティンカーレッド』は」

二人はどちらからともなく、互いの手を絡める。

『共に、誓う』

「絆を守り育むことを、ぼく、騎士……カイ・ブレイア『ゼファア』

ドと」

「わたし、血約者リンヤ・ブレイア<sup>フリーデ</sup>シルフィーデは共に誓う」  
もつすぐ血約できるといふとき、キララがリンヤたちを振り向いた。

ついに、気付かれた。

「……騎士。お前たちも！」

焦りが生まれる。あと少しなのに――

「騎士は……敵、だ」

キララの両目が輝き、散らばった瓦礫が巻き上がって杭となる。どうしよう、一度儀式を中断して杭を避けようか、それとも――。リンヤは逡巡する。しかし、行動に移る前にキララの様子が変わった。

突然視線を翻し、じつ――と床の一点を睨みつける。体がわなわないているようにも見えた。

どうしたというのだろう。いや、これは好機。早く血約を――

「……血約なんて」

キララがそう囁くと、杭が元の瓦礫に戻ってばらばらと落ちた。

そして床に手を突き、叫ぶ。

「許さないから……ッ――！」

キララの手から赤光が溢れ、床が分解される。

轟音が響いて顔を上げると、天井が溶けるように消え、巨大な穴が広がってゆくのが見えた。

そこから垣間見える先には、

「……血約なんか、させない！」

狂乱して叫ぶキララの姿が。

「……どうする！」

切迫した声でアカリが言う。血約はまだ終わっていない。キララは身を乗り出し、今しがた開けた穴から降りて来ようとしている。ふいに――その身体が、横に吹き飛んだ。キララの姿が視界から

消える。一瞬、赤黒い影が穴を過るのが見えた。

「なんだ……!？」

「分からない、けど……今のうちに!」

ユラノは繋いだ手に力を込め、誓句を紡ぐ。

『僕らの血と、傷にかけて——』

そして儀式短剣で傷をつける。まず自分の腕に。

そして、アカリの腕に。

急がねばならない。それなのに、凄まじい緊張に手が震えた。彼女の腕を取り刃をあてがう。一瞬だけ動作を止めて、目を合わせる。アカリの瞳は一切、揺るぎない。

刃を引いた。想いを込めて、できるだけ痛くないように——。

白い肌の上に一筋の線が引かれた。血が珠となって浮き出し、繋がりが、筋となって流れ出す。まるで自分の体を切るような——いや、それ以上の痛みがユラノの心に刻まれる。

そしてユラノとアカリは、互いの腕をそつと近づけた。

傷と傷とがひとつに触れ合う。血と血が触れて混ざり合う。

——誓いの傷は、交わされた。

今こそ血約が成されるとき。二人は最後の言葉を静かに告げる。

『——愛が二人を、別つまで』

繋がった。

赤い光、煌く粒子の乱舞——。

儀式短剣にアカリの血が通い、ユラノとの間に魔力の路が結ばれる。

その形は赤い光の糸。指輪と短剣、血と血を繋ぐ、二人の絆の証そのものだ。

赤い糸は二人の周囲を幾重にも巡る。まるで祝福するようにゆらゆらと揺れながら、煌く魔力の残滓を降らせている。

例えようもない力と昂ぶりが総身を満たす。

傷の痛みを超えて、繋がる安らぎが心を支配する。

全ては交わした血の約束の下に。

二人は今——騎士と血約者<sup>ブリーデ</sup>になったのだ。

溶けるように天井が抉れ、崩落する。その向こうから姿を現したのはまるで泣きそうに顔を歪めたキララの顔。

「——血約したなっ……！」

その両手が赤く輝き、周囲の土と建材が剥がれて渦を巻く。

「裏切り者おっ……！」

渦が集束——巨大な杭になる。そして、それは落ちる。

「許さないからっ！」

空を裂く轟音を響かせ、絶大な破壊力の塊が落ちてくる。

ユラノの意識の底から、一つの呪文が浮かび上がる。

『……舞え』

短剣を突き出し、そこに通い満ちるアカリの血——血の恋人の凄まじいばかりの魔力と、彼女との絆をいっばいに感じながら、声の限りに叫ぶ。

『万象を清め灼き払う、浄却の閃火——』

短剣の周囲を焰が巻く。紫から赤へと至る七色の虹焰、それは急速に展がり渦を成してユラノたちを取り囲む。

『——虹焰閃舞——！』

虹の閃光が刹那、全てを塗り潰す。烈しい光の奔流、再び視界が元に戻ったとき、ユラノたちの目に最初に飛び込んだのは広がる大空だった——魔法によって、上天にまで至る巨大な空洞が穿たれたのだ。

陽光の中を、かすかに残った虹のかけらが舞う。

駆け寄るリンヤの目の前を下から溢れた虹が通過した。思わず声をあげて後ろにへたり込む。凄まじい光と熱量、轟音——視覚を奪う虹の乱舞。

魔法だ。……きつと、ユラノたちの。

安心と絶望に、心が激しく揺れた。ユラノは生きている。そして、アカリと血約したのだ。

リンヤは自分とカイを結ぶ赤い光の糸を思った。ユラノとアカリの間にも、これがある。

「うっ……っ」

横から呻き声。リンヤははっとしてそちらを見た。キララが呆然と上空を――虹が去った方向を見ていた。キララはとっぜん歯噛みすると、虹が穿った穴をぎち、と睨みつける。体に刺さったままの赤黒い棒のようなものを乱暴に抜き投げ捨てると、大きく腕を振りかぶった。

その手を、怒りを込めた様子で叩き付ける。

分解。溶けるように床が消滅し、支えを失って崩落する。キララも諸共に落下していった。直接ユラノたちを手にかけるつもりなのだ。さっきの凄まじい魔法があれば、ユラノは平気かも知れない――瞬そう思うが、だからと言って何もしいではないられない。

「カイ、早く……！」

走り寄ってくるカイの遅さに焦れる。床に空いた大穴を覗き込むと、キララはユラノたちのすぐそば――いや、アカリの真上に、覆いかぶさるように落下していた。

「早く魔法を！」

「う、うん……」

息の上がつたカイを急ぎ立てる。騎士はカイだから、彼が来ないと魔法を撃てない。それがもどかしい。まだ繋血は解けていない――すぐに魔法を撃てる。

「でも、ここからじゃ、アカリさんも巻き添えになっちゃうよ」

「なに弱気になってるの」

リンヤはそつと、構えるカイに手を添える。

「わたしたちは、騎士になった」

今カイの左手には、赤血色をした巨大な棒のような物が握られている。拳を中心として、ゆるく湾曲した棒が両側に伸びた形状――

その先端同士は、一本の細い線で結ばれている。

それは差渡し二・五メルを超える、長大な弓。カイの顕した魔法の形だった。

「——だったら。狙ったもの以外に当たるなんて、ありえない」

リンヤは血の弓を握るカイの左手に、自分の手をそつと重ねる。

右手も同様に儀式短剣を握る手に触れる。背後から抱擁するように

「私も一緒に、狙ってあげるから」

「……うん」

カイは右手を上げた。弓引くイメージ。それは具現化し、短剣の剣身から魔法の矢が顕れる。

『ぼくらの意に沿い、仇を射抜け——』

重なる二人の手から、血色の矢が放たれる。

瓦礫と共に落ちてくるキララを、ユラノはじつと見た。その表情は怒りよりも悲痛に染まっている。彼女はユラノを目掛け――

「キララ……！」

アカリが間に入ってきた。着地、一緒になって床に倒れこむ。ユラノは反射的に短剣を構えるが、アカリに鋭い声で制される。

「やめろっ、……キララもだ。もうこんなこと、やめるんだ」

キララの下で組み伏せられるような体勢にありながらも、アカリの声に恐れや弱さは微塵もない。逆に、キララが自分から離れて行かないようしつかりと腕を掴んでいる。

「それはこっちの台詞だよ！ お姉ちゃんは血約した。騎士の味方になった。わたしを裏切ったんだ！」

「何言ってるんだ！ 騎士とか吸血鬼なんて関係ない、あたしはキララと一緒にいたいし、他の奴だってそう思ってる。あとはキララ自身があたしたちと一緒に居ようとするかどうかって問題だろう！」

アカリはキララの顔を引き寄せて、殆ど目と目が触れそうな距離で訴える。だが、キララは激しく首を横に振る。

「うそだ……っ」

「嘘じゃない」

「うそだ。どうせわたしを殺しに、騎士がやってくる。そうだったときお姉ちゃんはおたしを庇ってくれるの!？」

「決まってるだろ」

アカリの答えに、迷いはない。

「庇うに、決まってるだろ……」

「おね……ちゃん」

キララは一瞬、言葉を失った。瞳の輝きがわずかに弱まったようにも見えた。そのとき。

赤黒い塊——魔法の矢が凄まじい速度で飛来し、キララたちのすぐそばまで到達すると進路を直角に曲げてキララの胸を——キララだけを貫いた。

「ぐっ、」

大人の腕ほどもある太い矢が、キララの胸から生える。苦しげな呻きと濡れた音。キララはそれをゆっくりと見下ろし、囁く。

「や、っぱり……」

瞳が激烈に輝き、沸騰、爆発する。

「騎士なんかっ、信用できない!!」

「うあっ……?」

血霧——、気の抜けたような、アカリの声。

「っぐっ、あ……、あああっ……!」

絶叫が弾ける。アカリの腕が消えている。断面が真っ赤になって、血が、おそろしい量の血が、そこから溢れ出している。

「——!!」

ユラノは声にならない声で叫び、短剣をキララに向けた。我を忘れ、呪文を唱えかける。

すると何事もなかったように、アカリの腕が元に戻った。流れ出た血さえもが消えている。

「……あ……?」

呆けたような、アカリの声。 たった今消失し、元に戻った自分の腕を、夢から覚めたような目付きで眺めている。

「痛かった……？」

キララはアカリの腕を掴んだまま、静かにそう言った。

「へへっ……」

笑う。

「何度も壊して、たくさん治せば。お姉ちゃん、痛すぎて、言うのと聞いてくれるよね……？」

笑っている。いや、目は全く笑っていなかった。うつろ。疲れてしまったような、生気の欠片も見えない壊れた笑顔。

その表情と、今しがたキララがアカリにしたことが、ユラノにはつきりと理解させた。キララは本気だ。本当に何度でもアカリの体を分解して、痛みを味合わせた後何事も無かったように元に戻す。残るのは激痛の経験のみ。アカリがキララについていくと言うまで、それは続く。

どすん——と、リンヤたちの二射目がキララの体を貫く。

「うつ……邪魔、だな」

キララは一度自分を分解して、すぐそば——ただしアカリの上からは離れた場所に現れる。ユラノは夢中でアカリの手を取り、キララから距離を取った。

腕の中のアカリが、震えている。彼女は何度も自分の腕を見る——そこにあることを確かめるように。そして気丈にも、キララの姿を見る。

彼女の鼓動を感じる。おそろしく速く、不規則で——しかし、弱々しかった。はっきりと感じられるのに、とても弱くて今にも止まってしまうような鼓動。

怖がっている。

「やっぱり、騎士からやらないとダメかなあ」  
おそれている。

アカリは、キララを……おそれているのだ。

「……やめろ」

繫血ゆえにユラノの意志をはつきり感じ取ったアカリが、服の袖を掴む。

「やめてくれ……」

何度でも繰り返す。アカリはさっきのような痛みを、何度も味わうことになる。彼女はきつと諦めない。最後までキララについていくとは言わないだろう——本当に、壊れてしまうまで。

そんなことを見過ごすことはできない。……絶対に。

「へへっ」

キララはユラノの姿を見て、また笑い声をあげた。

ユラノは呪文を紡ぎ出す。それはユラノとアカリ二人だけの魔法

——それなのに……

「へ、へっ……やっぱり最後は、そうなるよね」

……昂ぶりは、無くて。

また一本、キララを赤黒い矢が貫き、身体を地面に縫い止める。

ユラノの短剣を囲むように、炎が——赤から紫へと至る七色の虹焰が生まれる。

アカリがユラノの腕を掴んで、やめると叫ぶ。

それでもユラノは呪文を止めない。虹焰が猛々しく揺らめいた。

……魔法が完成する。

ごめん、キララ。

——さようなら。

## 最終話

### 終章

「……やっぱり、ここに来てたんだね」

アカリは振り向きもせず、ああ、と小さく答えた。

崩れ落ちた床も、教会全体を覆う赤い氷も、突き立つ巨大な十字架も——何もかもが、あのときから変わっていなかった。ただ一つを除いて。

赤い氷の中に、一ヶ所だけぱかりと空いた場所がある。ちょうど人のかたちに空いた穴、それはキララが閉じ込められていた場所だ。

いまそこに、ひと束の花が置かれていた。

アカリはその前にじっと立ち、想いに沈むように目を伏せている。

「その花は……？」

「キララがあたしのために作ってくれてた薬、あるだろ」

「うん」

「あれを作るのに、使ってた薬草がつける花。……けっこう、きれいだよな」

「……そうだね」

真っ赤な花だった。燃え立つように花弁を広げ、しかしどこかはない——キララのような、そしてアカリのような雰囲気を纏った花。

「あたしがキララのことを忘れちゃったら、誰も覚えていないような気がしてな。だから、こんなことしてる」

寂しそうにそう言った。

「……僕も、覚えてるよ。ずっと」

「……ああ、そうだな。お前もきつと、忘れない」

初めてだったのだ。血約し、魔法を使って、そして初めて——殺

してしまったのが、キララなのだ。忘れるはずがない。

「キララのこと……」

後悔している。もっとやりようがあったのではないかと。

キララに魔法を撃ったときの感覚が、両手と心にこびりついて離れない。

「いいんだ、別に」

「でも」

このことについて、アカリと話すのは今が初めてだった。何度も話そうとしたけれど、きっかけが掴めなくて、一度も話すことができずにいたのだ。

「……いいんだ、本当に。だってな」

アカリは小さく、けどはっきりと言った。

「キララはまだ、生きてる」

「……え？」

「分かるんだ。——あたしとキララは、血が繋がってるんだから」

+

キララが消えた日から、もう数週間が経つ。

ユラノたちフリジア警備隊にも、それまでの日常が戻っていた。

しかし——

「ユラノ、また隷属<sup>スレイヴ</sup>吸血鬼来たって。西門のほう」

「分かった。すぐ行くよ」

「わたしたちは先行ってるね。行ってくるよ、プリスちゃん、ミオ」

「気をつけてくださいね」

「無理しちゃだめだぞ」

「大丈夫。いこ、カイ」

「うん」

「ユラノも。気をつけて——」

「分かってるよ、プリス。誰にも無理させたりしないから。……行ってくる」

——何もかもが元通りには、ならなかった。

「ちよつと数が多いかな……私たちの魔法は、数を相手するのは向かないからなあ。ね、カイ」

「うん……。もっと別の魔法、使えるようにしないと」

そう言つて、リンヤの腕を見る。心配そうな……そして、自分の無力を悔やむような表情。リンヤはそんなカイを見て、屈託なく笑つた。

「……まあ、私は大丈夫だから。ミオ特製の増血料理、毎日食べてるし。カイは遠慮なくやつちゃつてよ、ね？」

「うん……」

カイも微笑む。

ユラノはスレイヴたちの様子を見た。確かに数が多い。リンヤたちだけで駆逐するのは大変だろう、と思つた。

だつたら——。

「僕たちの出番だ」

「——ああ」

ユラノの隣に、片袖だけを外し腕を露にしたアカリが立つ。アカリが腕を軽くあげると、ユラノはそつとその手を取つて儀式短剣をあてがつた。そして小さく傷つける。血が流れ出し、短剣に通つた。告げる。

「——リンケージ 繫 血」

赤い光が粉を散らして炸裂する。強烈な輝きを帯びた魔力の路、赤い糸が、二人をしっかりと結びつける。そしてユラノは呪文を紡ぐ——

そして今、何週間かぶりにユラノはアカリとこの地、キララの消えた教会に立っている。

「この体に流れる血を通して、キララの力を感じる。生きてるっていう、息吹みたいなのが分かるんだ。……あれからあたし、血が止まるようになっただろ？」

「うん」

キララがいなくなった日を境にして、アカリの血は突然、しっかりと止まるようになった。だからこそアカリは、ユラノたちと共に警備隊の一員——そしてブリーデとして、街を守るようになったのだ。

「きつと、キララがそうしてくれてるんだ。……そうとは思えない」

「……そう、だね」

「キララは今も、どこかで生きてる。だったら、いつかまた会えるかもしれない。だから、それまでは——あたしは、あたしにできることをするよ」

アカリは空を見上げる。かつてとは違う、力強い視線。

「血が止まるようになったおかげで、あたしも皆に受け容れられるようになったしな」

ユラノはその言葉に、少しだけ異論を挟んだ。

「それだけじゃないよ。アカリが血を流して頑張る姿を、皆が認めたんだ」

「……そうなのかね。まあ、それはともかく。プリスたちが抜けた穴は、あたしたちが補ってやらないとな」

ユラノはその言葉に、しっかりと頷く。

「あと、リンヤとも、もう少し仲良くならないとな……」

「そっちは、うまく行ってるの？」

ユラノは、あまり二人が一緒にいるところを見たことがなかった。アカリは少し困ったような声を出した。

「いや……微妙。前に『一発殴らせて』って言われたから言う通りにさせたら、ぐーで殴られた」

「ええっ」

「それ以来は割と普通にしてくれてるけどな……あの子、ちょっとこえーな……」

あながち冗談とも言えない様子で呟くアカリ。矢を向けられたことは黙っておこうと誓った。

「あつ、いた！ ユラノ、アカリー！」

二人でびくりとして振り向く。噂の彼女、リンヤが笑顔で手を振っていた。隣には、相変わらず気弱な表情のカイ。その後ろからプリスとミオも姿を見せる。

「ん？ 二人ともヘンな顔して、どしたの？」

「いや……何でもない。リンヤたちこそ、どうしたの？」

これに、リンヤではなくプリスが答える。

「わたしたちも、キララのところに参ろうと思ってね」

以前に比べ、少し張りを無くした気がするプリスの声。落ち着いたとも言える。

それを聞いて、ユラノとアカリは顔を見合わせた。

「参る、って」

うん？ と不思議そうに首をかしげるプリスと、ミオ。

「えっとね——」

ユラノがアカリから聞いた話を伝えると、プリスたちはほっとしたような、けど少し泣きそうで申し訳なさそうな、複雑な表情でうなずいた。

「そっか……」

そう言つと、ミオと手を繋いで、自分たちが作り出した氷の十字架の下へ歩いていく。そして二人でじつとそれを見上げた。二人には、二人なりの感傷があるのだろう。

キララが消えた日を境として、プリスとミオは騎士と血約者でいることをやめてしまった。

ミオが傷付き倒れる姿が——そして、そうまでして倒さなければならなかった相手が本当は守りたかった人だったという事実が、プリスの心を折ってしまった。

プリスは短剣を捨て、ミオは指輪を外した。もう吸血鬼が来ても出撃することはない。ただ、新しく生まれた二組の騎士たちに、自分たちの経験を伝えて日々を過ごしている。

「プリスちゃんたち、少し、空気が軽くなった……かな？」

リンヤの言葉にうん、相槌を打つ。

「ここ、じっくり見たことなかったけど、きれいなとこだね。ねえカイ、あっち行って見ない？」

「あ、うん……うわ、待ってよリンヤ」

リンヤはカイの手を引いて崖の縁まで駆けて行った。そのまま二人で何かを話したり、じゃれ合ったりする。いい雰囲気だった。ユラノとしてはそれに思うところがないでもなかったが……いいことだ、と思う。

皆と離れた後で、アカリが染み入るように言った。

「……あたしが、こんな風にいられるなんて……」

風が吹く。赤い髪が翻り、陽光を反射してきらきらと輝いた。その中にはアカリの瞳から漏れ出る輝きもある。アカリには、どうも泣きぐせがあるようなのだった。

「それもこれも、みんな、お前のお陰なんだよな」

「そうかな」

「そうだよ。お前が血約しよって言うてくれたから……あたしは今、ここにいます」

そう言うのと、アカリはふいに振り向いた。

穏やかな、笑顔で——

「あたし一人じゃ何にもできなかったし、今だってそうだ……そしてこれからも、きっと色々あると思う。あたしはまだまだ馴染み切れてないし、吸血鬼を追い払うときには傷つけ合わないといけないし、他にも色んなことがあたしはまだまだ、だめだ。でもお前とな

ら、やっていけると思ってる。——だからその、ユ、」

頬を染めて一瞬口ごもる。まだ名前を言い慣れないのか、いつもこんな調子なのだ。

今はとくに、おかしくて——妙にかしこまった態度で。少し、笑ってしまう。

そんなユラノをむつとした顔で睨みつけると、アカリは照れ隠しのように勢いよく手を差し出してきた。

「まったく、ひとがせっかくいいことを言おうとしてるってのに」  
赤い顔で言われても、ぜんぜん迫力がないのだった。

「ごめん、アカリ」

そう言って手を取ると、アカリの顔が、そつと緩んだ。

「まあ、いいよ。ともかく——」

それはとても、安らかで……でも目じりにはわずかな涙の跡が残っていて、思わず見とれてしまうほどきれいな笑顔。

「これからも、よろしくな。ユラノ」

## 最終話（後書き）

（あきがき）

実は割と血が苦手なほうで、いくつになっても直視するのがおっかないままです。なんで血ってあんなに黒いんですかね…？ おっかなくね？ あと鉄くさいし…？ どろりとした…生命の輝きなのです？

ここまで読んでくださった方には大きな感謝を。

この話を読んでいた数時間、楽しんでもらえていたならこれに勝る喜びはありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6094f/>

---

血約騎士は涙のかわりに血を流す

2010年10月8日14時06分発行